御座田遺跡（みさだいせき）

—多目的広場・総合福祉センター建設に伴う発掘調査報告書—

2007年3月

峡北広域行政事務組合
韮崎市教育委員会
(財)山梨文化財研究所

御座田遺跡（みさだいせき）

—多目的広場・総合福祉センター建設に伴う発掘調査報告書—

2007年3月

峡北広域行政事務組合
韮崎市教育委員会
(財)山梨文化財研究所

序

御座田遺跡は、峡北広域行政事務組合で多目的広場・総合福祉センター建設にともない発掘調査された遺跡です。

当該地域は御勅使川と釜無川の合流地点にあり、遺跡の存在は薄いと考えられていた所ですが、韮崎市教育委員会の試掘調査によって江戸時代の遺物包含層および土坑が確認され、この調査結果を踏まえて、本調査を実施したところであります。調査では、江戸時代やそれ以前の中世にさかのぼる遺物や遺構が確認されました。その成果は本報告書のなかにあるとおりです。

遺跡のある場所は、小字御座田で、『甲斐国志』にはかつて「御座田村」があったとされ、付近には戦国時代治水関連の「堀切」という地名や「十六石」などの所在推定地があります。また、下条南割村に伝えられた江戸時代の絵図には「字御座田村古屋敷」とみえ、かつて集落が存在したことがうかがえます。地元の伝承でもかつて屋敷があったことを伝えており、竜岡町下条南割の越道は御座田から移り住んだ集落といわれ、唐土神社もその時に遷座されたとされております。御座田の北には小字古宮があり、かつての神社の存在をうかがわせています。

今回の発掘調査は、御勅使川と釜無川合流地点付近に存在した、御座田集落の一部を確認したものと思われます。調査はこれまで認識されなかった埋もれた地域の貴重な歴史を掘り起こすことになりました。この遺跡を文化財として、永く後世に伝えていく責務を痛感しております。本報告書を通して、先人の生活文化の一端に触れていただければ幸いです。

最後に、今回の調査並びに報告書作成にあたり、多大なご理解とご協力をいただいた峡北広域行政事務組合並びに関係各位に深甚な感謝を表する次第です。

平成19年3月14日

韮崎市教育委員会

教育長　**作　地　敏　久**

例　　言

1　本書は山梨県韮崎市龍岡町下條南割字御座田1895番地ほか所在の御座田遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は（仮称）総合福祉センター、多目的広場の建設整備に伴い、峡北広域行政事務組合より委託を受けて（財）山梨文化財研究所が実施し、発掘調査は平成18年5月8日～8月12日までの間行った。

3　本書の原稿執筆・編集は第4章を除き、櫛原功一が行った。

4　発掘調査における基準点測量、空中写真撮影、全体図作成業務は（株）テクノプラニングに委託した。

5　自然科学分析のうち、炭化種実、花粉分析、プラントオパール分析については（株）パレオ・ラボに委託した。砂礫分析については山梨文化財研究所地質研究室が実施した。そのほか、ウマ頭骨鑑定を植月学氏（山梨県立博物館）、ウマ歯鑑定を西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館）、人骨歯の鑑定を金井慎司氏（パリノ・サーヴェイ株式会社）にお願いしレポートを作成していただいた。記して感謝申し上げる次第である。

6　出土金属製品については山梨文化財研究所　保存処理室で保存処理を実施した。

7　本書に関わる出土品、記録類は韮崎市教育委員会で保管する予定である。

8　発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称略）。

高木智朗（唐土神社総代）、秋山千代男、秋山正基、斎藤秀樹・保阪太一・田中大輔（南アルプス市教育委員会）、坂本美夫・保坂康夫（山梨県埋蔵文化財センター）、八巻与志夫（山梨県立考古博物館）、保坂和博（山梨県文化財課）、望月秀和（笛吹市教育委員会）、三枝興業、（株）テクノプラニング、（株）パレオ・ラボ・新山雅広、金井慎司（パリノ・サーヴェイ株式会社）、西本豊弘（国立歴史民俗博物館）、植月学（山梨県立博物館）、塩谷風季（國學院大學大学院生）

凡　　例

1　遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標8系（原点：北緯36度00分00秒）、東経（138度30分00秒）に基づく座標数値である（世界測地系数値）。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北である。

2　遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

土坑・ピット	1：30
全体図	任意
遺　物	1：3

3　遺構平面図中の遺物記号は次のとおりである。

・　土師質土器、土器
●　陶磁器
■　石製品
▲　金属製品
◆　骨　類

4　遺構図版中の遺物間実線は接合した2点の接合関係を、破線は同一個体であることを示す。

5　土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』を使用した。

6　写真図版中の遺物番号は遺物図版番号、遺物観察表番号と一致している。

7　本書図1は国土地理院発行1/25,000地形図「韮崎」「小笠原」を使用した。

8　本文の註・参考文献については各章末にまとめた。

9　図版1・23・24については、韮崎市教育委員会より提供していただいた。

本文目次

序
例言
本文目次
挿図目次
表目次
図版目次
写真図版目次
第１章　経　過 …… 1
　第１節　調査の経過 …… 1
　第２節　発掘作業の経過 …… 2
　第３節　整理等作業の経過 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の方法と成果 …… 13
　第１節　調査の方法 …… 13
　第２節　層　序 …… 14
　第３節　遺　構 …… 14
　第４節　遺　物 …… 18
第４章　理化学的分析 …… 23
　第１節　韮崎市御座田遺跡を構成する堆積物の岩石鉱物組成
　　河西　学（山梨文化財研究所）…… 24
　第２節　御座田遺跡から出土した炭化種実
　　新山雅広（パレオ・ラボ）…… 28
　第３節　御座田遺跡の花粉化石群集
　　新山雅広（パレオ・ラボ）…… 30
　第４節　御座田遺跡のプラント・オパール
　　鈴木　茂（パレオ・ラボ）…… 32
　第５節　御座田遺跡の１号土坑出土歯牙について
　　金井慎司（パリノ・サーヴェイ）…… 34
　第６節　御座田遺跡出土のウマについて
　　西本豊弘（国立歴史民俗博物館）・
　　植月　学（山梨県立博物館）…… 35
第５章　総　括 …… 36
報告書抄録
奥　付

挿図目次

図１　御座田遺跡の位置 …… 4
図２　御勅使川扇状地地形分類図 …… 5
図３　御勅使川周辺の堤防遺跡 …… 9
図４　龍岡町周辺の遺跡分布図 …… 10
図５　御座田遺跡周辺と越道集落 …… 11
図６　調査区周辺図 …… 12
図７　調査区とその周辺 …… 13
図８　御座田遺跡深掘り地点の柱状図と試料採取位置 …… 24
図９　岩石鉱物組成 …… 26
図10　岩石組成折れ線グラフ …… 26
図11　堆積物試料のクラスター分析樹形図 …… 27
図12　試料採取地点付近の断層断面と試料採取層準 …… 32
図13　御座田遺跡のプラント・オパール分布図 …… 33
図14　出土歯牙 …… 34

写真目次

写真１　古宮Ａ地点の石造物 …… 6
写真２　古宮Ａ地点の石祠 …… 6
写真３　古宮Ｂ地点の相輪 …… 6
写真４　越道の唐土神社 …… 6

表　目　次

表１　土器陶磁器観察表 …… 20
表２　石製品観察表 …… 21
表３　土製品観察表 …… 21
表４　金属製品観察表 …… 22
表５　堆積物試料中の岩石鉱物 …… 25
表６　炭化種実出土一覧表 …… 28
表７　花粉化石産出一覧表 …… 30
表８　試料 1g 当たりのプラント・オパール個数 …… 33
表９　歯牙同定結果 …… 34
表10　ウマ歯計測値 …… 35

図版目次

第１図　Ａ・Ｂ区 …… 40
第２図　Ｃ区 …… 41
第３図　種別遺物出土状況 …… 42
第４図　御座田遺跡全体図 …… 43・44
第５図　遺物出土状況 …… 45・46
第６図　１号水田跡と周辺 …… 47
第７図　１～５号土坑と周辺 …… 48
第８図　１号溝と周辺 …… 49
第９図　土層（１号水田跡ほか）…… 50
第10図　１・２号溝ほか …… 51
第11図　１～３号土坑 …… 52
第12図　４～６号土坑 …… 53
第13図　４・５・14・15号溝 …… 54
第14図　４・９～12号溝 …… 55
第15図　６～８号溝、３～６号ピット …… 56
第16図　遺物（１号溝）…… 57
第17図　遺物（１号溝）…… 58
第18図　遺物（１・4・5・12 号溝、1 号土坑）…… 59
第19図　遺物（２～５号土坑）…… 60
第20図　遺物（１号水田周辺）…… 61
第21図　遺物（１号水田周辺、遺構外）…… 62
第22図　遺物（遺構外）…… 63
第23図　遺物（遺構外）…… 64
第24図　遺物（遺構外）…… 65
第25図　遺物（遺構外）…… 66

写真図版目次

図版１　１　航空写真（昭和 37 年頃か）
図版２　１　空中写真（東より、堀切橋を望む）
　　２　同（南より）
図版３　１　調査区全景（南東より）
　　２　調査前風景（複写）
　　３　同（南、堀切橋北側より）
図版４　１　１号溝完掘状況西側（東より）
　　２　同　凹石出土状況
　　３　同　東側
　　４　同　ウマ頭骨出土状況
　　５　同　歯の状況
　　６　１・２号土坑付近（南より）
図版５　１　１・２号土坑付近 (南より)
　　２　２号土坑（上面）
　　３　１号土坑（上面）
　　４　同　人骨出土状況
図版６　１　１号土坑人骨出土状況
　　２　宗源院の五輪塔
　　３　３・５号土坑付近の状況
　　４　３号土坑上面
　　５　同　下面
　　６　４号土坑
　　７　５号土坑
図版７　１　Ｃ区西側全景（東より）
　　２　同　調査風景（西より）
　　３　同　１号水田跡（西より）
　　４　同　水田写真（東より）
　　５　同　畦畔サンプリング地点
図版８　１　Ａ区調査風景（北より）
　　２　７号溝（西より）
　　３　11 号溝（南より）
　　４　４号溝（南より）
　　５　同（北より）
図版９　１　５号溝（西より）
　　２　９・13 号溝（東より）
　　３　14 号溝（西より）
　　４　Ａ区調査風景
　　５　同
　　６　同　刀子出土状況
図版10　１　Ａ区畝状遺構
　　２　見学会（2006 年 7 月 8 日）
　　３　堀切橋の看板
　　４　同看板の説明写真（接写）
図版19　出土した炭化種実（１）
図版20　出土した炭化種実（２）
図版21　出土した炭化種実（３）
図版22　御座田遺跡のプラント・オパール
図版23　ウマ頭骨・歯
図版24　古絵図（１）
図版25　古絵図（２）

第1章　経　過

第1節　調査の経過

峡北広域行政事務組合では平成18年度、韮崎市龍岡町に所在する環境衛生センターの西側隣接地に、地元の要望を受けて福祉センター、グラウンド等を整備することとなり、予定地内において平成18年3月、韮崎市教育委員会により試掘調査が実施された。

予定地は、御勅使川左岸、堀切橋北東側に広がる水田地帯である。堀切橋付近は御勅使川の流れを変えるために切り広げられたと伝えられ、予定地東側には治水遺跡として著名な「十六石（じゅうろくいし）」伝承地がある。付近の字名「御座田（みさだ）」は『甲斐国志』に登場する「御座田村」の遺称と考えられることから、中近世の集落遺跡として御座田遺跡が登録されている。御座田遺跡周辺では平成9・10年に建設省甲府事務所の依頼を受けて韮崎市教育委員会が十六石確認のための試掘調査を行ったほか、平成12年には環境衛生センター建て替えに伴い、韮崎市教育委員会により試掘調査が行われた。いずれの試掘でも残念ながら十六石は確認されておらず、また御座田村に関する遺構・遺物は確認されていない。

2006年3月28・29日の韮崎市教育委員会による試掘調査では、開発予定地全域を対象に試掘坑を29箇所設定し、重機で掘削し精査したところ、開発予定地内の北側にあたる環境衛生センター入口、十字路北東付近を中心に土師質土器などが出土し、2箇所の試掘坑からは土坑とみられる遺構が確認された。

試掘の結果、韮崎市教育委員会では開発予定地内北側を中心に本調査が必要と判断し、韮崎市、峡北広域行政事務組合で協議を行った結果、山梨文化財研究所に発掘調査を委託することとなり、平成18年5月より調査着手の運びとなった。

第2節　発掘作業の経過

2006年3月に韮崎市教育委員会により実施された試掘調査結果をもとに、本調査が必要な範囲が決定された。

発掘調査は2006年5月から8月の3ヶ月間実施された。調査地点はA～Cの3地点あり、調査区南側（A区）と農道をはさんだ西側（B区）では、福祉センターの建物予定地ということで面的に調査を実施した。A区とB区の境となる農道については、側溝の水路が北側の水田地帯への用水路であり、道路も福祉センター建設工事で使用予定のため、道路下については未調査とし、周辺から重要遺構が出た場合に部分的に調査を実施することとした。また北側（C区）では盛り土造成で駐車場となるため、擁壁の建設予定地の境界に沿ってトレンチ状に調査を行った。調査は建築工事の工程との兼ね合いからA・B区の建物部分を優先的に行うこととし、C区は後半で実施した。

調査は重機による表土剥ぎののち、じょれんがけ、基準杭打ちを行い、遺構確認、遺構調査をした。遺跡は扇状地の扇端部に位置することから、表土は粘土質の土壌で、乾燥すると非常に硬く、また雨が降るとドロドロとなって調査は難航した。また調査区の多くは近世以降を主とする水田跡で、重層的に水田面があり、調査面とする遺構面の把握が困難であった。C区では調査区隣接地に堰が流れていることから、雨天の増水時には漏水が調査区内に流入し、とくに1号溝では調査区壁が崩落するなどの事態がたびたび発生した。また調査区境に土坑、溝の続きがのびる箇所がいくつかあり、人力による拡張を行った。

（調査担当）櫛原功一
（調査補助）畑　大介
（発掘調査参加者）秋山高之助・秋山秀樹・伊井實・草間やよい・草間喜雄・工藤忠誠・窪田信一・小林森雄・島津雄・清水英二郎・醍醐三郎・手塚松雄・内藤陽子・野崎和男・萩原忠・宮川昌蔵・米倉悦子

（調査日誌抄録）

2006年5月8日（月）　環境衛生センター寄りの地点から重機による表土剥ぎを開始。
5月9日（火）　器材運搬。
5月10日（水）　器材運搬。プレハブ設置。
5月12日（金）　基準点設置。
5月15日（月）　グリッド杭設置。本日より作業員による鋤簾がけを開始。
5月24日（水）　重機により調査区外の地点で土層確認のために掘り抜き、土層観察を行う。礫のサンプリング。
5月25日（木）　以前調査区内にあった墓石を寺院に移転したという情報を得る。グリッド杭設置。

5月26日（金）　本日にて重機による表土剥ぎを終了。北側の調査区では脇の用水路から浸水があり、水抜きを行う。
5月30日（火）　環境衛生センターで打ち合わせ。
5月31日（水）　段丘際に石室があるという情報を得、除草したところ旧道脇に石室状の自然石を確認した。
6月5日（月）　北側で水田面らしき畝状遺構確認。
6月9日（金）　環境衛生センターにて打ち合わせ。
6月14日（水）　1号溝底部よりウマの頭骨出土。
6月15日（木）　1号溝覆土を試しに水洗したところ、炭化種実が含まれることがわかり、下層を中心に水洗選別することとする。
6月19日（月）　4号溝の掘り下げほか。
6月23日（金）　溝の写真撮影、実測など。打ち合わせ会議で工程を再確認する。
7月7日（金）　シートを片付け、見学会の準備をする。環境衛生センターから俯瞰写真撮影。
7月8日（土）　午前中10時より韮崎市教育委員会と合同で遺跡見学会実施。約120人参加。環境衛生センター2階にてプロジェクターで御勅使川の治水遺跡に関する説明をしたのち、現地を見学し、最後にプレハブ内で遺物見学をした。
7月19日（水）　1号溝の覆土の水洗作業（本日より8月7日まで）。
7月22日（土）　空撮のための清掃。
7月23日（日）　空撮準備、清掃の後、お昼過ぎにラジコンヘリによる空撮。道具の水洗など。
7月29日（土）　1号土坑の掘り下げ。畝状遺構の実測。
7月31日（月）　1号土坑人骨に関し、韮崎警察署の立会い後、人骨実測、取上げ。
8月7日（月）　1号水田の畦を完掘、実測、遺物取り上げ。道具片付けを始める。
8月9日（水）　土坑の調査、一部拡張、実測。撤収準備。
8月10日（木）　調査区の埋め戻しを造成工事側に依頼。プレハブ返却など。
8月12日（土）　1号水田のプラントオパール分析のため、埋め戻された畦断面を再確認し、断面図作成後、土壌をサンプリングする。その後、埋め戻しを行い現場での作業を終了とした。

第3節　整理等作業の経過

整理作業は、調査終了後、山梨文化財研究所で開始された。遺物洗浄、注記、接合を行い、図化遺物の抽出、実測、トレース、版組みという通常の作業を経て、2007年1～2月、図版作成、原稿執筆、3月、報告書刊行となった。

遺構の図面整理については発掘調査と同じソフト「遺構くん」で編集し、遺物ドット図の整理、遺構図の編集、図化を行った。

（整理担当）櫛原功一
（整理作業参加者）佐野靖子・日向シンティア・竜沢みち子・手塚理恵・小林澄子・田中真紀美

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

本遺跡は韮崎市の南端、龍岡町下條南割に所在し、釜無川と御勅使川合流地点に近い。釜無川右岸の氾濫原の最も御勅使川寄りにあり、このあたりを字御座田といい、遺跡名としている。御勅使川左岸、御勅使川が形成した小扇状地上の立地である。遺跡東隣りには最新式のゴミ処理施設をもつ環境衛生センター「エコパークたつおか」が建ち、さらに東側には韮崎市サッカー場がある。西側には段丘状を呈する龍岡台地が韮崎市街地方向に直線的にのびる。これは七里岩と同様に八ヶ岳崩落堆積土が釜無川の影響で削られて作り出された段差30～40ｍ程度の段丘崖地形で、台地上には下條南割地区の越道、真葛集落がある。遺跡周囲の釜無川右岸は、龍岡台地と釜無川にはさまれた一面の水田地帯となっていて、この一帯で収穫される米はブランド米「武川（むかわ）米」として有名である。水田のほかにはいく筋かの堤防が見えるのみで、現在集落はない。

遺跡南側、南アルプス市芦安方面から直線的に東流する御勅使川が龍岡台地を横切る地点を「堀切」といい、御勅使川には「堀切橋」が架かる。一般的には武田信玄の頃、釜無川左岸の「高岩（たかいわ）」に御勅使川の水流をぶつけるため、堀切付近の川幅を広げ、龍岡台地の段丘崖を掘削した地点といわれ、上流には「石積出（いしつみだし）」、「将棋頭（しょうぎがしら）」を築き、下流の釜無川合流地点には「十六石（じゅうろくいし）」を置いて御勅使川の流れを固定した。また釜無川左岸には「信玄堤（しんげんつつみ）」を構築し、甲府方面に釜無川が氾濫するのを防いだといわれる。

白根将棋頭については昭和62・63年に調査されたが、構築時期については不明確である。また十六石については現在所在地が不明であるが、地元の人によれば今回の調査区北東方向に戦後まで巨石があって、釣りをしたり、川遊びをしたりした場所として記憶されている。その後の水害によって完全に埋没したらしい。近年環境衛生センター北東で、建設省の試掘によって巨石が確認され、その地点に「十六石」の説明板が設置されているが、地元の人のいう地点とは数百ｍのズレがある。

堀切の東側にかけて御勅使川が形成した小扇状地が広がる。微細にみるとこれまで指摘されているように２面からなる複合小扇状地で、現在の流路側の北側小扇状地が新しく、南側小扇状地は北側小扇状地によって覆われていることからそれ以前の成立といえる。いずれも御勅使川によって形成された扇状地で、本調査区は北側小扇状地上に立地する。遺跡付近では小扇状地の堆積土が釜無川氾濫原を覆っていることから、調査区北西では袋状に入り込んだ水田となっていて、洪水時に水はけが悪く、地元では「池田」と呼ばれている。

さて御勅使川流路の変遷、堀切などの治水遺跡の構築については、確実な史料に乏しい信玄堤の構築時期を考えるうえで密接な関連があると考えられることから、さまざまな議論が行われてきた。そうした議論をいっそう活発にしたのが近年の考古学的成果で、中部横断道建設に伴う発掘調査をはじめ、御勅使川扇状地各地での調査によって考古学的データが蓄積され、流路の変遷とその時期について明らかになりつつある。ここでは『山梨県史　通史編　近世１』の叙述を参考にしつつ、御勅使川について整理しておく。

御勅使川は甲府盆地西縁に南北に連なる巨摩山地ドノコヤ峠（標高1518m）東麓から東流し、南アルプス市有野付近で甲府盆地に出て、直線的に釜無川に合流する。流長は18.8㎞と短いが、河川勾配は2.7%と日本屈指の急流といわれる。現在石積出があるあたりを扇頂部とし、釜無川に達する付近を扇端部とする扇状地が東側に形成され、東西7.5㎞、南北10㎞もの範囲に広がる。扇状地上にはこれまでに現流路を含めて５本の流路跡が確認されており、南から十日市場流路、下今井流路、御勅使川南流路、前御勅使川、本御勅使川と呼ばれる。遺跡の有無を手がかりに流路の時期を推定した成果によれば、次のようになる。

下今井流路　縄文時代晩期～弥生時代前期頃
十日市場流路　弥生時代後期～古墳時代後期
御勅使川南流路　奈良・平安時代～中世（15世紀末～16世紀初頭に大氾濫によって埋没）
前御勅使川　15世紀末～16世紀初頭以降（一時的に本御勅使川と併流しつつ、昭和７年に廃河川）
本御勅使川　16世紀以降

今回の調査区が立地するのは、本御勅使川流路によって形成された小扇状地上にあたり、16世紀以降形成といわれる流路に面した位置になる。御座田遺跡全体の分布範囲の主体は釜無川氾濫原にあるが、調査区は遺跡の南端に相当し、御勅使川流路の影響を直接的に受けた場所といえる。調査の結果、

図１　御座田遺跡の位置（1/50,000）

本報告にあるとおり15～16世紀代を中心とした遺物が出土していることから、16世紀以降の流路以前に小扇状地が形成されていたことは確実で、わずかに13世紀に遡る資料があることから、小扇状地そのものの形成は中世前半以前の可能性もある。

第２節　歴史的環境

本遺跡の近くには治水遺跡として著名な「堀切」「十六石」などの伝承地があり、さらに御勅使川、釜無川に目を向けると石積出、将棋頭、信玄堤があって、それらが武田信玄による一連の治水事業として一般的に理解されてきた。近年、そうした遺跡のいくつかに対して考古学的な調査の機会がもたれるとともに、全県下で悉皆的に行われた堤防遺跡の分布調査があり、構築時期をはじめとする検討、見直しが図られてきたところである。堀切の開削時期については『甲斐国志』、古絵図、文書等の史料、周辺遺跡の調査状況から山下孝司、斎藤秀樹が論考している（山下・斎藤 2002）。

また御勅使川周辺に分布する仲田遺跡、野牛島大塚遺跡、石橋北屋敷遺跡等では、中部横断自動車道建設、周辺道路整備等の際に山梨県埋蔵文化財センター、八田村教育委員会などにより調査が実施され、考古学的成果が蓄積されてきた。例えば百々遺跡の調査報告書の中では、今福利恵により考古学的成果をもとに扇状地の形成時期、流路の時期について考察されるなど、御勅使川治水史について考古側から積極的な研究が進められてきた。このように御勅使川扇状地の開発史研究の進展には目を見張るものがあり、ここ十数年の中で本県の考古学研究が果たした最も大きな成果として高く評価できる。そうしたなか、2004年にはシンポジウム『信玄堤の再評価』が開催され、信玄堤の構築時期、釜無川、御勅使川流路の変遷などに対して各方面から検討されている。総括的には、御勅使川の治水利水に関しこれまでの成果をまとめたものとして、『山梨県史　通史編　近世１』がある。

これまでの成果に基づき、堀切、十六石、御座田村を中心に御座田遺跡の歴史的環境について整理すると以下の通りとなる。

『甲斐国志』（1814年）によれば、「昔ハ御座田村アリテ西郡筋ヨリ韮崎宿へ出ル信濃路之ニ由リシガ水荒ノ後廃スト云」とあり、『国志』成立以前、「御座田村」が存在した。また村がかつて存在した記憶として、龍岡台地の直線的な段丘崖は「御座田山」と呼ばれていた（史料2）。また同史料によれば武

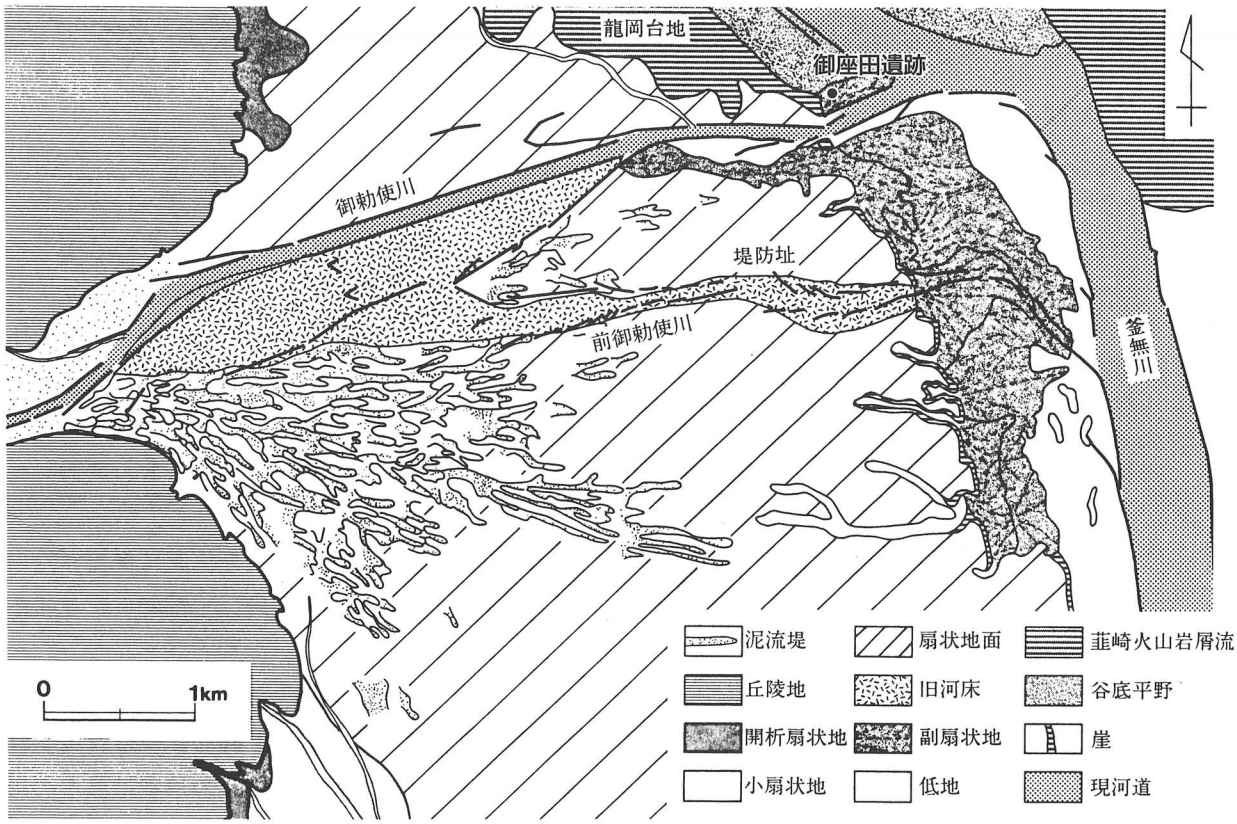


図２　御勅使川扇状地地形分類図（八田村ほか2000より、1/50,000）

田信玄の時、「大ニ水役ヲ興シ下條南割村ニテ岩ヲ鑿スルコト広サ十八歩」と堀切開削が行われ、上流の駒場、有野に「石積出」を築いて流路を竜王村赤岩（高岩）に当てるとともに、六科村に「圭角ノ堤」（将棋頭）を築き、釜無川との合流地点に「大石」（十六石）を並べ置いて、水勢を殺ぐとともに流れを南方へ向け、釜無川の対岸では竜王村に堤を築いたとされる。

堀切については、現地形をみると堀切橋付近を基点として小扇状地が形成されているが、それが堀切開削によって流路が固定されたために形成されたとする説のほか、堀切の流路形成は自然によるものと考える研究者も少なくない。

この小扇状地の時期であるが、南小扇状地については山梨県埋蔵文化財センターによる掘切の南側、「赤山」南で仲田遺跡の発掘調査が行われ、12 世紀末から 16 世紀の水田跡、神社関連の参道などが確認されたことから、12 世紀以降の土地利用を伺わせるほか、少なくとも 16 世紀には治水利水施設が整備された上で水田が営まれたことがわかった。

御勅使川の水を受けたという信玄堤については成立年代が定かではないものの、文書史料から 1560 年頃と考えられ、その頃に関連性の強い堀切が成立していたとされる。また現在、野牛島地内の前御勅使川地点に所在する板碑型石塔の銘文からは、野牛島が 1544 年時点で八田荘の所属とわかることから、現在と同じ位置に御勅使川が想定され、現御勅使川が八田荘と甘利荘の境となっていたと考えられるという（畑 1997）。

堀切についての初見史料とされる史料 1（1700 年）は、野牛嶋地内堀切の小山に出岩があり、除去すると御沙汰村（御座田村）が流失するのではないかと心配した訴状で、当時すでに「堀切」という地名が認められ、現地点に御勅使川が流下していたことがわかる。その後の史料である文化 3 年古絵図（1803 年）には、水田地帯の中に字名として「御座田村古屋敷」があり、家屋の表示がないことから村がなくなった後の状況を伝える。さらに『国志』では「昔ハ御座田村アリテ」、嘉永 5 年（1852 年）の史料 5 では「みざた村流跡」と記されている。

写真１　古宮Ａ地点の石造物

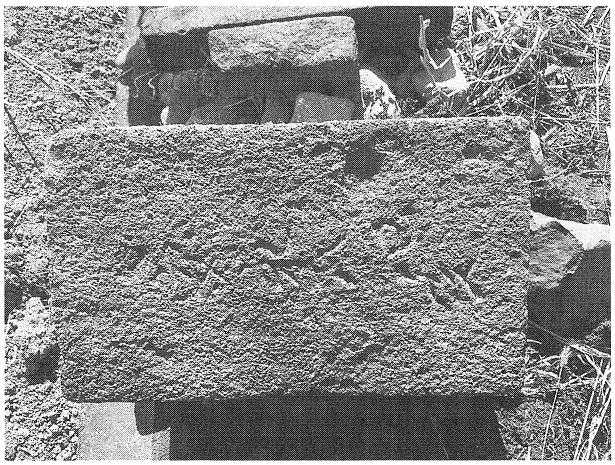


写真２　古宮Ａ地点の石祠側面

写真３　古宮Ｂ地点の相輪

写真４　越道の唐土神社

以上を整理すると、御勅使川は16世紀前半にすでに現位置を流れていたらしい。小山の出岩の除去について申請があった18世紀初頭には、御勅使川は堀切地点を流下し、その北側に御沙汰村が存在した。その時点で「堀切」という地名があることから推測すると、それ以前から堀切付近に流路があったことになる。その後、出岩が実際に除去されたかどうかは明らかではないものの、さらに堀切付近が開削され、御勅使川が現在の場所に固定されたことが考えられる。御沙汰村（御座田村）に関しては、19世紀初頭までの間に流失したか、水害を恐れて村全体が龍岡台地上に移転したと推測される。今日、赤岩周辺に出岩と呼びうる岩は見当たらないことから、小山の出岩は除去された可能性が高く、御勅使川は堀切地点でわずかに北側に振れて流下することから、出岩除去による開削により、御勅使川の流れが御座田村へ向いたのではないか。

地元の伝えによれば、現在、龍岡台地上の越道に所在する唐土神社は御座田村から移転したといわれる。龍岡台地下の水田地帯西端に唐土神社の故地とされる場所があり（図５）、付近の字を「古宮」という。『国志』には「往古ハ村ノ東幅下ト云処ニ在リシト云」（巻六十六　神社部第十二）とある。

また古宮の旧唐土神社南側には、やはり越道の高岩寺の故地がある。高岸寺自体は今日廃寺で、跡地が越道公民館となって墓地を残すのみであるが、やはり台地下から上へ移転したと伝えられている。高岸寺は『国志』によれば、曹洞宗都留郡谷村長生寺末である富岳山大照寺（大聖寺）の隠寮として記載されている（『国志』巻之八十四　仏寺部第十二）。

古宮近辺にかつて集落があったことを示す事例として水田中の２箇所に若干の石造物が残る。図５－Ａ地点には石祠一式分（屋根１、身舎１、柱２）、五輪塔地輪２、火輪１が農道脇に集められ、図５－Ｂ地点には水田畦上に宝篋印塔相輪１が置かれている。そのうちＡ地点の五角形の穴が開いた石祠身舎には、側面に「宝永八巳亥」（1779年）と刻まれていることから、仮に付近から掘り出されたものであれば18世紀後半まで集落があったことを物語る貴重な資料といえる。また今回の調査区内、環境衛生センター進入路北側の水田中には五輪塔と思われる石造物が複数存在し、平成10・11年ころ宗源院（龍岡町下条南割）へ移動したという話を地元の方からうかがった。宗源院境内には無縁仏となった石造物をまとめた一角があり、その中に五輪塔火輪が積み上げられている（写真図版６－２）。ただし、それが移動した石造物かどうかは未確認である。今回の本調査では、墓石があったとされる地点付近から、中世土坑墓ほか配石土坑が複数検出され、墓域であったことが判明した。

そのほか、周辺の石造物としては古宮から越道へのぼる段丘崖の坂の途中に五輪塔空風輪１、台地上に上りきった場所に近年移転されたらしい庚申塔（安永４年、1775）１がある。越道集落には石造物が点在し、集落の中心にあたる道祖神場の基壇には文化8年(1811)、集落内の庚申塔には弘化2年(1845)の刻字が認められる。さらに古宮から移転したといわれる唐土神社境内には鳥居、石祠に記年銘が見られる。まず鳥居額裏には享保18年（1733）、その両脇の石灯篭（御神燈）には嘉永４年（1851）とある。拝殿両脇には南北に計11の石祠が並ぶが、年号の記された資料としては古い順に享保７年（1722）、享保10年(1725)、元文３年(1738)、寛延４年(1751)、天明２年（1782）、寛政12年（1800）、弘化３年（1846）がある。

唐土神社には現在、天明７年(1787)宝殿建立棟札、文久２年（1862）造営棟札、文久２年（1862）屋根替棟札の３枚の棟札が保管されている。このうち天明７年棟札は、「奉遷宮唐土大明神」とあることから、その年に神社が遷されたことがわかる。周辺の石造物との関連をみると、石祠には天明７年以前のものが多く、鳥居もそれ以前の年号である。集落内には天明７年以降のみとなっている。集落および神社が古宮付近から移転してきたものであれば、その時期は古宮の石祠記年銘の年号から唐土神社遷宮まで、1779年から1787年までの間に絞ることができる。そうした仮定に立つならば、境内の鳥居をはじめとするそれ以前の石造物については遷宮に伴って移動、設置されたものと推定でき、石灯篭はその後の新設と判断される。また集落内の石造物は1787年以降の年代に収まり、集落移転による越道集落の成立時期との整合性はある。よって1779～1787年の間に御座田村が越道へ移転した可能性が高いといえる。

集落移転の要因となったのは水害であることから、以下に甲府盆地を中心とした18世紀後半から19世紀初頭の水害史について、『山梨県史　通史編３　近世１』から引用しておく。

宝暦１（1751）閏６月笛吹川出水。

宝暦２（1752）笛吹川筋で破堤。

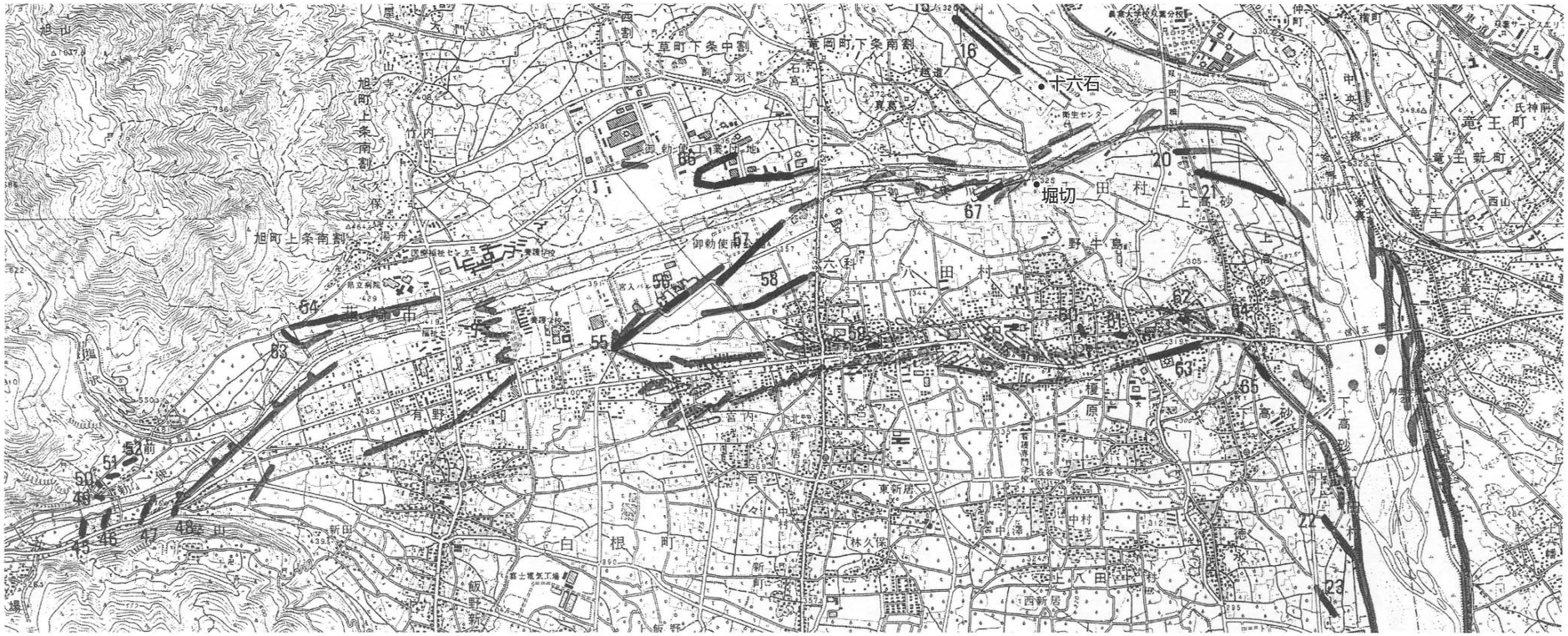
宝暦３年（1753）秋、荒川、釜無川で出水、山崩れ。笛吹川筋で破堤。
宝暦５年（1755）春、釜無川筋出水。
宝暦７年（1757）４月21日～５月６日大雨、釜無川、御勅使川、笛吹川筋満水、河口湖満水。
宝暦９年（1759）釜無川出水。
宝暦13年（1763）４月３・４日御勅使川筋出水。
明和１年（1764）秋、釜無川出水。
明和２年（1765）４月16日、７月24日、８月３日釜無川出水。春～秋中たびたび釜無川・御勅使川筋満水。
明和４年（1767）秋、釜無川出水。
明和８年（1771）８月22日釜無川出水。
安永１（1772）８月２日大風雨、釜無川出水。この年河口湖満水。
安永２年（1773）６月16日～19・23日大雨、釜無川筋出水。
安永８年（1779）８月24･25日大雨、釜無川筋出水。
安永９年（1780）６月・秋中、釜無川たびたび出水。この年富士山雪代発生。
天明１年（1781）釜無川筋水難。
天明２年（1782）釜無川筋水難。
天明３年（1783）釜無川出水。
天明５年（1785）郡内地方出水。河口湖満水。
天明６年（1786）秋、釜無川、笛吹川出水。
天明７年（1787）６月26日笛吹川筋出水。
寛政１年（1789）夏、釜無川出水。
寛政２（1790）７月末より雨続き、８月19・20日大雨風、釜無川、笛吹川、荒川など出水、破堤。
寛政３（1791）夏、釜無川出水。８月６日大雨風。国内各所出水。８月中、笛吹川筋たびたび出水。この年河口湖満水。
寛政４年（1792）７月釜無川出水。８月笛吹川破堤。
寛政６年（1794）２月29日大雨風。富士山雪代発生。
寛政８年（1796）８月12日大雨風、釜無川・笛吹川筋など出水。
寛政10年（1798）４月、釜無川筋出水。
寛政11年（1799）秋、釜無川筋出水。
享和１年（1801）２月６日大雨、富士山雪代発生。６月29日大雨風。釜無川筋出水。７月４日、８月６日釜無川筋出水。
享和２年（1802）６月29日大雨、釜無川・笛吹川筋出水。
享和３年（1803）８月大雨、釜無川破堤。
文化１年（1804）８月27日～30日大雨風。釜無川・笛吹川筋出水。
文化２年（1805）５月19日釜無川出水。

これらの記録のうち、御座田村移転時期に該当するのは天明年間を中心に８回あり、その頃甲斐国内は毎年のように水害の被害を受けていたことがわかる。釜無川筋に限ると安永８年（1779）、安永９年（1780）、天明１年（1781）、天明２（1782）、天明３年（1783）、天明６年（1786）があげられる。この時期、全国的にも天明３年の浅間山大爆発をはじめ、暖冬、冷害など異常気象による天明の大飢饉の最中であった。水害を直接のきっかけとしつつ、大飢饉の影響で集落が消滅した可能性もある。

そのほか集落移転に関しては万延２年の文書（史料６）が知られている。内容としては万延元年の下条南割村の堤流失について記すとともに、「然処右五番下之義素丶田畑は勿論人家も有之候場所ニ候処前丶度丶之水難ニ而人家は高台江引移リ候次第其後ニ至」とあり、かつて五番堤下に人家、田畑があったが、度重なる水害によって集落が高台へ移転したことを記す。五番堤の位置は御勅使川、釜無川合流地点の釜無川右岸、十六石推定地寄りの堤（図３－16）で、史料６と年代が近い史料５の絵図では「五番」堤と「十六石」の中間に「みざた村流跡」の文字及びその範囲が図示され、絵図と文書史料の説明がほぼ一致する。現在の字図でも、小字名「御座田」は御勅使川・釜無川合流地点の先端、五番堤と思われる堤の南側隣接地の範囲である。つまり御座田村が存在したのは字御座田を中心とする場所で、今回の調査区北側に相当する。

唐土神社、高岩寺があったという古宮方面と御座田村との関連はよくわからないが、集落と寺社がともに台地上に移転したとすれば、御座田村の範囲として捉えることができる。ひとつ疑問に思うのは、なぜ水害常習地帯ともいえる御勅使川、釜無川合流地点に御座田村が位置するのかという点である。推測ではあるが、16世紀代に本御勅使川が成立する以前には、御座田付近は合流地点ではなく、釜無川右岸の一村落として安定的な立地であったのかもしれない。そうだとすれば御座田村は中世以前に遡る村で、御座田村が水害を受けるようになったのは御勅使川流路が現在地に移動した結果といえる。また十六石は、御座田村を御勅使川の氾濫から守る目的で設置された可能性もあるといえる。

図４に御座田遺跡周辺の遺跡分布図を示す。龍岡台地下の釜無川氾濫原には幾本もの堤防遺跡が存在



16　釜無川　堤防
20　旧御勅使川　堤防
21　旧御勅使川　堤防
22　釜無川　堤防
23　釜無川　堤防
45　旧御勅使川　石積出１番堤
46　旧御勅使川　石積出２番堤
47　旧御勅使川　石積出３番堤
48　御勅使川　堤防（明治年間築造）
49　旧御勅使川　堤防
50　御勅使川　堤防
51　御勅使川　堤防
52　御勅使川　堤防
53　御勅使川　堤防
54　御勅使川　堤防
55　御勅使川　白根将棋頭
56　御勅使川　堤防
57　御勅使川　堤防
58　御勅使川　堤防（旧水路か）
59　旧御勅使川　堤防
60　旧御勅使川　堤防
61　旧御勅使川　堤防
62　旧御勅使川　堤防
63　旧御勅使川　堤防
64　旧御勅使川　堤防
65　旧御勅使川　堤防
66　旧御勅使川　竜岡将棋頭

図３　御勅使川周辺の堤防遺跡（山梨県 1998 より引用、一部改変）

D-1　御座田遺跡　中・近世
D-2　御座田一番堤
D-3　御座田ニ番堤
D-4　御座田三番堤
D-5　古宮一番堤
D-6　古宮ニ番堤
D-7　阿寺沢一番堤
D-8　出水一番堤
D-9　清水久保一番堤
D-10　清水久保ニ番堤
D-11　清水久保三番堤
D-12　道白島一番堤
D-16　上ノ久保遺跡　縄文
D-20　宮本遺跡　縄文
D-21　長塚道下遺跡　縄文・弥生・古墳・平安
D-27　長塚道上遺跡　縄文・近世
D-28　長塚道上第２遺跡　平安
D-29　堀切遺跡　中・近世
E-21　下馬城遺跡　縄文
F-1　真葛遺跡　縄文
F-12　龍岡将棋頭

図４　龍岡町周辺の遺跡分布図

図５　御座田遺跡周辺と越道集落

し、集落遺跡として周知されているのは本遺跡のみである。一方、龍岡台地上には多数の集落遺跡が分布する。

御座田村に関する資料

（史料１）『甲斐国志』（1814）（巻之四十八　古跡部第十一　巨摩郡武川筋）

「御座田・越道下条南割村　御作田ガ古宅ナリトモ云甲州嘶ニハ御勅使川ヘ防河ノ使アリシ時此所ニ会シテ評定アリ故ニ御沙汰ト名クトアレドモ其事分明ニ伝ハラズ越道ハ坂路ノ名ナルベシ」

（史料２）「甲斐国志』（1814）（巻之三十　山川部第十一　巨摩郡武川筋）

「御座田山　下條南割村ノ東ニ在リ長陵堤ノ如ク釜無川ニ沿フ此ヨリ上ニテハ片瀬山トモ呼ブ西北ハ舟山・茅ガ岳・八ガ岳、東北ハ金峯山・及ビ逸見ノ諸村、西ハ駒ガ岳、其南ハ白峰東南ハ富岳皆ナ寸眸ニ囲ムベシ景象清幽ニシテ画クトモ成ラザルベシ此山下ニ昔ハ御座田村アリテ西郡筋ヨリ韮崎宿ヘ出ル信濃路之ニ由リシガ水荒ノ後廃スト云又御勅使川ノ釜無川ニ会スル処ニ十六石ト云アリ大ナル者ハ長サ一丈二尺広サ六尺許ナルベシ旁近辺ハ凡テ白砂細石ニシテ絶テ巨石ナシ唯此石アルノミ異トスベシ相伝フ信玄ノ時役ヲ興シテ此処ヨリ御勅使川ヲ上ルコト四百歩許西郡筋ノ野牛島界ニテ岩石ヲ斫鑿スルコト広サ十八歩以テ御勅使川ノ水ヲ分チ引ク其奔流シテ釜無川ニ会スル所ニ此石ヲ並置テ以テ其水勢ヲ殺グト云今ハ砂中ニ埋リ纔ニ鼻端ヲ見ルノミ又天神森ノ南崕御勅使川ニ臨ム所ヲ硫黄岩ト云」

（史料３）千野家文書（山梨県立博物館蔵）元禄13年（1700）５月23日付訴状

「ミてい川通り堀切と申所ニ野牛嶋村分小山与申所御座候右小山ニ出岩御座候ニ付（中略）右之場所切取申候へハ下条南割分御沙汰村並田地共流可申与奉存候」

（史料４）「巨摩郡下条南割村差出絵図」（文化３年

(1806))

「字御座田村古屋敷」

(史料5)「巨摩郡野牛嶋村遠藤堰井路並水揚口争論場所御見分用絵図」 嘉永5年(1852) 4月 山梨県立博物館蔵)

「みざた村流跡」

(史料6)

千野家文書(山梨県立博物館蔵)「甘利庵御用留」万延2年(1861))

「甲州巨摩郡下条南割村役人一同奉申上候昨申年中大雨出水ニ而私共村方定式御普請所御堤数ヶ所及切所前囲類夥敷流失仕リ候ニ付(中略)然処五番下之義素丶田畑は勿論人家も有之候場所ニ候処前丶度丶之水難ニ而人家は高台江引移リ候次第其後ニ至而も十六石上又は十六石と唱候御堤其外水刎御普請数多被仰付候処数遍之水難にて皆流失仕(後略) 万延二酉年正月 下条南割村 御普請御掛り御役人中様」(菊島1981より引用)

(史料7)「竜岡村分間図」明治28年(1895)

「字御座田」

(引用参考文献)

八田村誌編纂委員会1972『八田村誌』

韮崎市誌編纂委員会1978『韮崎市誌』

菊島信清1981『釜無川の水害』サンニチ印刷

清水小太郎1989「武田治水史(その1)」『将棋頭跡・須沢城址』白根町教育委員会

畑大介1997「御勅使川の流路変更に関する一視点」『帝京大学山梨文化財研究所報』31

山梨県教育委員会1998『山梨県堤防・河岸遺跡分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第152集

八田村教育委員会・山梨県甲府土木事務所2000『野牛島・大塚遺跡』八田村文化財調査報告書 第2集

山梨県教育委員会・建設省甲府工事事務所・日本道路公団東京建設局2000『石橋北屋敷遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第178集

韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会2001『御座田遺跡』

山梨県教育委員会2001『仲田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書187

山下孝司・斎藤秀樹2002「御勅使川「堀切」成立史の検討」『山梨文化財研究所報』43

山梨県2004 山梨県史資料叢書『山梨県棟札調査報告書 国中Ⅱ』

山梨郷土研究会・山梨県考古学協会・武田氏研究会2004『信玄堤の再評価』

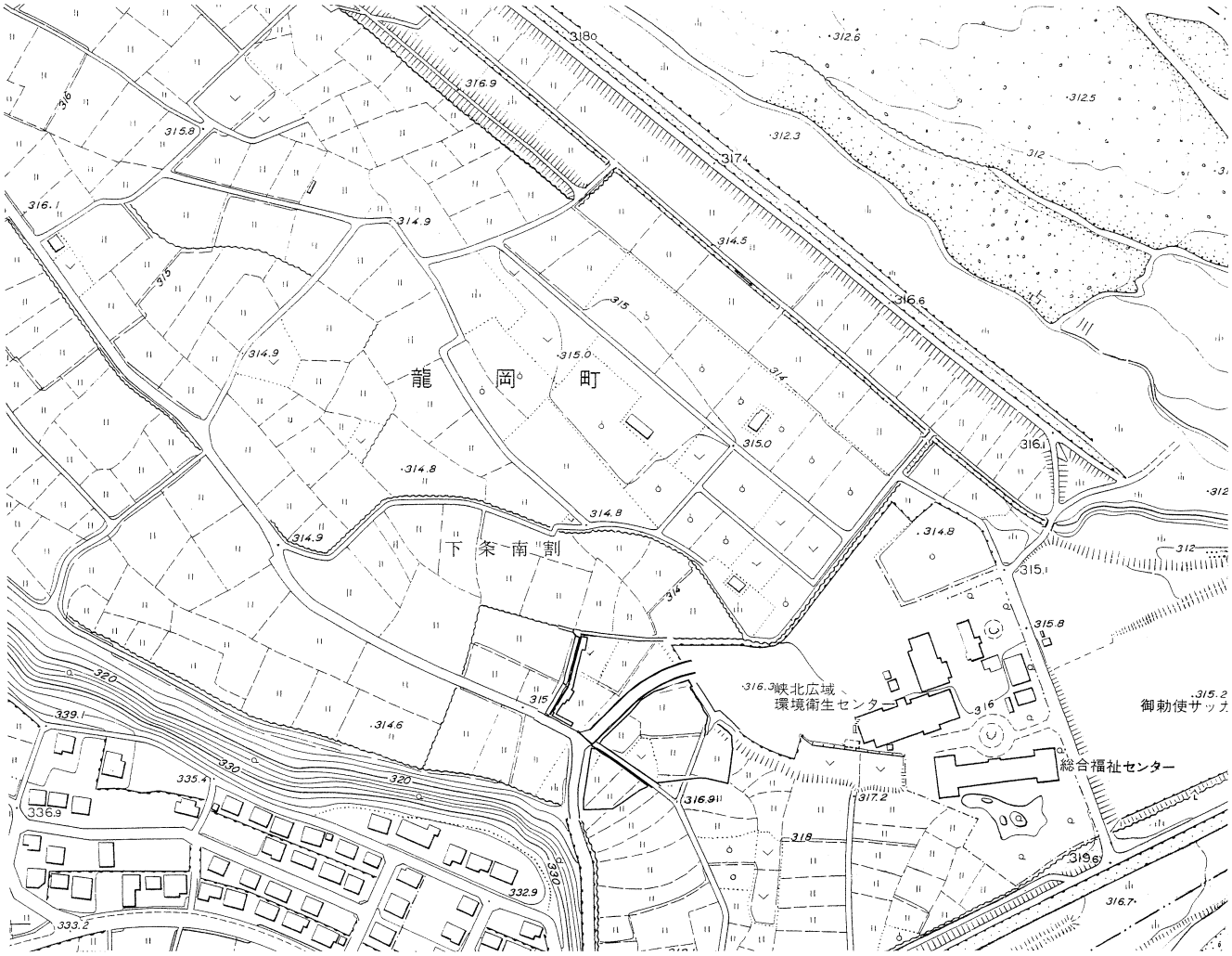


図6 調査区周辺図(1/2,500)

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

重機による表土剥ぎののち、基準点を設置し、国家座標に基づき、5m メッシュで杭打ちを実施した。調査区全体を覆うようにグリッドを組み、南西隅を基点として、北方向をＸ軸、東方向をＹ軸とし、遺構の実測、遺物の取上げを行った。

遺構の種別は溝、土坑、ピット、水田跡、畦畔、畝状遺構で、墓坑程度の大きさの穴を土坑、それ以下の径の小さいものをピットとした。

遺物は微小遺物を除き、基本的には全点ドットで記録した。実測にあたっては光波測量機をノートパソコンにつなぎ、屋外でパソコン操作によって遺物取上げを行った。ソフトはアイシン精機の「遺構くん」で、番号は通し番号とした。遺物の最終番号は

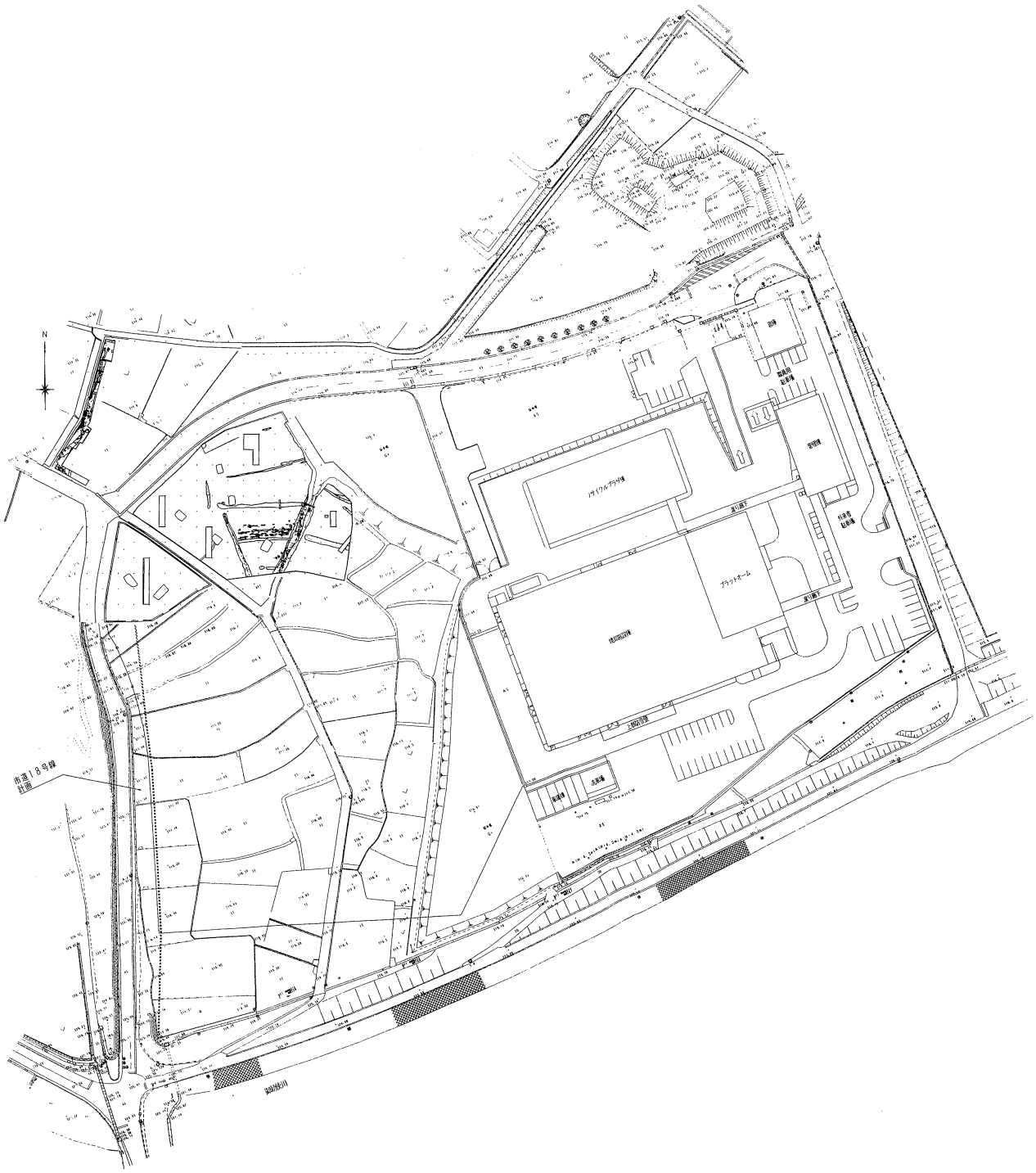


図７　調査区とその周辺（1/2,000）

2167である。

遺構図の作成も同様に「遺構くん」を用いて行った。土坑の平面図、ウマの頭部の微細図は10㎝メッシュで水糸を張った枠板を用い、手取りで図化を行い、整理の段階でスキャナーで読み込んで、パソコンの画面上でトレースしたものを「遺構くん」の画面に貼り付け、合成した。

土坑・溝は断面観察ののち手取りで断面実測を行った。礫などの実測は、光波で粗図を作成したのち、デジカメ写真と比較しながら「遺構くん」の画面上で線の修正を行った。

全体がほぼ調査終了した段階で全体写真をラジコンヘリで撮影し、全体図（1／100）の図化を写真実測によって実施した。それらのデジタルデータについても「遺構くん」の光波データと合成した。

第２節　層　序

A区南壁について地表面から遺構確認面までの断面観察を行い図化したほか、表土剥ぎの際にB区南の調査区外で重機によって深掘りを行い、約3.3m掘り下げて東壁面を断面観察、略図作成をした（深掘り地点）。深掘り地点の下層は砂礫の互層をなし、崩落しやすい状態であったが、どこの河川起源による砂礫で構成されているのか分析するためにサンプリングを行った。深掘り地点での分析結果については第４章第１節に譲るが、表土以下には大きく４面の土壌があり、その間が砂層、あるいは礫層となっている。単純に考えるならば過去において４度以上の水害による土砂堆積があったということがわかる。いずれも御勅使川起源の堆積礫で、龍岡台地を流れる御勅使川支流の割羽沢起源ではない。

第３節　遺　構

ここでは調査地点別に概要を記し、検出された遺構について遺構別に説明する。

A区

環境衛生センター進入路の南側に隣接する水田で、堀切橋付近を基点に南から北側へ向かって形成された御勅使川の小扇状地の扇央部から扇端部に相当する。北側が低く南側が高く、比高差１mの緩やかな斜面である。現水田の畔とほぼ一致するように溝が検出されたほか、進入路（農道）下からも溝が検出されるなど、計12本の溝が見つかった。ピットは４本検出されているが、建物の柱穴ではない。数ヶ所にトレンチを設定し、下層の状況を確認したほか、中央付近ではグリッド単位で全面的に掘り下げたところ、中央にあたるF12からF15グリッド付近で畝状遺構が見つかり、水田、あるいは畑の耕作痕と考えられた。また土層観察を調査区南壁で東西方向に行っている。

B区

A区の西隣接地で、農道で隔てられている。北側は龍岡台地ぎわの道路までで、道の西側は龍岡台地の段丘崖となる。A区との境になる農道は、南アルプス市八田方面と韮崎市舟山橋方面をつなぐ釜無川氾濫原を通る古道で、この道沿いにかつての御座田村もあったと思われる。調査区内北側は道路新設時の撹乱が著しい。全体的に遺物量は少なく、遺構は確認できなかった。壁際に水抜きを兼ねてサブトレンチを巡らし、調査区内にも数ヶ所のトレンチを設定して下層の状況を調べたが、下層ではほとんど遺物が出土していない。

C区

A区の北側、環境衛生センター進入路を隔てて隣接する水田で、扇状地の最端部にあたる。釜無川氾濫原の水田面よりはわずかに高いことから、釜無川氾濫原ではなく、御勅使川の小扇状地上面に位置する。この点については、C区内１号溝壁面に露出する礫層が黒色の礫を主とし、御勅使川起源の礫であることからも裏付けられる。C区は駐車場予定地で、その擁壁工事で開発を受ける部分のみの調査であった。調査区は車道脇の用水路（堰）に沿ったL字状のトレンチで、幅２m、長さ約45m。もとの地権者の話では、かつて水田中、東端付近に石造物があり、平成10～11年頃、国道52号線沿いにある宗源院へ移したとのことである。話によれば五輪塔らしい。調査区壁面で層序を確認するとともに、壁際にサブトレンチを入れ、水抜きのための排水溝を兼ねた。調査区脇には水田への用水路（堰）があり、降雨時に堰の水量が増すと調査区内に漏水するため、壁面が数回にわたり崩落した部分がある。当初の予定調査区境を越えてのびる１号溝については、一部人力で調査区を拡張したところ、溝の東端部を確認することができ、また拡張部分で人骨を伴う１号土坑などを検出することができた。以上、区で検出された遺構を整理すると溝４本、土坑６基、水田および畦畔１本である。

調査区全体で検出された遺構は土坑５基（１～５号土坑）、水田跡（１号水田跡）および畔（１号畦畔）１箇所、溝16本（１～17号溝、３号溝は欠番）、土

坑6（1～6号土坑）、ピット6本（1～6号ピット）である。以下、遺構別に説明する。

1号土坑　C区M2グリッド。1号溝北端、2号土坑隣に位置する。土坑の平面形は、底面では隅丸長方形、上部は不整楕円形で、長軸長1.53 m、短軸長1.1 mである。土坑の長軸方向はN-13°-E。底面は遺構確認面から70cm下がり、ほぼ平坦である。底面には非常に遺存状態の悪い人骨1体分が検出された。頭位方向は北、顔面西向きで、腕、脚ともに折り曲げた、いわゆる北枕西向き横臥屈葬人骨である。掘り方が長方形であることから棺に納められて埋葬された可能性もあるが、直葬とも考えられ、定かではない。骨のうち遺存した部分は頭骨、上下顎骨、歯、上腕骨、橈骨（尺骨）、大腿骨、脛骨で、それらは腐食した木片のように柔らかく、いずれも取上げの際にばらばらに破損してしまった。出土状況からの推定身長は約150～160cm。頭骨付近から回収した歯についての鑑定結果については第4章第7節のとおりで、熟年層（40～59才）の可能性のある人骨であり、性別は不明。土壌を水洗するなどして微細遺物を探したが、皆無であった。ただし覆土上層からは内耳土器の破片など中世の土器片が少量出土し、中世の墓坑であることがわかる。かつて石造物があったとされる場所とはやや離れているものの、この一帯が墓域であったことを証明する遺構である。なお、長方形の掘り方内に屈葬人骨を伴う事例について、近くでは御勅使川対岸の石橋北屋敷遺跡から多数検出されており、溝を伴う区画内に墓域としてまとまっている。本遺跡では限られた調査区のために不明確ではあるが、石橋北屋敷遺跡と類似したあり方を想定できる。

2号土坑　C区M2グリッドにあり、1号土坑の北隣りに位置する。直径1.25×1.1 m、深さ30cmの楕円形集石土坑。主軸方向はE-35°-N。10～30cm程度の礫が20数個入れられていたが、意図的な石組みではなく、3・5号土坑のような配石でもない。無造作に詰められているといった感じであった。人骨はなく、隣の1号土坑に比べると浅いことから、1号土坑とは違った性格ではないかという印象を与える。ただ規模、平面形態は1号土坑に類似し、3～5号土坑とほぼ同じ深さであることから、墓坑の一種とみておきたい。

3号土坑　C区N2グリッド。調査の最終盤に西側の調査区境にかかるようにして検出された。約半分を検出したが、残る半分については堰下へのびていたことから調査は不可能であった。平面形は半楕円形であるが、推定では隅丸方形、あるいは楕円形で、壁に30cm程度の扁平な礫を並べた配石土坑である。配石部分はやはり約半分のみの検出にとどまり、全貌は見えていない。土坑の規模は長軸長1.8 m、短軸長1 m以上、深さ30cm。配石の向きからすると主軸方向はN-23°-Wか。数cmの炭化材のほか、未焼成の骨片がわずかに礫の間、礫上から出土している。配石を伴うことから土坑墓と考えられ、副葬品はないものの、中世墓の一類型と考えられる。

4号土坑　C区O3グリッド。1号畦畔の南端にあり、調査の最終盤に調査区境から検出された。3号土坑と同様に丸みを持つ扁平な河原石6個以上を用い、土坑中央に蓋石状に並べている。一部は内部空間を保つように並べられていることから、石室状の配石を意図したものと思われる。北側をやや掘りすぎているが、推定長軸長2.2 m、短軸長0.65 mで、半楕円形である。主軸方向は配石の並びからN-11°-Eと思われる。人骨、副葬品は出土していないが、3・5号土坑などと同様に中世の配石墓と考えられる。

5号土坑　C区M2グリッド。3号土坑の南隣。調査の最終盤に調査区境で検出された。3・4号土坑同様の配石土坑であるが、3・4号土坑よりも礫の並びは明確ではない。調査区境で確認した断面セクションによれば、上層に2号溝が位置する。長軸長1.75 m×短軸長0.6 m、深さ20cm程度で、半楕円形。主軸方向は不明であるが、長軸長方向であればN-27°-E。20cm程度の礫を壁際に並べた配石で、3号土坑よりも小振りの礫を用い、壁際に立てかけた様子はなく、4号土坑のように石蓋は用いていない。人骨、副葬品ともに出土していないが、やはり中世の配石墓と考えてよいであろう。

6号土坑　C区N3グリッド、3号土坑南側に位置する。径70×85cmの楕円形で深さ15cm。長軸方向はN-11°-E。上層に礫が数個分布する。遺物はとくになし。土坑群中にあることから、小型の土坑墓の一種か。

1号水田跡および1号畦畔　C区P3～R4グリッドに位置する。長さ14 m、幅50～80cm、高さ約25cmの直線的な畦（1号畦畔）で、北端が西側に屈曲し、調査区外に伸びている。当初、畦上層において酸化した帯状の変色部が認められ、溝として掘り下げたが（3号溝）、下層で逆堆積状に広がったため、擬似畦畔と判断し、3号溝は欠番とした。擬似

畦畔に対して東西のサブトレンチを３本設定した結果、下層に灰黄褐色粘土からなる畦状の高まりが連続的に南北に存在することがわかったため、畦として残し、周囲を掘り下げた。畦の南脇には中央付近に溝状の落ち込みが伴い、17号溝とした。畦が回り込む西側については、水田区画と考えられることから、１号水田とした。なお実際に水田として利用されたかどうかを確かめるため、畦が調査区西壁にぶつかる断面でセクション観察し、土壌サンプリングを行って、プラントオパール、花粉分析を依頼した。その結果については第４章第3･4節のとおりで、イネのプラントオパールが多量に検出され、水田であったことが確かめられている。遺物については畦の両側および北側からの出土品を１号水田周辺出土遺物としてまとめたが、中世の土師質土器、内耳土器片がやや多く出土した。畦北側では用水路側に向かって傾斜し、上層からやや大型の礫がまとまって出土した。また土師質土器皿がかとまって出土している。以前、この付近に石造物があったということから配石墓に関わるものとも思われたが、土坑状の掘り方はない。畦下層を掘り下げたところ、畦中、下層からも若干の遺物が出土した。周辺の出土遺物とほぼ同様な土師質土器片が出土している。

１号溝　Ｃ区南側、K1～L2グリッド。遺構確認によって調査区を斜めに通る溝状の落ち込みがぼんやりと確認されたため、調査区境にサブトレンチを入れて溝底面まで掘り下げた。溝確認面で見つかったピット１・２の調査後、東西にベルトを残して全体を掘り下げた。その過程でＫ１グリッドの溝底部付近からウマ頭骨が検出された。骨は正位に置いたように出土し、当初、溝底面のピット状の掘り方内に埋納されたものと認識したが、掘り方は不明瞭で、さらに骨の取上げ直後に断面が崩落したため、骨周辺の状況がわかりにくくなった。したがって掘り方の有無は不明で、下顎がないことから、頭骨のみが溝内に廃棄されたものと考えておく。溝の北側については当初の調査区から外へ伸びていることがわかったため､溝の分だけ調査区を広げることとし、人力で拡張した。その結果、1・2号土坑の手前で溝が立ち上がっていることがわかり、溝の北端を把握できた。溝は幅1.1～1.6ｍ、長さ10ｍの直線的な溝で、主軸方向はE-43°-N。南側半分は深さ80㎝と深く、断面形は丸底で、覆土は炭化物を多く含み、遺物も土師質土器、内耳土器片などがやや多く出土した。北側半分は幅1.1～1.3ｍ、深さ30㎝と浅く、断面形は箱状で、炭化物はあまり目立たず、遺物も南側よりは少ない。また北側には溝内に礫の集中部があり、茶臼片が出土している。北と南の形態、遺物などの出方が違うことから、別の遺構が連結したか、重複の可能性もある。なお中間付近の段差は明瞭ではない。溝内出土遺物は15・16世紀で、溝北側の土坑墓群も同じ頃と考えられることから、溝は墓域に関連した区画溝かもしれない。溝内南半側の炭化物については、試しに水洗したところ、炭化したコメなどが得られたため、掘り上げた土を別に保管し、水洗選別によって炭化物を回収し、同定を依頼した。その結果は第４章第２節にまとめられているとおり、イネ、オオムギ、コムギが多く、中世の栽培作物の状況を示すものと理解できる。

２号溝　Ｃ区Ｍ２グリッド。調査区西壁寄りに地境状の石列があり、石列北端が西側に曲がって調査区外に伸びている。周辺の遺構群よりは浅く、また列石が現在の地境とほぼ一致し、さらに調査区外に伸びた先には現状で水田への水路があることから、比較的新しい時期の水路跡と考えられる。列石は30㎝程度の礫を９個ほど用い、溝東側にのみ石列が１列存在する。５号土坑上層には断面で溝セクションが観察できる。溝は長さ４ｍ、幅40～50㎝、深さ20㎝で、主軸方向はE-42°-N。主軸方向は１号溝、１号畦畔とほぼ同じである。覆土から遺物はほとんど出土していない。

４号溝　Ａ区D15～H17グリッドの農道下から検出された。北側の落ち込み部分を入れると長さ34ｍ、幅2.8～４ｍ、深さ15～20㎝で、主軸方向はN-23.5°-E。小扇状地の広がりに沿って堀切橋側の南から北へ向いた直線的な溝である。北側は深くえぐれたままとなり、調査区外の一段低い段差につながっている。溝断面は皿状で、壁の立ち上がりは不明瞭である。溝底面には小礫が多数みられるが、ほとんどは下層礫層面の露出である。また溝内にはいく筋かの溝が重複し、中でも西壁寄りには16号溝が掘り込まれている。南壁で東西方向の断面を観察したところ、農道と重複するように下層に４号溝があり、農道建設のさいに撹乱が加えられていることがわかる。遺物は中・近世の陶磁器類などの小破片が点在し、中近世の時間幅をもつ。古いところでは中世前半の青磁碗があるが、溝に伴うものとは考えにくい。そのほか､溝内からは骨片が数点出ている。いずれも未焼成で、非常にもろい。人骨、獣骨の区別については小破片のため難しい。６～８号溝と重

複し、16号溝よりはいずれも新しいことがわかるが、おそらく4号溝のある部分とは並行関係をもつと思われる。ただそうした流路の状況については十分に把握できていない。

5号溝　A区F17～E19グリッドに位置する。長さ14.6 m、幅1.5～1.9 m、深さ20cmで、主軸方向はW-14°-N。幅がやや広く、底は平らで、溝断面は箱状である。覆土中の遺物は非常に少ない。4号溝をはさんで7号溝と直線的な位置関係にある。

6号溝　A区D14グリッド。4号溝と11号溝の間に断続的に存在する。東西2本に分離するが、両者を合わせると長さ5.4 m、幅0.8～1 m、深さ13cm、主軸方向はW-1°-Nで、ほぼ東西に伸びた溝である。溝断面は箱状～皿状である。7・8号溝と向きが同じで、溝と溝の間（南北間の幅）も約10 mと同じである。溝の覆土中からは近年のビニールも混じり、調査前の水田境と一致することから、現代の水田境の溝と思われる。

7号溝　A区F12～F15グリッド。11号溝と4号溝をつなぐように東西方向に直線的に位置する。長さ17.5 m、幅0.5～0.9 m、深さ6cmで、主軸方向はE-3°-N。溝底面は平らで、壁の立ち上がりは短く、断面形は皿状を呈する。溝の壁は南側では明瞭であるが、北壁は不明瞭で、北側耕作痕に向かって連続的に移行する部分もある。覆土中遺物はほとんどない。調査直前の水田境と一致するかどうかは定かではないが、比較的新しい時期の地境溝と思われる。

8号溝　A区G11～G16グリッド。11号溝と4号溝をつなぐように東西に直線的に位置する。上層と下層の溝があり、両者は確認面レベルで約14cmの深さの違いがあるが、ほとんど重複し、8号上層溝、8号下層溝として区別する。上層溝は長さ25 m、幅40～60cm、深さ14cm、下層溝は長さ28 m、幅0.7～1.8 m、深さ10cmで、主軸方向はともにE-1°-N。東端は4号溝に接続し、西端はやや北側、12号溝の方向へ曲がり、6号ピットが接する。上層の溝は幅が狭く、底面断面形は丸底。下層は幅広で、底面断面形は皿状を呈す。立ち上がりは不明瞭で短く、サブトレンチで断ち割って断面観察をした。遺物は非常に少ない。調査直前の水田境と一致することから、上層溝については近現代かと思われる。また下層溝については時期がはっきりしないが、周辺遺物から近世以前とみなし、地境が長期にわたり踏襲されているものと考えておく。

9号溝　A区K15・16グリッドに位置する。13号溝と同一方向で接する。長さ8 m、幅0.4～0.8 m、深さ12cmで、主軸方向はE-16°-N。13号溝と接した部分での断面観察によれば、9号溝の方が新しい。幅は狭く、断面形は皿状を呈す。東端は調査区境となり、以前の造成によって途中で掘削されている。遺物は非常に少ない。

10号溝　A区M14グリッド。長さ3 m、幅0.5 m、深さ5cmで、主軸方向はE-15°-N。短く、浅い溝で、断面形は皿状である。遺物はない。調査前の水田境と一致する。

11号溝　A区G11～C13グリッド。長さ22 m、幅0.7～1.8 m、深さ5cmの直線的な溝で、主軸方向はN-23°-W。溝断面は皿状で浅く、立ち上がりは短い。底面には下層礫層の礫面が露出する。遺物は非常に少ない。調査前の水田地境と一致する。

12号溝　A区G10～H10グリッド。長さ9m、幅0.6～1m、深さ15cm、主軸方向はN-5°Wで、南北を向く。断面形は皿状で浅い。覆土中から近年のビニールが出土し、調査前地境と一致することから、新しい溝である。遺物はとくにない。

13号溝　A区J12～K16グリッドにあり、9号溝と接し、9号溝よりも古い。東西方向に断続的に直線をなし、合わせると長さ26 mを測る。幅0.4～0.7 m、深さ7cmで、主軸方向はE-12°-N。12号溝の東側に収まるように位置する。遺物はほとんどない。調査直前の水田境と一致するかどうかは不明。

14号溝　A区I 18・19グリッド。長さ10 m、幅0.4～0.8 m、深さ20cmの直線的な溝で、主軸方向はW-28°-N。東西方向の溝で、西側は4号溝に接続する。断面形はV字状で、溝内中央付近に礫がまとまっている。遺物はとくになく、時期は不明である。

15号溝　A区H19グリッド。長さ3.5 m、幅0.6 m、深さ10cmで、主軸方向はW-43°-N。直線的で浅く、断面形は皿状である。近年の水田畦畔に伴う掘り方である。

16号溝　4号溝内、西壁寄りの直線的な溝で、長さ27 m、幅0.4～1 m、深さ40cm。主軸方向はN-23°-E。6～8号溝と重複し、それらよりも古い。4号溝西壁の途中、I 17グリッド付近で消滅している。遺物はとくにない。

17号溝　C区1号畦畔に沿って南北に確認された溝で、長さ5.4 m、幅25cm以上、深さ25cm。主軸方向はN-15°-E。東壁は調査区外にかかることから全体像は不明で、溝ではないかもしれない。遺物は

とくにない。

畝状遺構　A区F12～F16グリッド。下層の掘り下げによって検出された。東西を11号溝と4号溝に、南北を7号溝と8号溝にはさまれた区画内で検出された畑あるいは水田の耕作痕で、4×18mの長方形の範囲内に5条以上の不連続な溝が東西方向に分布する。1本1本の畝の幅は10～60cm、深さ5～10cm。畝の方向はE-5°-N。東側、4号溝脇では、4号溝に沿うように北側に畝状遺構が曲がっている。7号溝寄りに密度が濃く、北側に行くほど密度が薄く、浅くなる。遺物はわずかに土師質土器片などが伴う。周囲に溝があり、畝の確認面が平坦であることから、おそらく水田に伴う耕作痕、あるいは足跡痕も含まれるかと思われるが、科学的分析は行っていない。

溝状遺構　以上のほかにC区J1グリッド付近に溝かと思われる遺構がある。調査区が屈曲したところに礫を伴う落ち込みがあり、溝の可能性がある。ちょうど1号溝と直角に配置する。東西約4m以上、幅1.5m以上あり、礫を積み上げたような配石が見られる。またその東側に南北に伸びた溝状遺構がある。幅60cm、長さ1.8m以上で浅い。遺物はとくにない。

1号ピット　C区1号溝確認面にて検出。直径44×45cm、深さ7cmの円形。柱穴ではない。

2号ピット　C区1号溝確認面にて検出。直径46×50cm、深さ14cmの円形。柱穴ではない。

3号ピット　A区E15グリッド。4号溝西側にて4･5号ピットと並んで検出された。直径34×56cm、深さ5cmの楕円形。撹乱状。

4号ピット　A区E15グリッド。直径50×70cm、深さ5cmの不整円形。撹乱状。

5号ピット　A区E15グリッド。直径60×72cm、深さ5cmの不整円形。撹乱状。

6号ピット　A区H11グリッド。8号溝に接するようにして検出された。直径70×80cm、深さ9cmの円形。柱穴ではない。

2号溝周辺の礫分布　C区M2グリッドから4号溝周辺にかけて、下層に礫が多数検出された。ほとんどが自然礫の分布で、配石状の並びはないが、自然礫に混じって凹石が分布するのが注意された。とくに1号溝西側から北側にかけて3個の完全な凹石がいずれも孔を下に向けて出土している。墓域との関連をうかがわせるほか、いくつかがまとまって使用された可能性があり、また伏せて置かれたかのような出土状況も興味深い。

第4節　遺　物

図版（第16～25図）に従って遺構別に説明する。

1号溝（第16～18図）

1～22は土師質土器皿で、溝が深い西側出土遺物（1～10）と、浅い東側出土遺物（11～22）を分けて配置した。ただし1号溝は東西一体の遺構であり、遺物の様相からみても時期的な違いはない。いずれも皿であるが小型で浅い1・2・11（口径7～8cm、底径4～5cm、高さ2cm未満）、やや大型で浅い12（口径11cm、底径6cm、高さ2cm程度）、やや大型で深い3・4・13（口径11～12cm、底径5～6cm、高さ約3cm）がある。整形技法はいずれもロクロナデ、底部回転糸切で、口唇部は丸いものが多い。9の内面見込み部には墨書があり、文字ではなく文様、あるいは絵画のようである。まじない、あるいは地鎮具として使用された土器か。23・24は青磁で、23は竜泉窯系の蓮弁文碗、24は内面に櫛描文をもつ碗。25は近世の磁器皿（肥前）である。26～32は土師質の在地産すり鉢で、内面見込み部に放射状の櫛歯条線をもつ底部（30）、内面に縦の条線をもつ破片（26～29・31）がある。内面はやや磨耗するが、磨耗痕は顕著ではない。口縁部資料はないが、おそらく第20図19のような尖った形態であろう。内面の擂目出現については、関東、千葉方面では15世紀後半から16世紀代といわれ、山梨県内についても土師質すり鉢の消長は15世紀後半～16世紀末とされている。32は土師質の鉢底部で、内面に条線はなく、立ち上がりの角度がやや急であることから、すり鉢ではないらしい。33～38は内耳土器。口縁部がわずかに内湾するもの（33）と、外反するもの（34）がある。底部（35・36・38）は体部に比べ薄く、底部外面に砂粒が多量に付着する砂目が特徴である。体部外面は一様にススが付着して黒く変色する。39は常滑甕口縁部である。口縁部形態から中野晴久氏のいう常滑6b型式（1275～1300年）あるいはその直後型式に類似する。40は内耳土器胴部片を擦って作られた土製円盤。41は石製硯の破片で、全体の大きさは不明であるが長方形の硯であろう。43は凹石で、出土状況は写真図版4－2を参照。42は茶臼上臼の破片で、側面に挽き手を差し込む穴があり、その周囲が菱形に加工され突出する。直径30cm。44は洪武通宝（1368年）。45は中ほどで破損した台石で、表面は中央付近に敲打痕をもち、滑らかで光沢がある。藁打ちなどの台か。46～58は鉄製品。46・50は刀子、47・

51 ～ 57 は角釘と思われる。49 は鉤状に曲げられた不明鉄製品。このほか、図化できなかった土師質土器、内耳土器の小破片はやや多く、陶磁器類の小破片もいくつかある。全体的にみて中世、15 世紀後半～ 16 世紀でまとまりをみせ、遺物構成としては中世の集落遺跡にふさわしい構成といえるが、常滑甕、青磁碗のようにやや遡る資料もあり、一般的には伝世品と考えられるが、集落の時期が中世後半を遡る可能性も示唆している。また茶臼、青磁、硯、常滑甕は支配層に帰属する内容で、絵図が伝える「御座田村古屋敷」の存在を想起でき、屋敷地周辺のあり方とみることもできる。

２号溝（第 18 図）

1 は溝上層出土の灰釉椀底部。

４号溝（第 18 図）

1 は天目茶碗で、口縁部形態から江戸期、17 世紀に入った資料であろう。2 は竜泉窯系の青磁蓮弁文碗で、磁器Ｅ期といわれる鎬蓮弁である。13 世紀前半以降出土する。3 ～ 5 は近世以降と思われる陶磁器で、4 の壷については在地窯かもしれない。6・7 は同一個体の鉄製品で角釘か。4 号溝では出土遺物が少なく、中世から近世以降の資料が混在しており、長期にわたる継続的使用が認められる。

５号溝（第 18 図）

1 は瀬戸美濃系と思われる磁器碗。2 は鉄滓。

12 号溝（第 18 図）

1 は角釘か。

１号土坑（第 18 図）

1・2 は土師質土器皿。1 は小皿で底径がやや大きい。3 は内耳土器の耳部。

２号土坑（第 19 図）

1 ～ 3 は土師質土器皿で、1 は口縁が大きく開く。

３号土坑（第 19 図）

1 は近世の香炉で混入品か。2 は使用痕がやや不明瞭ながら側縁に敲打痕をわずかにもつ磨り石状の円礫。3 は台石で、表裏面ともに滑らかで光沢をもつ。藁打ち用台石か。配石墓の礫に用いられていた。

４号土坑（第 10 図）

1 は肥前磁器皿。18 世紀後半頃の混入品と思われるが、御座田村の移転時期を探る手がかりになる。

５号土坑（第 19 図）

1 は内耳土器底部。

１号水田（第 20・21 図）

1 号水田周辺の出土品で、土師質土器については畦を境に西側出土品（1 ～ 7）、東側出土品（8 ～ 16）に分けて配置した。全体がわかる資料は少ないが、1・8 は小皿、2・9・11 は中皿でやや厚みがある。10 は大皿。17 は一応 12・13 世紀の柱状高台と考えるが、古墳時代の高坏脚の可能性もあり、上流から移動したものかもしれない。13 は青磁碗小片。19・20 はすり鉢で、19 は土師質土器、20 は瀬戸美濃系すり鉢で、口縁部形態から 16 世紀中～後半か。21 ～ 28 は内耳土器。口縁部のくびれが外面的には不明瞭なもの（23・26）、ほとんどくびれがなく直立的なもの（21・22）がある。口縁部が湾曲した 1 号溝 33 よりは後出的とされ、時期差、あるいは地域差と考えられる。29 は土師質の火鉢で、胴部外面に押印花文がある。30 は砥石。31 は銭貨で、文字の判読ができず、銭種は不明。32 ～ 40・42 ～ 45 は鉄製品で、40 は楔、42 は刀子、45 は鉄滓、32 ～ 36 は角釘、37 ～ 39 は釘にしてはやや平たく、不明である。41 は銅製品で、笄かと思われるが定かではなく、端部がＬ字状に屈曲している。これらが 1 号水田の周辺から出土し、1 号水田の時期を示唆する資料といえる。

遺構外（第 21 ～ 25 図）

1 ～ 25 は土師質土器皿。口径の大きさから小皿（1・2）、中皿（3 ～ 5）、大皿（6 ～ 13）に区別でき、口唇部は丸みをもつもの（1 ～ 4・6・7・13 など）、やや尖るもの（5）があり、底部は厚みをもつもの（17）、直線的に広がるもの（6・19 など）がある。26 ～ 31 は陶器碗皿。26・27 は常滑系かと思われる小皿で、26 は被熱が著しく、坩堝的な使用が行われている。28 は天目茶碗。32 は軟質陶器。33 は青磁碗で、外面に文様がぼんやり見える。35 は京焼の碗で、18 世紀代か。36 はすり鉢。37・38 は須恵器甕で上流からの移動によるものか。39・40 は常滑甕の胴部片。41 ～ 48 は内耳土器で、口縁部がわずかに内湾するもの（44・46）、わずかに外反するもの（41・42・45）、直立的なもの（43）がある。49 は円礫で、磨り石の可能性がある。50 は砥石で両端が鋭角に尖るまで使い込んでいる。51 ～ 54 は凹石。51 は底面が平らに敲打され、内面の窪みは直径 10cm、深さ 6.4cm と大きい。52 は底が丸いタイプ。53 は底がやや平らである。54 は破片資料のため凹石かどうかは不明で、径が大きいことから石鉢かもしれない。55 は石鉢で、外面には括れ部に段差がある。石鉢の高台部の可能性もあるが、内面が磨耗することから鉢とした。56・57 は銭貨で、56 は洪武通宝（1368 年）、57 は熙寧元宝（1068 年）。

58 ～ 88 は鉄製品。58 は G13 グリッドの下層から出土した刀子で、長さ 19.6㎝とやや長い。59 ～ 76 は角釘で、中でも 76 は 4 本ほどの短い釘がひとまとまりに錆びついたもの。77 ～ 79 は不明鉄製品。80 ～ 88 は鉄滓。

表 1　土器陶磁器観察表

図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高	残存%	整形技法	色調	胎土	注記	備考
	1号溝	1	土師質	皿	中近世	7.4/4.6/1.5	95	ロクロナデ,底糸切り	褐～橙褐	長,赤,雲	698,1097	口唇部大半を欠く,底部外面黒
	1号溝	2	土師質	皿	中近世	(8.6)/(5.0)/1.9	30	ロクロナデ,底糸切り	灰橙	長,赤,雲	1806	内面薄くくすむ
	1号溝	3	土師質	皿	中近世	(11.4)/(5.3)/3.0	30	ロクロナデ	褐	赤,雲-やや多	1841	
	1号溝	4	土師質	皿	中近世	(11.4)/(6.4)/2.8	30	ロクロナデ,底糸切り	黄橙	長,赤	1843	
	1号溝	5	土師質	皿	中近世	(12.0)/-/-	10	ロクロナデ	橙	赤,長,雲	838	
	1号溝	6	土師質	皿	中近世	-/(6.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	橙	長,赤,角,雲	939	
	1号溝	7	土師質	皿	中近世	-/(8.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	橙褐	赤,長,黒	1063,1079	
	1号溝	8	土師質	皿	中近世	-/(6.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	橙	雲,赤,長	491	
	1号溝	9	土師質	皿	中近世	-/(5.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	橙	長,赤,石,雲	1056	内面墨書(絵か)
	1号溝	10	土師質	皿	中近世	-/(6.0)/-	20	ロクロナデ,底糸切り	橙	雲,長,赤	1231,1784	
	1号溝	11	土師質	皿	中近世	(8.0)/(4.2)/1.8	10	ロクロナデ,底糸切り	黄橙	雲,長,赤	741	
	1号溝	12	土師質	皿	中近世	(11.0)/(6.0)/1.9	20	ロクロナデ,底糸切り	橙	長,赤,雲	1溝上層	
	1号溝	13	土師質	皿	中近世	(12.0)/(6.4)/2.8	30	ロクロナデ,底糸切り	橙	赤,雲,長	1775	
	1号溝	14	土師質	皿	中近世	(12.0)/-/-	10	ロクロナデ	暗橙	長,雲,赤	1640	
	1号溝	15	土師質	皿	中近世	(10.4)/-/-	10	ロクロナデ	淡橙	赤,長	1795	
	1号溝	16	土師質	皿	中近世	(12.8)/-/-	10	ロクロナデ	暗橙	赤,長,雲	1溝	
	1号溝	17	土師質	皿	中近世	-/(4.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	橙	雲,長	1653	
	1号溝	18	土師質	皿	中近世	-/(5.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	橙	長,赤,雲	1溝	
	1号溝	19	土師質	皿	中近世	-/(6.0)/-	20	ロクロナデ,底糸切り	暗橙	長-大,やや多,赤,石	1636	
	1号溝	20	土師質	皿	中近世	-/(6.3)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	橙	長,雲,赤	1754	
	1号溝	21	土師質	皿	中近世	-/5.6/-	20	ロクロナデ,底糸切り	橙	長,雲,角,赤	1701	
	1号溝	22	土師質	皿	中近世	-/(7.0)/-	10	ロクロナデ	橙	長,石,赤,雲	911	
	1号溝	23	青磁	碗	中世	(15.6)/-/-	10	蓮弁文?	緑	胎土灰白色	1675	13C,竜泉窯系
	1号溝	24	青磁	碗	中世	-/-/-	10	ロクロナデ,条線	緑灰	胎土灰色	1065	12C後半以降,竜泉窯系
	1号溝	25	染付	皿	近世	(11.0)/-/-	10	型作り?,染付	白		1溝上層	肥前,18C後半
	1号溝	26	土師質	すり鉢	中世	-/-/-	-	ナデ,内面条線	橙	長,雲,赤	472,1134	条線8本単位,内面付着物
	1号溝	27	土師質	すり鉢	中世	-/-/-	-	ナデ,内面線	橙	雲,赤,長	1057	
	1号溝	28	土師質	すり鉢	中世	-/-/-	-	ナデ,内面線	橙	長,赤	935	
	1号溝	29	土師質	すり鉢	中世	-/-/-	-	ナデ,内面条線	黄橙	長,赤,黒	1溝	内面磨耗
	1号溝	30	土師質	すり鉢	中世	-/-/-	-	ナデ,内面条線	橙	長,雲,赤	1167	見込み部条線
	1号溝	31	土師質	すり鉢	中世	-/-/-	-	ナデ,6本条線	橙	雲,長,石	1680	
	1号溝	32	土師質	鉢か	中世	-/(12.0)/-	-	ナデ	橙	長,雲,石	1808	器種不明
	1号溝	33	土師質	内耳	中世	(28.2)/-/-	-	ロクロナデ	暗褐～褐	白,赤	1638,1752	外面スス
	1号溝	34	土師質	内耳	中世	(28.5)/-/-	-	ロクロナデ	暗～黒褐	白,赤,黒,角	1810	外面スス
	1号溝	35	土師質	内耳	中世	-/(27.0)/-	-	ロクロナデ,砂底	黒褐	長,角,赤	1095	外面スス,内面アク状付着
	1号溝	36	土師質	内耳	中世	-/(25.8)/-	-	砂底,ナデ	暗～褐	砂粒多,角	1150	内外面変色
	1号溝	37	土師質	内耳	中世	-/-/-	-	ロクロナデ	黒褐～褐	白,黒,赤	1092～1094	外面スス
	1号溝	38	土師質	内耳	中世	-/-/-	-	砂底	暗～黒褐	白-多	1175,1642	内面黒変
	1号溝	39	常滑	甕	中世	(36.0)/-/-	-	ナデ	緑灰～暗灰	白色粒	1288	
	2号溝	1	灰釉	香炉?	近世	-/(5.0)/-	-	ロクロナデ,削り出し高台,灰釉	淡緑	胎土灰色	145	瀬戸美濃か
	4号溝	1	天目	茶碗	中近世	(12.5)/-/-	10	天目釉	黒褐	胎土灰白色	1251	
	4号溝	2	青磁	碗	中世	(15.7)/-/-	10	蓮弁文	青緑	胎土灰色	1273	
	4号溝	3	磁器	碗	明治?	-/(3.8)/-	10	型作り,型紙摺り	白		1241	
	4号溝	4	陶器	徳利か	不明	-/-/-	-	ロクロナデ	黒褐～青	胎土灰褐色,白色粒	1246	在地産か
	4号溝	5	磁器	不明	不明	-/4.0/-	-	型作り	白		1249	肥前か
	5号溝	1	陶器	碗	近世	-/-/-	-	ロクロナデ	青緑	胎土灰色	1276	瀬戸美濃か
	1号土坑	1	土師質	皿	中近世	(8.6)/(5.6)/1.8	50	ロクロナデ,底糸切り	黄橙	雲,長,白	1850	口唇部スス付着
	1号土坑	2	土師質	皿	中近世	-/-/-	20	ロクロナデ,底糸切り	橙	雲,砂粒	1848,1849	
	1号土坑	3	土師質	内耳	中世	-/-/-	-	ナデ	橙	長,赤,石	1847	外面スス付着
	2号土坑	1	土師質	皿	中近世	(12.8)/(6.0)	20	ロクロナデ,底糸切り	暗褐	雲,長	1826	
	2号土坑	2	土師質	皿	中近世	-/(6.0)/-	20	底糸切り	灰褐	雲,長,石	1811	
	2号土坑	3	土師質	皿	中近世	(7.0)/-/-	10	ロクロナデ	橙	長,雲	2131	
	3号土坑	1	陶器	香炉	近世	(10.0)/-/-	-	ロクロナデ	緑	胎土灰色	138	瀬戸美濃,17末～18Cか
	4号土坑	1	染付	皿	近世	(12.0)/-/-	10	型作り?染付	白		1824	肥前,18C後半
	5号土坑	1	土師質	内耳	中世	-/(25.5)/-	-	ナデ,砂底	暗褐	長,石,赤	2154	内外面変色
	1号水田	1	土師質	皿	中近世	(7.8)/(5.4)/1.6	20	ロクロナデ	褐	長,雲,赤	2091	
	1号水田	2	土師質	皿	中近世	(10.8)/(6.0)/1.5	20	ロクロナデ,底糸切り	橙褐	長,石,赤	2084	
	1号水田	3	土師質	皿	中近世	(10.0)/-/-	10	ロクロナデ	橙	雲-やや多,赤,長	2065	
	1号水田	4	土師質	皿	中近世	(10.0)/-/-	10	ロクロナデ	褐	白,黒	2062	
	1号水田	5	土師質	皿	中近世	(14.0)/-/-	10	ロクロナデ	橙	赤,白	532	
	1号水田	6	土師質	皿	中近世	-/(6.0)/-	10	ロクロナデ	橙	赤,長,雲	385	
	1号水田	7	土師質	皿	中近世	-/(6.0)/-	10	ロクロナデ	黄橙	赤,長	1658	
	1号水田	8	土師質	皿	中近世	(8.0)/(4.2)/2.2	20	ロクロナデ	橙	長,角,赤	1969	
	1号水田	14	土師質	皿	中近世	-/(5.4)/-	10	ロクロナデ	明橙	赤,雲	1985・2015	軟質
	1号水田	9	土師質	皿	中近世	(11.1)/(6.0)/2.2	20	ロクロナデ,底糸切り	暗褐	赤,長,石,雲	423,873	
	1号水田	10	土師質	皿	中近世	(14.4)/6.8/3.1	70	ロクロナデ,底糸切り	橙	長,石,赤-やや多	109～111	
	1号水田	11	土師質	皿	中近世	(11.2)/-/-	20	ロクロナデ	橙褐	長,雲	667	
	1号水田	12	土師質	皿	中近世	(12.0)/-/-	10	ロクロナデ	橙	長,雲-微	1011・1105	
	1号水田	13	土師質	皿	中近世	-/(6.4)/-	20	ロクロナデ,底糸切り	橙	角,長,赤,石	744	
	1号水田	15	土師質	皿	中近世	-/(6.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	灰褐	赤,長	2040	
	1号水田	16	土師質	鉢	中近世	-/(8.0)/-	-	ロクロナデ	橙褐	赤-やや多,長	127	すり鉢底部か
	1号水田	17	土師質	柱状皿	中世	-/4.2/-	-	ロクロナデ	暗褐	長,雲	2058	やや上げ底
	1号水田	18	青磁	碗	中世	-/-/-	-	内外面釉	緑	灰白	750	
	1号水田	19	土師質	すり鉢	中世	(28.0)/-/-	-	ロクロナデ	橙	雲,赤,長	967	外面スス
	1号水田	20	陶器	すり鉢	中世	(26.5)/-/-	-	ロクロナデ,条線	黒褐	胎土橙	2066	やや軟質,条線9本
	1号水田	21	土師質	内耳	中世	(28.5)/-/-	-	ロクロナデ,内耳	褐	長,石,赤,黒	2070,2136	外面スス付着
	1号水田	22	土師質	内耳	中世	(35.0)/-/-	-	ロクロナデ	暗褐	赤,長,花,石,角	2141	外面スス・灰?付着
	1号水田	23	土師質	内耳	中世	(31.0)/-/-	-	ロクロナデ	暗褐～褐	長,赤,石,黒	961	外面スス付着
	1号水田	24	土師質	内耳	中世	-/(27.5)/-	-	ナデ,砂底	暗褐	長,角,赤,石	2098	外面変色
	1号水田	25	土師質	内耳	中世	-/-/-	-	ロクロナデ	暗褐	石,角,長	768	外面変色
	1号水田	26	土師質	内耳	中世	-/-/-	-	ロクロナデ	褐灰	長,赤,黒,石	994	
	1号水田	27	土師質	内耳	中世	-/-/-	-	ロクロナデ	暗褐	長,石	1931	外面スス
	1号水田	28	土師質	内耳	中世	-/-/-	-	ロクロナデ	暗褐	長,角,赤	517	外面スス厚く付着
	1号水田	29	土師質	鉢	中世	(12.0)/-/-	10	ロクロナデ	橙	赤-やや多,長	451	菊花押文,口唇～内面黒変
	遺構外	1	土師質	皿	中近世	(7.2)/(4.8)/1.7	20	ロクロナデ,底糸切り	橙褐	雲-多,赤,長	1368	
	遺構外	2	土師質	皿	中近世	(8.4)/(5.0)/2.0	20	ロクロナデ,底糸切り	橙褐	赤,長,角	2049	出土地点不明

図	地点	№.	種別	器種	時期	口/底/高	残存%	整形技法	色調	胎土	注記	備考
	遺構外	3	土師質	皿	中近世	(11.0)/-/-	20	ロクロナデ	橙	赤,長,雲,角	1301	
	遺構外	4	土師質	皿	中近世	(11.4)/(6.8)/2.7	30	ロクロナデ,底糸切り	橙	雲,長,赤	555,840	
	遺構外	5	土師質	皿	中近世	(12.0)/(6.6)/2.8	25	ロクロナデ,底糸切り	橙	長,石	1816	
	遺構外	6	土師質	皿	中近世	(12.8)/6.5/2.6	30	ロクロナデ,底糸切り	褐	長-大,石,赤,雲-やや	1910・1911	
	遺構外	7	土師質	皿	中近世	(13.2)/-/-	10	ロクロナデ	橙	長	1067	
	遺構外	8	土師質	皿	中近世	(13.0)/-/-	10	ロクロナデ	橙	雲,長,赤	11	
	遺構外	9	土師質	皿	中近世	(13.0)/-/-	10	ロクロナデ	橙	雲,長	1740	
	遺構外	10	土師質	皿	中近世	(12.8)/-/-	10	ロクロナデ	灰褐	赤,長,雲	表採060707	
	遺構外	11	土師質	皿	中近世	(14.0)/-/-	10	ロクロナデ	橙	雲,長	8	
	遺構外	12	土師質	皿	中近世	(14.0)/-/-	10	ロクロナデ	橙	長,赤	1291	
	遺構外	13	土師質	皿	中近世	(13.8)/-/-	10	ロクロナデ	橙	長,雲-やや多	2009	
	遺構外	14	土師質	皿	中近世	-/(5.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	褐～暗褐	長-やや多,雲,赤	53	内面変色
	遺構外	15	土師質	皿	中近世	-/(6.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	橙	長,赤	2011	
	遺構外	16	土師質	皿	中近世	-/(6.0)/-	20	ロクロナデ,底糸切り	橙	赤,雲,石	2050	
	遺構外	17	土師質	皿	中近世	-/5.6/-	10	ロクロナデ,底糸切り	橙褐	長,雲,赤	1607	内面変色
	遺構外	18	土師質	皿	中近世	-/(5.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	橙	長,雲,赤	984	
	遺構外	19	土師質	皿	中近世	-/(5.8)/-	20	ロクロナデ,底糸切り	橙～暗橙	長,雲,石,角	1605	外面くすみあり
	遺構外	20	土師質	皿	中近世	-/4.8/-	20	ロクロナデ	褐	雲-やや多,赤	1263	
	遺構外	21	土師質	皿	中近世	-/(6.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	橙～暗褐	雲,長,赤	593	外面変色
	遺構外	22	土師質	皿	中近世	-/(8.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	暗褐	赤,白,雲	179	内面黒変
	遺構外	23	土師質	皿	中近世	-/(6.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	暗橙	雲,赤,長	1106	内面タール付着,灯明皿か
	遺構外	24	土師質	皿	中近世	-/(7.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	橙	雲,長	1717,1744	
	遺構外	25	土師質	皿	中近世	-/(8.0)/-	10	ロクロナデ,底糸切り	暗褐	長,赤,石,角	C区表採	
	遺構外	26	陶器	皿	中世	(8.0)/(5.2)/1.8	20	ロクロナデ	灰	長	12	内面被熱,赤化,タール付着,坩堝か
	遺構外	27	陶器	皿	中世	(8.0)/(5.0)/1.7	20	ロクロナデ	灰	白色粒	1392	内面溶融物付着,坩堝か
	遺構外	28	天目	茶碗	近世	-/5.3/-	20	削り出し高台,鉄釉	茶褐	胎土灰白色,褐色粒	89	17C～
	遺構外	29	鉄釉	皿	近世?	(10.0)/5.0/2.5	50	ロクロナデ	茶褐	胎土灰色,白色粒	1462	
	遺構外	30	灰釉	皿	近世?	-/(6.0)/-	-	削り出し高台?	淡緑	胎土黄灰色	144	瀬戸美濃か
	遺構外	31	志野?	皿	中世末	-/(4.4)/-	-	削り出し高台,灰釉	淡緑	胎土白色	1365	16C末～17C初か
	遺構外	32	灰釉	小壺?	近世	-/(2.6)/-	-	ナデ,底糸切り	淡橙	軟質	154	軟質施釉陶器,内面のみ施釉
	遺構外	33	青磁	碗	中世	-/-/-	10	刻線文?	緑	灰白色	171	
	遺構外	34	染付	香炉	近世	-/-/-	10	印花？半菊花	濃緑	胎土淡黄白	1391	瀬戸美濃,織部か
	遺構外	35	陶器	碗	近世	-/(4.2)/-	20	ロクロナデ,削り出し高台	淡緑	胎土淡黄	C区表採	京焼
	遺構外	36	土師質	すり鉢	中世	-/(14.0)/-	-	ナデ	橙	赤,長,雲	1851	底面砂底
	遺構外	37	須恵	甕	古代	-/-/-	-	有段,波状条線	暗灰褐	白色粒	1388	
	遺構外	38	須恵	甕	平安?	-/-/-	-	外面叩き?	灰	白色粒	1588	
	遺構外	39	常滑	甕	中世	-/-/-	-	ナデ	茶褐～灰	白色粒	1408	
	遺構外	40	常滑	甕	中世	-/-/-	-	ナデ	灰～緑灰	白色粒	1594	渥美か?
	遺構外	41	土師質	内耳	中世	(33.0)/-/-	-	ロクロナデ	暗橙	長,赤,角	1874～1876・1903・1905・1917・1920・	外面スス付着
	遺構外	42	土師質	内耳	中世	-/-/-	-	ロクロナデ,内耳	暗褐	長,角,石	1906	外面変色
	遺構外	43	土師質	内耳	中世	-/-/-	-	ロクロナデ	橙	角-多,長,赤	1670,同一個体1886・2168・2169	外面変色
	遺構外	44	土師質	内耳	中世	-/-/-	-	ロクロナデ	暗褐	赤,長	39	外面変色
	遺構外	45	土師質	内耳	中世	-/-/-	-	ロクロナデ	暗褐	長,赤,角	2012	外面スス付着
	遺構外	46	土師質	内耳	中世	-/-/-	-	ロクロナデ	暗褐	長,赤	146	外面変色
	遺構外	47	土師質	内耳	中世	-/(29.0)/-	-	ロクロナデ,砂底	黒褐	白,赤	1742	内外面黒変
	遺構外	48	土師質	内耳	中世	-/(31.0)/-	-	ロクロナデ,砂底	黒褐	赤,白,角	2054	内外面黒変

表２　石製品観察表

図版	地点	№.	分類	長/幅/厚	重さg	石材	色調	注記	備考
	1号溝	41	硯	6.4/5.5/1.2	26.0	粘板岩	灰褐	1096	ホルンフェルス化、縁部黒変
	1号溝	42	茶臼	15.2/4.5/6.4	322	安山岩	暗灰	2116	直径18.0cm
	1号溝	43	凹石	12.7/11.8/9.6	1670	安山岩	黒灰	1098	孔の直径7.5cm、深さ3.1cm、外面敲打痕
	1号溝	45	台石	13.4/22.0/6.4	2730	安山岩	暗灰	1溝	表裏面磨耗
	3号土坑	2	叩き石?	9.9/8.3/5.1	550	安山岩	暗灰	2161	側面に一部叩き、表面黒変
	3号土坑	3	台石	31.3/27.8/10.2	13900	安山岩	青灰	2171	表裏面磨耗
	1号水田	30	砥石	4.2/3.7/0.5	10	粘板岩	黄褐	709	表裏面磨耗
	遺構外	49	丸石	6.0/5.5/4.4	170	デイサイト	褐灰	2113	自然礫か
	遺構外	50	砥石	9.5/2.2/1.1	30	緑色凝灰岩	灰緑	2000	砥面3
	遺構外	51	凹石	18.0/15.0/10.5	3490	安山岩	灰	2111	孔の直径10.0cm、深さ6.4cm、外面敲打痕、底面平坦整形
	遺構外	52	凹石	17.9/15.7/11.8	3420	安山岩	灰	2112	孔の直径10.0cm、深さ5.4cm、外面敲打痕
	遺構外	53	凹石	22.4/21.2/15.6	7930	安山岩	褐灰	2046	孔の直径9.5cm、深さ7.7cm
	遺構外	54	凹石	16.8/14.5/12.5	1860	安山岩	暗灰	－	内面磨耗、黒色付着物あり
	遺構外	55	石鉢	9.3/8.6./3.9	322	安山岩	暗灰	1864	内面磨耗

表３　土製品観察表

図版	地点	№.	種別	時期	長/短/厚cm 口/底/高cm	重さg	整形技法等	色調	胎土	注記	備考
	1号溝	40	円板	中世	5.5/5.2/0.7	27	周囲研磨	暗褐	赤,角	1141	内耳土器の胴部片転用

表４　金属製品観察表

図版	地点	No.	種別	材質	長cm	幅cm	厚さcm	重さg	注記	備考
	1号溝	44	銭	銅	2.20	2.10	0.20	2.77	1654	「洪武通宝」(明、1368)背一銭か
	1号溝	46	刀子	鉄	4.50	1.30	0.40	7.00	1676	
	1号溝	47	釘か	鉄	2.70	0.35	0.35	1.02	1218	
	1号溝	48	釘か	鉄	5.60	0.80	0.55	8.41	1027	
	1号溝	49	釘か	鉄	4.20	3.60	1.40	14.75	1137	鉤状
	1号溝	50	釘か	鉄	2.00	1.00	0.40	1.25	599	
	1号溝	51	釘か	鉄	3.00	0.70	0.80	2.49	752	
	1号溝	52	釘か	鉄	2.50	0.60	0.40	2.38	1084	
	1号溝	53	釘か	鉄	3.50	0.70	0.50	2.47	553	
	1号溝	54	釘か	鉄	3.00	0.90	0.45	2.57	933	
	1号溝	55	釘か	鉄	2.90	1.00	0.85	2.31	977	
	1号溝	56	釘か	鉄	2.70	0.80	0.30	1.16	551	
	1号溝	57	釘か	鉄	2.95	1.00	0.90	2.45	1055	
	1号溝	58	不明	鉄	2.20	1.10	0.90	5.67	1溝上層	
	4号溝	6	釘か	鉄	1.90	0.50	0.35	1.00	1248A	7と同一か
	4号溝	7	釘か	鉄	1.40	0.45	0.35	0.38	1248B	6と同一か
	5号溝	2	鉄滓	鉄	3.75	2.50	2.80	39.36	1235	
	12号溝	1	釘か	鉄	2.30	0.35	0.30	0.85	1445	
	1号水田	31	銭	鉄	2.20	2.20	0.20	2.31	965	文字なし
	1号水田	32	釘か	鉄	4.20	0.70	0.50	4.83	407	
	1号水田	33	釘か	鉄	2.60	1.20	0.70	2.97	2100	
	1号水田	34	釘	鉄	2.00	0.80	0.40	1.22	828	
	1号水田	35	釘	鉄	2.15	0.40	0.40	1.14	442	
	1号水田	36	釘	鉄	3.20	0.80	0.50	3.20	2140	
	1号水田	37	不明	鉄	3.00	1.10	0.30	2.29	446	
	1号水田	38	不明	鉄	4.50	0.90	0.40	5.10	448	
	1号水田	39	不明	鉄	5.60	1.00	0.30	7.27	2172	
	1号水田	40	楔	鉄	7.50	3.00	1.50	45.99	868	
	1号水田	41	不明	銅	5.30	1.00	0.15	3.10	1970	笄か
	1号水田	42	刀子	鉄	2.80	1.20	0.40	3.65	2120	
	1号水田	43	釘か	鉄	3.40	0.80	0.60	5.02	904	
	1号水田	44	不明	鉄	3.00	1.90	0.60	15.77	990	
	1号水田	45	鉄滓	鉄	4.50	5.70	1.90	56.25	1043	
	遺構外	56	銭	銅	2.20	2.20	1.60	1.43	1265	「洪武通宝」(明、1368)
	遺構外	57	銭	銅	2.30	2.30	1.50	2.10	1120	「熙寧元宝」(北宋、1068、篆書)
	遺構外	58	刀子	鉄	19.60	1.40	0.60	29.49	1385	柄に木質付着
	遺構外	59	釘	鉄	3.30	0.70	0.70	2.85	1948	
	遺構外	60	釘	鉄	2.60	0.60	0.60	2.47	1559	
	遺構外	61	釘か	鉄	3.30	0.70	0.40	2.37	1334	
	遺構外	62	釘	鉄	2.00	0.40	0.30	0.77	1419	
	遺構外	63	釘	鉄	2.00	0.50	0.45	0.91	2047A	
	遺構外	64	釘	鉄	2.60	0.50	0.40	2.00	2149	
	遺構外	65	釘	鉄	3.80	0.80	0.60	3.45	841	82と近接出土
	遺構外	66	釘	鉄	1.80	0.60	0.60	1.10	2052A	83と同一か
	遺構外	67	釘	鉄	2.45	1.45	1.00	4.00	285	
	遺構外	68	釘	鉄	3.10	0.50	0.50	1.81	1958	
	遺構外	69	釘	鉄	3.30	0.60	0.30	0.90	853	
	遺構外	70	釘	鉄	1.60	0.55	0.40	1.03	371	
	遺構外	71	釘	鉄	3.50	0.65	0.60	4.06	1854	
	遺構外	72	不明	鉄	3.05	0.90	0.75	1.75	1329	
	遺構外	73	釘	鉄	3.40	0.55	0.55	2.15	845	
	遺構外	74	釘	鉄	3.00	0.55	0.55	2.00	2052B	75と同一か
	遺構外	75	釘	鉄	2.60	1.20	0.90	4.59	1897	
	遺構外	76	釘	鉄	2.50	2.40	1.00	12.39	1515	角釘4本密着
	遺構外	77	不明	鉄	3.40	3.30	0.80	7.76	79	
	遺構外	78	不明	鉄	6.00	2.30	0.80	13.00	1614	
	遺構外	79	不明	鉄	3.10	3.30	0.80	10.16	No.なし	
	遺構外	80	鉄滓	鉄	2.10	1.40	0.80	3.01	2047B	
	遺構外	81	鉄滓	鉄	3.00	2.30	1.20	10.19	1212	
	遺構外	82	鉄	鉄	2.15	1.60	0.95	2.00	1367	
	遺構外	83	鉄滓	鉄	3.70	2.50	1.90	19.44	1214	
	遺構外	84	鉄滓	鉄	2.70	2.00	1.70	7.36	No.なし	
	遺構外	85	鉄滓	鉄	1.80	1.80	1.30	6.10	1526	
	遺構外	86	鉄滓	鉄	3.50	1.70	1.80	8.52	C区表採溝上層	1溝上層出土か
	遺構外	87	鉄滓	鉄	6.60	4.30	2.60	70.27	1087	
	遺構外	88	鉄滓	鉄	5.00	4.10	3.20	40.51	1872	

第４章　理化学的分析

自然科学的分析としては、深掘り地点での礫分析、１号溝覆土の水洗選別および炭化種実の同定分析、１号畦畔断面の花粉分析、プラントオパール分析、人骨・獣骨（ウマ）の鑑定を実施した。

調査区北西隅で検出された１号溝については、報告にあるとおり 15 ～ 16 世紀頃と考えられる溝で、7 層の暗褐色土層、7' 層の黒褐色砂質土層中に炭化物が肉眼でもわかるほど多く含まれていた。現場では 7・7' 層の土壌をシートの上に保管し、数日間乾燥させた。そして調査後半に作業員２名で水洗選別（ウォーター・フローテーション）を実施し、約 10 日間で約 1120 リットルの覆土を水洗選別した。水洗作業は発掘調査と並行して現場にて実施し、調査事務所脇の水路から汲んだ水をプラ箱に溜め、約５リットルの容量のザルで覆土を水洗し、ザルで何杯水洗したかで水洗量を計測した。浮上した炭化物は洗浄かごの中で数日乾燥させ、炭化物だけを集め、その後肉眼で炭化種実をわけ、同定を依頼した。同定に際しては、炭化種実以外としてまとめられた炭化物も合せて再度識別してもらった。

１号畦畔については、灰黄褐色粘土からなる畔が検出されたため、稲作にともなう水田の畔であろうと推定されたが、科学的に確かめるためにプラントオパール分析を実施するとともに、古環境復元の情報を探るため花粉分析を同時に実施することにした。

サンプリングは調査区北東の壁面にて実施し、１号畦畔が北へ伸びる断面を、いったん埋め戻しが終了した8月12日に再度掘り直して、セクション図化、土層観察後、各層にフィルムケースを打ち込み、採取し、分析を依頼した。

ウマの歯については、國學院大學大学院生　塩谷風季氏を通じて国立歴史民俗博物館　西本豊弘先生に鑑定してもらい、レポートを作成していただいた。また１号溝出土のウマ頭骨については塩谷氏がクリーニング、一部水性ボンドによる保存処理をしたのち、山梨県立博物館　植月学氏に鑑定していただいた。

１号土坑出土人骨については、骨が脆弱で鑑定は無理と考えられたため、歯のみを回収して（株）パリノ・サーヴェイの金井慎司氏に見ていただき、レポートを賜った。

皆様方のご好意に対し、心より感謝申し上げたい。

第１節　韮崎市御座田遺跡を構成する堆積物の岩石鉱物組成

河西　　学（山梨文化財研究所）

１．はじめに

御座田遺跡は、御勅使川の現流路が竜岡台地と赤山との間の「堀切」部分に固定されたことで形成された小扇状地上に位置する。御勅使川扇状地は、巨摩山地から流出した御勅使川が甲府盆地に向かって形成した大規模な扇状地である。この扇状地の扇端部分は釜無川流路の側方浸食によって削剥され、崖線が南北方向に形成されている。この崖線の北方への延長は、韮崎岩屑流堆積物から構成される竜岡台地・赤山の東側に釜無川の浸食によって形成した崖線に連続する。これらの崖線を御勅使川流路あるいは派生する小河川が通過する場合に、交点付近を扇頂とする小扇状地が形成される。小扇状地の分布は、野牛島付近から今諏訪付近にかけて顕著に認められ御勅使川流路変遷を示している。御座田遺跡は、御勅使川小扇状地の北斜面下部に位置し、釜無川沖積面にも近い。河川堆積物は、上流域の地質を反映した岩石鉱物組成を示し（河西 ,1989）、壱番下堤跡の堆積物では釜無川・御勅使川の河川堆積物が区別されている（河西 ,2001b）。ここでは、遺跡内の深掘り地点において、堆積物を沈積させた河川が御勅使川かあるいは釜無川かを推定することを目的として、堆積物の岩石鉱物組成分析を行ったので、以下に報告する。

２．試料・分析方法

御座田遺跡内深掘り地点の柱状図を図８に示す。この断面から堆積物試料８点を採取した。堆積物試料は、分析篩（#160、#250）を用いて粒径１～1/16㎜の粒子を篩別し、エポキシ樹脂で包埋後、岩石薄片と同じ要領で薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし、コバルチ亜硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレパラートとした。岩石鉱物成分のモード分析を次の方法で行なった。偏光顕微鏡下において、オートマチックポイントカウンタを用い、ステージの移動ピッチを薄片長辺方向に 0.33㎜、同短辺方向に 0.60㎜とし、各薄片で 500 ポイントを計測した。計数対象は、粒径 0.05㎜以上の岩石鉱物粒子である。

３．分析結果・考察

分析結果を表５に示す。砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を図９に示す。重鉱物組成では右側に基数を表示した。岩石組成折れ線グラフを図 10 に示す。折れ線グラフは、変質火山岩類・玄武岩・安山岩・デイサイト[1)]・花崗岩類・変成岩類・砂岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩・苦鉄質岩のポイント総数を基数とし、各岩石の構成比を示したものである。

クラスター分析樹形図を図 11 に示す。クラスター分析は、図 10 と同様のデータを用い、非類似度はユークリッド平方距離を用い、最短距離法によって算出した。図 11 は、今回分析試料と、甲府盆地から八ケ岳南麓地域の河川堆積物、および仲田遺跡・壱番下堤跡などの堆積物の分析結果と比較した（河西ほか ,1989, 河西 ,1989,2001a,2001b）。

以下に岩石鉱物組成の特徴について述べる。

御座田遺跡試料 Nos.1 ～８は、岩石鉱物組成において泥岩・変質火山岩類・砂岩などから主として構成される点、および石英・斜長石・カリ長石などの鉱物が少ない点などできわめて類似性が高い。細粒～極細粒砂から主として構成される No.1 では、石英・斜長石・カリ長石などの鉱物が多い傾向があるが、これは粒径による岩石鉱物組成の変化を示している。巨摩山地に分布する新第三系を特徴づける

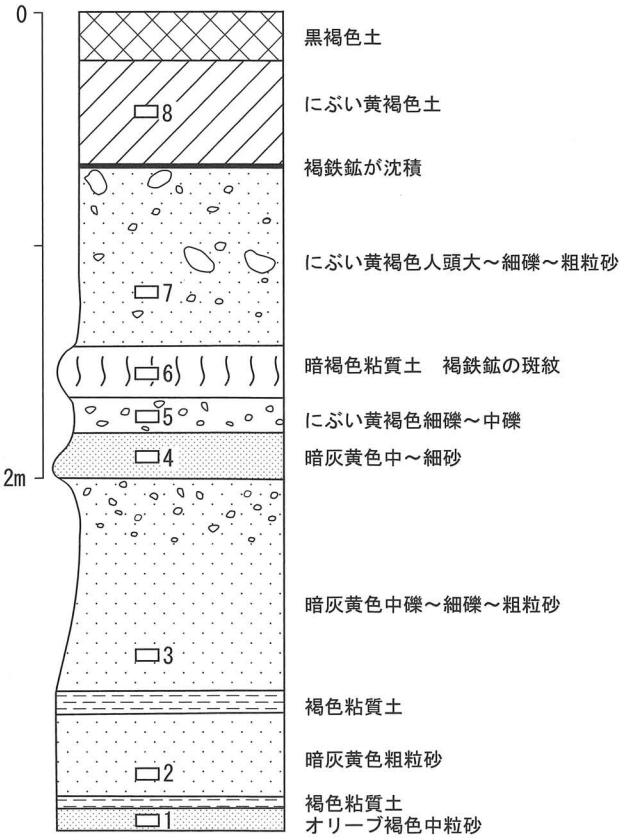


図８　御座田遺跡深掘り地点の柱状図と試料採取位置

表５　堆積物試料中の岩石鉱物（数字はポイント数。＋は計数以外の検出を示す）

試料番号	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8
石英-単結晶	11	19	15	4	6	17	11	60
石英-β型								
石英-多結晶	16	18	15	12	7	15	7	23
カリ長石	1	4		1	3	8	2	12
斜長石	13	19	7	9	4	23	6	71
黒雲母		1				1		
角閃石	2	3	2				2	1
単斜輝石	4	1	3	1	2		2	5
斜方輝石	+							
緑簾石								+
不透明鉱物	1					1		
玄武岩								
安山岩		2		1	1	1		
デイサイト				1				
変質火山岩類	18	15	13	25	33	20	20	18
緑色変質火山岩類	125	146	153	113	133	106	130	61
花崗岩類	21	1	12	26	15	13	13	31
ホルンフェルス				2		1	2	
他の変成岩類								
砂岩	49	36	51	77	77	58	70	24
泥岩	223	210	218	213	205	197	218	142
珪質岩	3	2	5	4	1	1	4	2
炭酸塩岩								
苦鉄質岩類								
火山ガラス-無色								
火山ガラス-褐色								
変質岩石	11	13	6	7	12	30	13	42
変質鉱物	2	7		2	1	2		3
泥質ブロック								
赤褐色粒子		3		2		6		5
マトリクス								
合計	500	500	500	500	500	500	500	500
石英波動消光	+	+	+	+	+	+	+	+
安山岩の斑晶鉱物		opx		cpx				
デイサイトの斑晶鉱物				ho, opq				
変質火山岩類岩質	AD, D	AD, D	AD, D	AD, D	AD, D	AD, D	AD, D	AD, D
花崗岩類含有鉱物			chl	ho, chl	chl	chl	chl	ho, chl
ﾏｲｸﾛｸﾞﾗﾌｨｯｸ組織	+				+			

鉱物：ｃｐｘ単斜輝石，ｏｐｘ斜方輝石，ｈｏ角閃石，ｃｈｌ緑泥石，ｏｐｑ不透明鉱物
変質火山岩類：ＡＤ安山岩質～デイサイト質，Ｄデイサイト質

緑色変質した変質火山岩類が各試料とも多く含まれる。花崗岩類は、角閃石・緑泥石を伴い、ときにマイクログラフィック組織を示す。花崗岩類の含有率は、きわめて少ない。重鉱物の含有率もきわめて少なく、重鉱物組成では、単斜輝石が多く、角閃石・黒雲母・不透明鉱物をわずかに伴う。図10では、すべての試料が類似性の高い岩石組成折れ線パターンを示す。図11では、御勅使川試料No.12・滝沢川試料Nos.3,18、仲田遺跡・赤山仲田遺跡のすべての試料、および壱番下堤跡No.12などとともにNos.1～8の全試料がクラスター３に含まれる。図11クラスター６は、釜無川河川砂のほか笛吹川流域の各河川砂、壱番下堤跡の大部分の試料が含まれる。このように図11では、クラスター３には御勅使川河川砂とその類似試料が、クラスター６には釜無川河川砂とその類似試料が含まれ、両者がに明瞭に区分された。岩石鉱物組成においても花崗岩類の優占と安山岩・泥岩・砂岩などを伴う釜無川河川砂の特徴が認められないことから、本遺跡の全試料は御勅使川によって堆積したものであると結論づけられる。

４．おわりに

御座田遺跡深掘り地点において採取した堆積物は、緑色変質火山岩類・泥岩・砂岩などで特徴づけられ、御勅使川河川堆積物の組成と類似性がきわめて高いことから、御勅使川の堆積作用によって堆積したものであることが明らかになった。近接する釜無川によってもたらされた堆積物が本地点まで及んだ現象は確認できなかった。

註

1）ここではデイサイト・流紋岩を含む珪長質火山岩の総称としてデイサイトを使用する。

文献

河西学（1989）甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成―土器胎土分析のための基礎データ―。『山梨考古学論集Ⅱ』、505-523。

河西学(2000)石橋北屋敷遺跡周辺の地形環境。『石橋北屋敷遺跡』、山梨埋蔵文化財センター調査報告書、第178集、103-106。

河西学（2001a）仲田遺跡を構成する堆積物の岩石鉱物組成。『仲田遺跡』、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書、第187集、40-42。

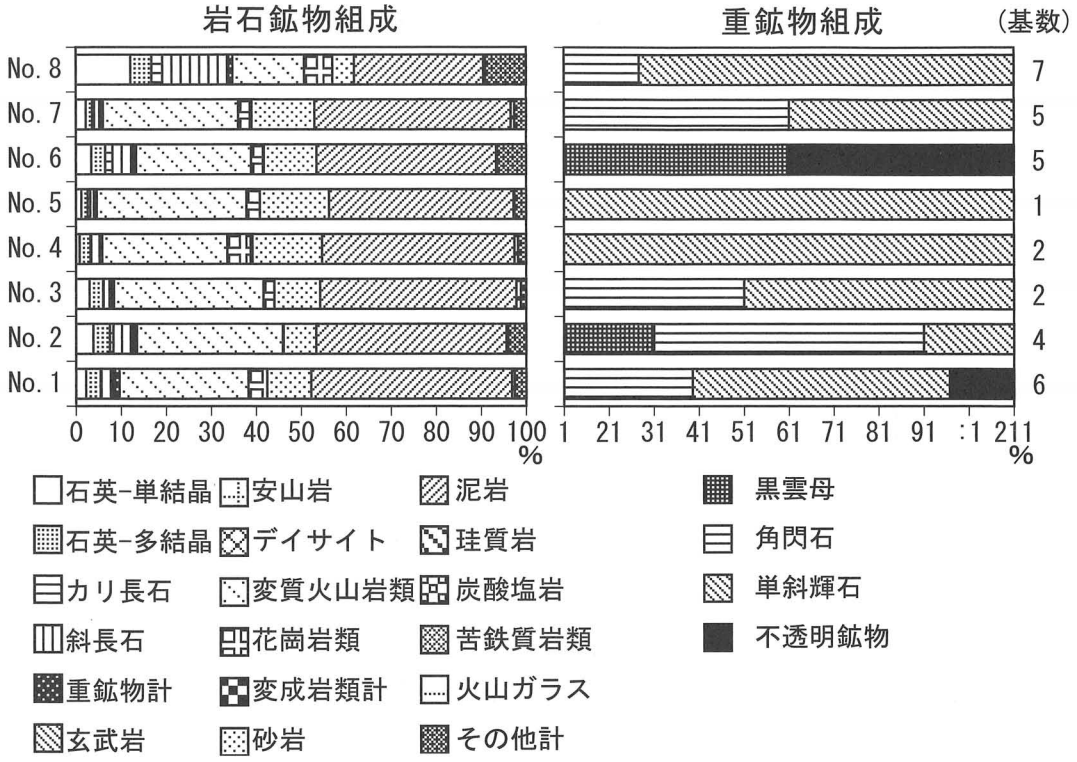


図９　岩石鉱物組成

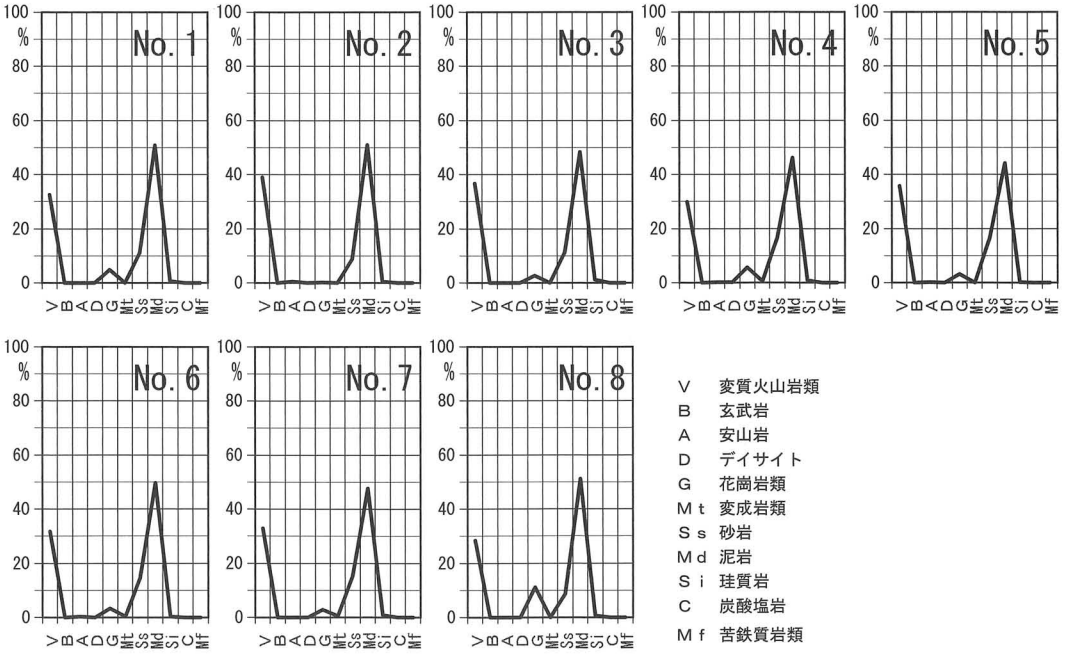


図 10　岩石組成折れ線グラフ

河西学(2001b)壱番下堤跡堆積物の岩石鉱物分析。『壱番下堤跡』、山梨県埋蔵文化財センター調査報告、第 190 集、23-29。
河西学 (2003) 赤山仲田遺跡堆積物の岩石鉱物組成。『赤山仲田』、八田村文化財調査報告書、第 5 集。
河西学・櫛原功一・大村昭三 (1989) 八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析。帝京大学山梨文化財研究所研究報告、第 1 集、1-64。

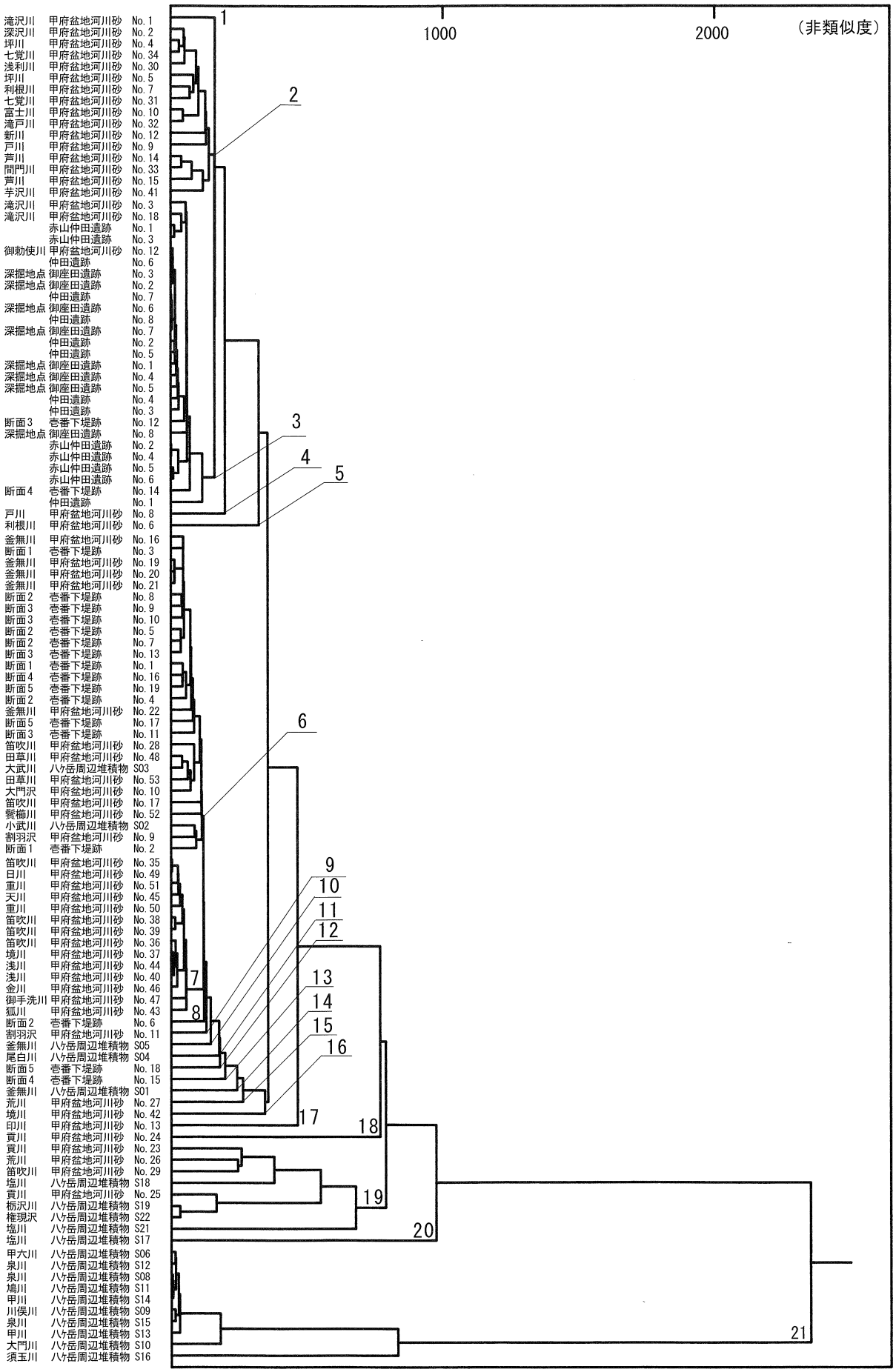


図 11　堆積物試料のクラスター分析樹形図

第２節　御座田遺跡から出土した炭化種実

新山　雅広（パレオ・ラボ）

１．はじめに

御座田遺跡は、山梨県韮崎市下條南割字御座田に所在する。ここでは、15～16世紀頃と考えられている１号溝覆土から出土した炭化種実を検討し、当時の利用植物の推定を試みた。

２．試料と方法

炭化種実の検討は、１号溝覆土から出土したものについて行った。試料は、洗浄済みであり、肉眼で炭化種実が抽出され、プラスチックケースに保管された試料が１試料、未抽出の残渣が入った試料が合計５試料（プラスチックケース１試料、チャック袋４試料）あった。これらの試料は、全て同一地点の試料なので、一括して扱った。炭化種実の採集・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。

３．出土した炭化種実

同定されたのは草本のみであり、イネ炭化胚乳、オオムギ炭化胚乳、オオムギ－コムギ炭化胚乳、コムギ炭化胚乳、ヒエ属炭化胚乳、アワ炭化胚乳、ホタルイ属炭化果実、タデ科炭化果実、アオツヅラフジ炭化種子、ダイズの仲間炭化種子、ササゲ属炭化種子、マメ科Ａ炭化種子、マメ科Ｂ炭化種子、マメ科Ｃ炭化種子、マメ科？炭化種子であった。全体では、650個前後の炭化種実が出土し、イネが約40％で最も多産した。次いで、オオムギが約30％、コムギが20％弱、オオムギ－コムギが約５％、アワが約２％、ヒエ属が約１％で出土し、これらイネ科穀類が全体の約96％を占めた。イネ科穀類以外では、マメ類が全体の約３％を占めたが、各々の分類群はいずれも１％以下であった。残りの約１％は、ホタルイ属、タデ科、アオツヅラフジであった。

４．主な炭化種実の形態記載

(1) イネ　Oryza sativa Linn.　炭化胚乳

側面観・上面観共に楕円形。両面の表面には、縦方向の２本の筋が入り、３等分される。これの真ん中は隆起し、両端は一段下がる。穎が少し付着したものが稀に含まれていた。

(2) オオムギ　Hordeum vulgare Linn.　炭化胚乳

側面観は長楕円形ないし紡錘形、断面は楕円形。腹面中央部には、上下に走る１本の溝がある。背面の下端中央部には、類三角形の胚がある。コムギに比べて細長く、幅に対して厚みが薄い傾向がある。

(3) コムギ　Triticum aestivum Linn.　炭化胚乳

側面観・上面観共に楕円形。腹面中央部には、上下に走る１本の溝がある。背面の下端中央部には、扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体に丸っこい傾向がある。なお、オオムギ－コムギとしたものは、状態が悪いか破片などの理由により、両者を識別し得なかったものである。これらの中には、完形か破片かの識別が困難なものも含まれる。

(4) ヒエ属　Echinochloa　炭化胚乳

側面観は卵形、断面はやや扁平なものと片凸レンズ形のものがある。胚は幅が広く、長さは胚乳の長さの2/3程度と長い。臍は幅が広いうちわ型。長さ1.5～2.4㎜、幅1.3～1.8㎜程度。

(5) アワ　Setaria italica Beauv.　炭化胚乳

側面観は円形に近く、先端が窪むものがある。胚の長さは胚乳の長さの2/3程度。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の小さな臍がある。長さ1.1～1.3㎜、幅1.1～1.3㎜程度。穎が少し付着したものが稀に見られる。

(6) タデ科　Polygonaceae　炭化果実

1）～4）の形態があり、複数種含まれると予想されるが、一括した。1）三稜形だが、断面はかなり丸みを帯びる。長さ2.0㎜、幅1.6㎜程度の卵円形。2）二面か三稜形か不明瞭であるが、こちらも断面はかなり丸みを帯びる。長さ1.5㎜、幅1.3㎜の卵円形。3）二面の卵円形で長さ2.1㎜、幅1.8㎜程度。断面は楕円形。4)二面の円形で先端は突出する。断面は扁平。長さ1.6㎜程度、幅1.3ないし1.4㎜程度。

表６　炭化種実出土一覧表

個数の（　）内は半分ないし破片の数を示す

分類群名	部位	出土個数
イネ	炭化胚乳	225(89)
オオムギ	炭化胚乳	195(29)
オオムギ－コムギ	炭化胚乳	28(13)
コムギ	炭化胚乳	105(3)
ヒエ属	炭化胚乳	7
アワ	炭化胚乳	12
ホタルイ属	炭化果実	1
タデ科	炭化果実	4(1)
アオツヅラフジ	炭化種子	1
ダイズの仲間	炭化種子	(1)
ササゲ属	炭化種子	1(3)
マメ科A	炭化種子	2(12)
マメ科B	炭化種子	1
マメ科C	炭化種子	4
マメ科？	炭化種子	1(1)

(7) ダイズの仲間　Glycine max type　炭化種子

発泡・欠損が著しいが、完形の3/4程度が残存していると推定される。残存長6.1㎜（完形推定8㎜前後）、幅5.2㎜、厚さ4.3㎜程度であるが、焼け膨れしているので、幅と厚さは実際にはもう少し小さい。臍が変形して残存しており、長さ3㎜、幅1㎜程度の扁平楕円形である。

(8) ササゲ属　Vigna　炭化種子

完形は、臍が残存しており、長さ2.0㎜程度の長楕円形であり、一方にやや片寄って位置する。臍の周囲は隆起してざらつく。完形でないものは、半分に割れた1/2片である。子葉内面には幼根が収まる細い溝状の窪みと初生葉が収まる比較的広い面積の窪みがある。子葉は、楕円形であるが、やや四角張る。完形は長さ4.6㎜、幅2.8㎜、厚さ2.8㎜程度。1/2片は、長さ3.5～5.0㎜、幅3.1～3.3㎜程度。

(9) マメ科A　Leguminosae A　炭化種子

ササゲ属に似るが、臍が残存しておらず、子葉内面は平坦であり、窪みがないことから、ササゲ属とは区分した。また、ササゲ属としたものと違い、四角張るものがなく、全て楕円形である。長さ3.1～5.2㎜、幅2.2～3.2㎜、厚さ2.0～3.0㎜程度でやや扁平気味である。ばらつきがあるが、長さ4～5㎜程度が多い。ササゲ属の可能性や一部にササゲ属を含む可能性もある。

(10) マメ科B　Leguminosae B　炭化種子

幼根部が顕著に突出する。長さ2.9㎜、幅2.4㎜、厚さ1.4㎜程度と小型でかなり扁平である。

(11) マメ科C　Leguminosae C　炭化種子

若干扁平であるが、球形に近い形状である。臍は不明瞭で確認できない。長さ2.3～3.1㎜、幅2.1～2.5㎜、厚さ2.1～2.5㎜程度。

(12) マメ科？　Leguminosae ？　炭化種子

発泡・欠損・変形が著しい。およそ完形のものは、マメ類であるとすれば、長さ7.1㎜、幅5.3㎜、厚さ4.3㎜と大きいので、ダイズの仲間と思われる。

5．考　察

検討した結果、15～16世紀頃には、イネ、オオムギ、コムギ、ヒエ属、アワといったイネ科穀類と、ダイズの仲間、ササゲ属、マメ科A～Cといった複数種のマメ類が利用されていたと考えられた。これらは、いずれも炭化しており、栽培地からの流入というよりは、生活の場から流入したか、人により直接投棄された可能性が高いであろう。他に、ホタルイ属、タデ科、アオツヅラフジが出土したが、ホタルイ属は低湿地の雑草と考えられ、溝のような場所に生育していたものの果実が焼けて出土したのであろう。タデ科は、現段階では種類が分からず、実体が不明であるが、栽培植物（穀類など）を含む利用植物と共に炭化して住居跡などからしばしば出土する。ホタルイ属と同様、単に付近に生育していたものが焼けて出土したのかもしれないが、何らかの形で利用されていた可能性もある。蔓性のアオツヅラフジは、茎や根を薬用にすると言う。そのような目的で採集されてきたものに果実が付随していたか、付近の低木に絡み付いていたものが焼けて出土したのであろう。

6．おわりに

15～16世紀頃には、イネ、オオムギ、コムギをはじめ、ヒエ属、アワといったイネ科穀類と、ダイズの仲間、ササゲ属などの複数種のマメ類が利用されていたと考えられた。

参考文献

佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・冨成忠夫（1982）日本の野生植物Ⅱ,318p,平凡社.

第３節　御座田遺跡の花粉化石群集

新山　雅広（パレオ・ラボ）

１．はじめに

御座田遺跡は、山梨県韮崎市下條南割字御座田に所在する。ここでは、中世の水田と推定されている畦断面の堆積物を試料とし、古植生および栽培植物の推定を試みた。

２．試　料

花粉化石群集の検討は、１号水田北壁の１号畦畔断面から採取された合計６試料（Ａ～Ｆ）について行った。本地点は、上位より１～６層に層位区分されており、5層は５(1)層（上位）と５(2)層（下位）に細分されている。試料は中～下位の３～５層より採取された。各試料の簡単な記載は、次の通りである。Ａ（3層）は、暗褐色砂礫混じり粘土。B･Fは、4層（水田上層）より採取され、灰黄褐色砂礫混じり粘土。Ｃは、５(1)層（畦）より採取され、褐灰色砂混じり粘土。D･Eは、５(2)層（水田下層）であり、Ｄは上部、Ｅは下部より採取された。試料は灰黄褐色砂混じり粘土。なお、これら６試料は、プラント・オパール分析も行われた。

３．方　法

花粉化石の抽出は、試料約2gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理(氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。

４．花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉３、草本花粉３、形態分類で示したシダ植物胞子１である。いずれの試料も十分な花粉化石を産出しなかったため、花粉化石分布図として示すことはできなかった。以下に、各試料の花粉化石群集を記載する。

試料Ａ(3層)：草本のタンポポ亜科を１点産出した。

試料B･F（4層；水田上層）：試料Ｂは不明花粉を１点、試料Ｆは木本のクリ属、カエデ属、シダ植物の単条型胞子を各１点産出した。

試料Ｃ（5（1）層；畦）：単条型胞子を２点産出した。

試料D･E（5（2）層；水田下層）：試料Ｄは木本のシイノキ属、単条型胞子を各１点、試料Ｅは草本のイネ科、カヤツリグサ科を各１点、単条型胞子、不明花粉を各２点産出した。

表７　花粉化石産出一覧表

和名	学名	A	B	C	D	E	F
樹木							
クリ属	*Castanea*	-	-	-	-	-	1
シイノキ属	*Castanopsis*	-	-	-	1	-	-
カエデ属	*Acer*	-	-	-	-	-	1
草本							
イネ科	Gramineae	-	-	-	-	1	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	-	-	-	1	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	1	-	-	-	-	-
シダ植物							
単条型胞子	Monolete spore	-	-	2	1	2	1
樹木花粉	Arboreal pollen	0	0	0	1	0	2
草本花粉	Nonarboreal pollen	1	0	0	0	2	0
シダ植物胞子	Spores	0	0	2	1	2	1
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	1	0	2	2	4	3
不明花粉	Unknown pollen	0	1	0	0	2	0

5．考　察

十分な花粉化石を産出しなかったため、古植生について推定することはできなかった。中世の遺跡周辺の森林植生は、落葉広葉樹のクリ属、カエデ属、常緑広葉樹のシイノキ属を含む植物相であり、イネ科、カヤツリグサ科、タンポポ亜科といった草本類やシダ植物が生育していたと言うに留めざるを得ない。なお、花粉化石は、水成堆積物である場合には良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では化学的風化により分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。検討した試料は、花粉化石の保存状況が悪いことから、少なくとも水成環境で安定して堆積したものとは考え難い。つまり、常時滞水した環境ではなく、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったことが示唆される。

6．おわりに

検討した試料は、十分な花粉化石を産出しなかったため、古植生について推定することはできなかった。試料とした堆積物は、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境で堆積したものと考えられた。

第４節　御座田遺跡のプラント・オパール

鈴木　　茂（パレオ・ラボ）

１．はじめに

山梨県韮崎市下条南割に所在する御座田遺跡において行われた発掘調査で、中世の水田と推測される遺構が検出され、土壌試料が採取された。この土壌試料について、水田稲作が行われていたかを検証する目的でプラント・オパール分析が行われた。以下にその結果・考察を示す。

２．試料と分析方法

分析用試料（Ａ～Ｆ）を採取した地点付近の土層断面と試料採取層準（●）を図12に示した。各試料について、３層（試料Ａ）は暗褐色の砂質粘土、４層（試料Ｂ，Ｆ）は灰黄褐色粘土、５（1）層（試料Ｃ）は褐灰色のシルト質粘土、５(2)層（試料Ｄ，Ｅ）は灰黄褐色粘土、６層は灰黄褐色の粘土混じり砂礫である。これらのうち４層は水田覆土、５（1）層は畦、５（2）層は水田層、６層は水田覆土と考えられている。プラント・オパール分析はこれら６試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02 gのガラスビーズ（直径約40 μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

３．分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１g当りの各プラント・オパール個数を求め（表８）、それらの分布を図13に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料１g当りの検出個数である。

検鏡の結果、全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。個数としては、最も少ない試料Ｄにおいても9,000個を示し、最上部試料Ａでは40,000個近くに達するなど非常に多くのイネのプラント・オパールが得られている。

イネ以外では、ネザサ節型が最も多く検出されているが、上部では急減している。クマザサ属型もネザサ節型と似た産出傾向を示しており、最上部で急減している。キビ族はおおむね上部に向かい増加しており、最上部では10,000個を越えている。その他シバ属やウシクサ族も多くの試料で観察されている。

４．稲作について

上記したように、全試料より多数のイネのプラン

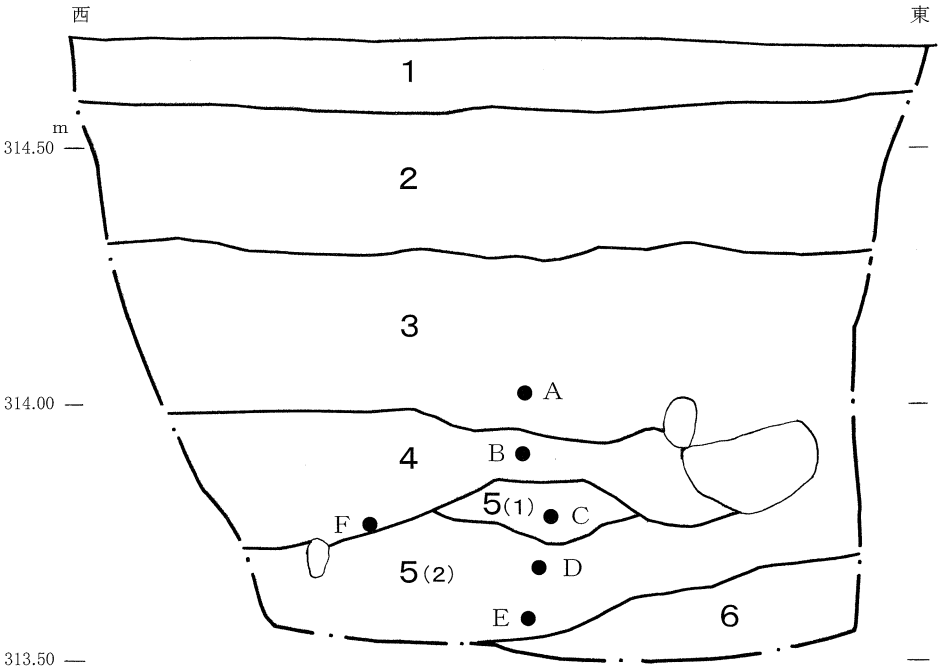


図12　試料採取地点付近の断層断面と試料採取層準（●）

ト・オパールが検出されている。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネのプラント・オパールが試料１ｇ当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原　1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。御座田遺跡においては、少ない試料でも約9,000個といずれも5,000個をはるかに越える個数が得られており、検出個数からは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。また畦試料Ｃにおいても10,000個を越えるイネのプラント・オパールが検出されているが、この畦は毎年水田土壌を用いて補強されることから大量のイネが検出されたものと推測される。

５．遺跡周辺のイネ科植物

ネザサ節型が最も多く検出されており、遺跡周辺の空き地や森林の縁辺部などの日の当たる開けた所にアズマネザサを主体としたネザサ節型のササ類が多く生育していたとみられる。またススキヤチガヤなどのウシクサ族も同様の所での生育が考えられ、アズマネザサ―ススキ群集といった草地が成立していたと推測される。またクマザサ属型のササ類（スズダケ・ミヤコザサなど）は丘陵部に成立していたであろう落葉広葉樹林の下草的存在で分布していたとみられる。

キビ族が上部に向かい増加しており、これはイネとほぼ同様の産出傾向であり、本地点が上記したように水田稲作地の可能性が高いことなどから水田稲作に関係したキビ族、すなわちタイヌビエを中心とした雑草類である可能性が高いと思われる。また畦などにはシバ属（ノシバなど）が生育していたとみられる。

引用文献

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用―先史時代の水田址探査―．考古学ジャーナル，227,p.2-7.

表８　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数

試料番号	イネ	ネザサ節型	クマザサ属型	他のタケ亜科	サヤヌカグサ属	シバ属	キビ族	ウシクサ族	不明
	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)	(個/g)
A	37,300	12,400	1,100	2,300	0	3,400	10,200	2,300	7,900
B	16,800	34,800	7,200	6,000	1,200	1,200	6,000	2,400	10,800
C	10,400	59,100	7,000	8,100	0	0	3,500	0	5,800
D	9,000	54,000	10,300	9,000	0	1,300	2,600	2,600	2,600
E	20,700	64,500	7,300	7,300	0	3,700	2,400	2,400	12,200
F	11,500	73,700	4,600	5,800	0	5,800	8,100	4,600	5,800

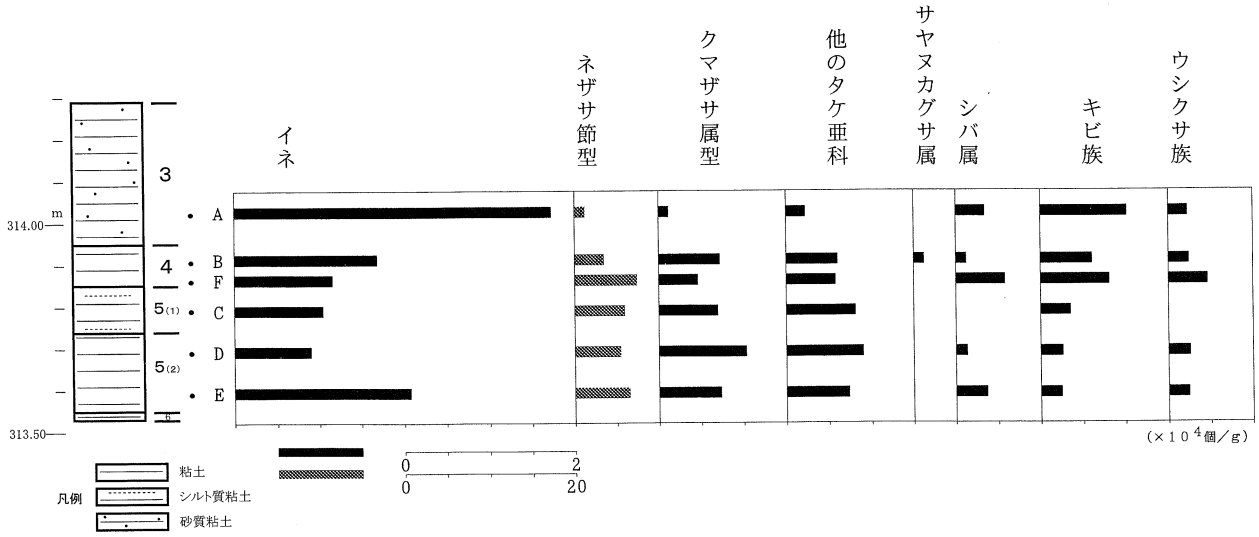


図13　御座田遺跡のプラント・オパール分布図

第５節　御座田遺跡の１号土坑出土歯牙について

金井　慎司（パリノ・サーヴェイ）

１．試　料

試料は、御座田遺跡（山梨県韮崎市龍岡町下条南割）の１号土坑から出土したヒトの歯牙片である。歯牙片は、頭骨付近より試料Ａと試料Ｂの２試料として採取されている。これらの歯牙片の同定から、埋葬人骨に関わる情報を得る。

２．分析方法

試料に付着した土壌を乾いた刷毛等で除去した後、試料を肉眼で観察し、部位等の同定を行う。

３．結果および考察

検出された部位は、ヒトの上顎および下顎の歯牙片である（表９）。なお、これらの歯牙には、歯冠部だけでなく歯根部の残存するものも認められたが、遺存状態は不良であり、いずれも極めて脆く、崩壊しやすい状態であった。試料Ａと試料Ｂからは、重複する部位が認められなかったことから、１体分の歯牙からなると推定される。なお、１点は、歯冠部が崩壊しているため、部位を特定することができない大臼歯片である。

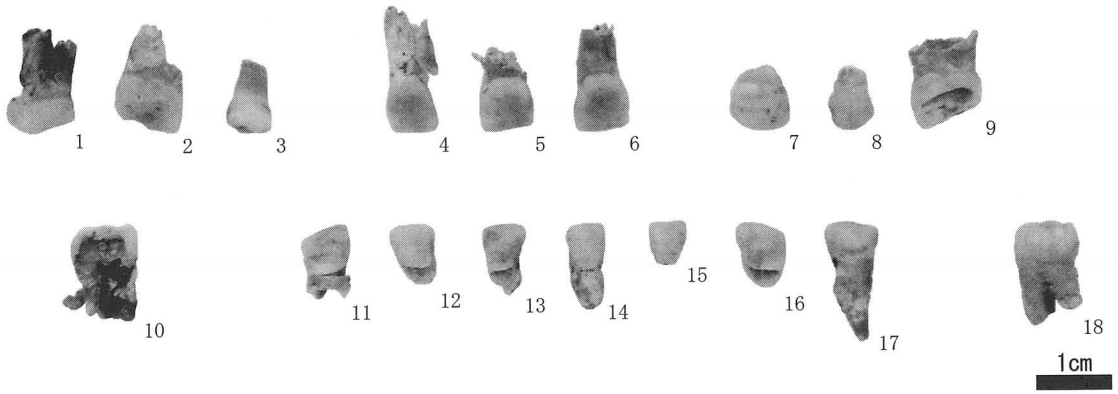
また、本人骨は、第３大臼歯が確認されたことから成人に達していたと推定され、第1/2大臼歯の咬頭がほぼ磨耗し、さらに、象牙質の露出が認められたほか、第３大臼歯にも咬耗が認められることから、熟年（40～59歳程度）に達していた可能性がある。

なお、性別については不明である。

表９　歯牙同定結果

	右							左							備考
上顎	M^3	$M^{1/2}$	$P^{1/2}$		C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	$P^{1/2}$		$M^{1/2}$	M^3	この他、試料Aで部位の特定が困難な大臼歯片1点あり
	○	○	○		―	△	○	○	―	△	○		○	―	
下顎	M_3	$M_{1/2}$	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	$M_{1/2}$	M_3	
	―	―	―	―	△	△	△	△	△	△	△	―	―	○	

註）○：試料A、△：試料B、―：未検出



1. 右上顎第3大臼歯（試料A）
2. 右上顎第1/2大臼歯（試料A）
3. 右上顎第1/2小臼歯（試料A）
4. 右上顎側切歯（試料B）
5. 右上顎中切歯（試料A）
6. 左上顎中切歯（試料A）
7. 左上顎犬歯（試料B）
8. 左上顎第1/2小臼歯（試料A）
9. 左上顎第1/2大臼歯（試料A）
10. 大臼歯片（試料A）
11. 右下顎犬歯（試料B）
12. 右下顎側切歯（試料B）
13. 右下顎中切歯（試料B）
14. 左下顎中切歯（試料B）
15. 左下顎側切歯（試料B）
16. 左下顎犬歯（試料B）
17. 左下顎第1小臼歯（試料B）
18. 下顎第3大臼歯（試料A）

（註）試料Ａ、Ｂともに頭骨付近からの出土骨片中より取り上げたものであるが、Ａは散在した歯牙をまとめたもの、Ｂは、下顎骨とともにひとまとまりで出土したものである。

図14　出土歯牙

第６節　御座田遺跡出土のウマについて

西本　豊弘（国立歴史民俗博物館）
植月　　学（山梨県立博物館）

御座田遺跡からウマの頭蓋骨、遊離歯３点、および歯片と骨片が少量採集された。所属時期は15～16世紀代である。

頭蓋骨は１号溝中底面から頭頂部を上にしてほぼ水平に出土した。切歯骨を含む口蓋部が比較的良く残っている。頭蓋腔底部や側頭骨なども確認できるが、遺存状態が悪く、周囲の土と一体化しているため、検出して精査することができない。左右ともに臼歯列部分が残っている。左側は第３・４前臼歯と第２後臼歯、右側は第２～第４前臼歯と第２後臼歯が植立しており、他は脱落している。歯の磨耗は進んでおり、成獣である。

遊離歯は、上顎の左第３・４前臼歯と右第２後臼歯であった。歯の磨耗は進んでおり、歯根も短い。おそらく10歳前後の壮年の個体であろう。これらの３点は同一個体である可能性が歯の大きさを計測すると比較的大きく、おそらく体高135cm程度であろう。雌雄は不明である。

この他に歯の破片が１個分出土しているが破損しているため歯種は不明である。骨片も小さいため種と部位はわからない。

表10　ウマ歯計測値（単位mm）

地点など	上下	左右	歯種	長さ	幅
１号溝	上	左	第３前臼歯	－	23.3
			第４前臼歯	22.3	23.4
			第２後臼歯	21.7	22.6
		右	第２前臼歯	37.3	19.6
			第３前臼歯	26.1	22.8
			第４前臼歯	24.1	23.4
			第２後臼歯	22.5	－
No.392	上	左	第３前臼歯	28.8	26.4
No.1294	上	左	第４前臼歯	26.4	23.5
No.735	上	右	第２後臼歯	24.8	23.9

（註）遊離歯の出土地点については、第１図（No.1294）、第６図（No.392・735）を参照。

第5章　総　括

1

今回の調査では、当初、釜無川の河原にあったという旧御座田村の集落跡の発見が期待され、その消長を明らかにすることが目的のひとつであった。御座田村の移転が堀切、信玄堤の構築時期を知る上で手がかりとなると考えられているからである。

その前提として堀切付近から広がる小扇状地の形成過程、御勅使川の流路変遷を周辺遺跡のあり方、礫組成の分析から考え、これまでに知られている文書、絵図等の史料、周辺石造物の分布状況との検討を行うとともに、考古学的な調査によって確認された事実との突合せを行った。

御勅使川（本御勅使川）の流下については、これまでの研究成果によれば次のように整理されている。すなわち御勅使川南流路が15世紀末～16世紀初の大氾濫によって埋没したあと、新たに前御勅使川が形成され、前御勅使川が振幅を繰り返す中で16世紀に現在の本御勅使川ができ、2流路併存しつつ、本流としては今日までに本御勅使川に集約されていったという。

本御勅使川流域にある野牛島大塚遺跡では、古くは縄文時代晩期の土器片が採集され、古墳時代前期以降、奈良・平安時代にかけて竪穴が多数検出されている。その頃までの御勅使川は十日市場、下今井、御勅使川南など、主に御勅使川扇状地南半を流下しており、龍岡台地に近い北半は比較的安定的な立地であった。また御勅使川対岸、本遺跡に近い石橋北屋敷遺跡では本遺跡と同時期と考えられる集落域、墓域が検出され、中世前半以降、15～16世紀の内耳土器、土師質土器類が多数出土したことから、中世においても継続的に安定した地域と考えられる。また仲田遺跡では16世紀後半に洪水砂によって水田が埋没していることから、その頃、今日の本御勅使川の流路形成の動きがあったことが指摘されている（今福2004）。仲田遺跡については本御勅使川の右岸にあたり、堀切を基点とする小扇状地で覆われた旧小扇状地上に立地するが、礫分析では割羽沢川ではなく御勅使川の堆積物と判明しており、本御勅使川の氾濫による埋没と判明している。つまり堀切を横切って東流する現流路の始まりが、確実なところで16世紀後半頃には考古学的に確認されたことになる。

さて、今回の調査区が立地する堀切地点から派生する小扇状地の堆積物の起源については、下層の礫分析により御勅使川であることがわかった。地形面上の遺構は、遺物からの判断で15～16世紀から18世紀後半までが主体的と考えられるほか、14世紀代の常滑甕、13世紀代に遡る青磁碗と柱状高台土器かと思われる資料の存在が注目される。13世紀代の遺物については量が非常に少ないことから伝世品、あるいは流れ込みの可能性もあるが、遺物の内容からすれば石橋北屋敷遺跡、仲田遺跡とほぼ同様な時期を示している。

つまり御座田遺跡が立地する小扇状地の地形は15～16世紀代に存在したことは確実で、これまでいわれているように16世紀に流路変更に伴ってからの形成ではない。遡って形成開始が13世紀、中世前半以前の可能性も十分にある。小扇状地形成との関連が深い堀切については、堀切が人工的な開削なのか、保坂康夫氏が推測するようにもともと自然流路として存在したものなのか議論が分かれているが、15世紀以前の形成となれば自然流路とする後者の可能性が高い。これまで堀切側の小扇状地の形成時期については考古学的に検証されておらず、今回初めて検討材料を提供することになった。従来、旧竜王町側の信玄堤との関連で堀切開削が16世紀代とされてきたが、人工的な開削説および開削時期については再検討する必要がある。小扇状地自体は中世前半以前に形成された地形であって、16世紀後半以降、本格的に御勅使川本流として流路が固定した可能性があり、また16世紀代に本流が堀切側に移動してきた中で、さらに流路固定のために堀切地点を人工的に開削したということも十分に考えられるところであり、むしろその可能性が高い。したがって御座田遺跡から信玄堤の時期を考えることは難しく、信玄堤のほか御勅使川治水遺跡群の構築年代については、これまでの先行研究に委ねることとしたい。

2

『甲斐国志』等の史料で散見される御座田村については、墓域の一角を検出するにとどまった。墓坑として確実なのは屈葬人骨を伴う1号土坑のみであるが、周囲に集石をもつ2号土坑、配石をもつ3～5号土坑があり、計5基が群をなして分布する。隣接して水田と思われる畦が見つかり、プラントオ

パール分析で稲作が行われていたことが推測された。釜無川流域が水田として開発されるとともに周辺に墓域をもつ集落が形成されたと考えられる。墓域近くからは溝が見つかり、その溝自体の性格は不明のままであるが、石橋北屋敷遺跡のような墓域の区画溝かと思われる。その溝内の覆土中には土師質土器、内耳土器といった小片とともに炭化粒が多量に含まれていて、水で浮遊しやすい性格をもつ炭化物が、周辺から水流の影響で溝内に集まったことがわかる。周辺には墓地、水田のほか畑地が広がっていたことが推測され、田畑での火入れによる土壌改良、片付けが頻繁に行なわれた際の炭化物の集積とするならば、炭化物の分析によって当時の栽培作物の種類が判明する。

分析では約650粒の炭化種実の種別が明らかとなり、イネ4割、オオムギ3割、コムギ2割のほかアワ、ヒエ、マメ類がわずかだが存在する。これまでの水洗選別では主に古代の竪穴住居の竈内土壌を分析対象として行ってきたが、竈という調理の場での情報と違い、田畑由来の可能性の高い溝の場合、2次的な移動による結果と考えられる点、注意しなければならない。おそらく周辺田畑から流入した炭化種実であり、作物量（収穫量）の大小を意味する可能性が十分あるが、季節の違い、浮遊しやすい、しにくいといった移動性も考慮せねばならず、単純な比較はできない。ムギ類などは浮いて移動しやすいのに対し、イネやマメ類は沈みやすいといった特徴に対しても注意を払う必要があろう。いずれにしても中世後半ではイネと同量、あるいはそれ以上のムギ類が栽培されていたことが推定でき、笛吹市一宮町西田町遺跡で確認された中世前半（12～13世紀）の傾向を受け継ぐ様相を読み取ることができる。裏作としてのムギ栽培の比重の大きさを表した結果として理解でき、15世紀以降に内耳土器、17世紀以降に焙烙といった調理具の普及と大いに関連があるのだろう。

1号土坑の人骨については覆土上層から内耳土器、土師質土器皿などの小破片が出土し、埋葬形態が中世に一般的な北枕西向き横臥屈葬であることから、中世後半、戦国時代の埋葬と思われる。こうした墓坑の類例は多く、石橋北屋敷遺跡では11体もの人骨が出土し、いずれも隅丸方形の土坑内への北枕西向き横臥屈葬による直葬的な埋葬形態であった。本遺跡1号土坑例には副葬品がなかったが、通常は銭貨を6枚、3枚ずつに分けて胸付近にもつ例が多い。本遺跡3・5号土坑については掘り方の壁に沿って礫を配すタイプ、4号土坑については一部蓋石を掛けるようなタイプであった。3号土坑からは骨片がわずかに出土し、集石をもつ2号土坑についても土坑墓と考えておきたい。配石墓については石橋北屋敷遺跡では出ていないが、最近調査された野牛島西ノ久保遺跡北地区では平安末から中世前半と考えられる配石墓があり、わずかに骨片を伴い、北枕の頭部北側に副葬品として小型和鏡が出土した。また笛吹市一宮町西田町遺跡でも石棺墓とよびうる配石墓1基から副葬品として刀子が出土し、周囲の状況から中世前半と考えられている。ほかに県内では豆生田第3遺跡、藤林寺遺跡、健康村遺跡（以上北杜市）に配石墓の類例があるほか、土坑上層に集石を載せる事例は多数ある。長野県にも東部町久保在家遺跡など、東信地方に石囲い状の配石をもつ墓坑があり、北巨摩から東信にかけて目立つ墓制である。時期については通常の土坑墓に先行し、13～15世紀代の時期と思われ、副葬品も銭貨を入れる風習以前にあたり、刀子などを入れる場合があるらしい。本遺跡の配石墓については、15世紀以前の遺物の存在と関連する可能性も視野に入れておきたい。

水田遺構はC区東端で畦が約14mにわたって東西方向に確認されたのみで、面的な調査ができなかったが、扇状地扇端部に水田が存在したことは確実で、周囲から出土した土器類から1号溝とほぼ同時期（15～16世紀）と推測される。A区で検出された溝および畝状遺構も水田に伴うものと推測され、小扇状地に堰を引いて水を巡らしたものと思われる。したがってその時点で南側、現御勅使川方面から引水するための流路と安定的な水量が確保されていたといえ、御勅使川本流、あるいは割羽沢方面からの利水施設が整備されていたことがわかる。このことから堀切周辺で水田が整備されるのは御勅使川が現位置に固定されるようになってから、と考えることができ、先の御勅使川変遷過程の中で、16世紀以降に本御勅使川が現在地に形成されたという証左とすることもできる。なおA区の溝については時期が不明確ではあるが、調査前に存在した水田の地割とほとんど重複することが注意され、水田の区画が連綿と今日まで維持されていたことがわかる。

3

遺物の出土状況で興味を引いたのが凹石である。「凹石状石器」（折井 1988）とも呼ばれる石製品で、C区1号土坑北側付近に集中的に出土したほか、1号溝中からも出土している。ほとんどが完品で、いくつかは逆位での出土であった。安山岩などの自然礫の一面に直径7～10cm、深さ3～7cmの円形の盲孔が穿たれ、底面は丸いタイプのほか、平らですわりがよいタイプがある。注意深く見てみると平たいタイプには底部全体に明らかな敲打痕が見られるほか、丸いものにも敲打痕がある。用途は不明ながら「つき臼」として報告した事例（櫛原 1997）、井戸掘り等を行う際の轆轤（「かくらさん」）の回転軸を受ける軸受け石として考察されたものがある（新津 1990）。県内では社口遺跡、宮ノ前遺跡に類例があるほか、長野県佐久地方、松本平では古墳時代から平安時代の竪穴に伴って出土するが数は少なく、中世になって出土量が著しく増大する。凹みの内壁はやや滑らかで、回転運動による磨耗によるものか、あるいはつき臼として搗いた痕跡かどうか分析を要する。これまでまとまって出土する傾向や出土地点、出土状況（向き）については特に注意されていないが、本遺跡では墓域との関連性、逆位での出土傾向、集中性が認められる。

自然遺物としては1号溝中のウマ頭骨が注目すべき出土状況であった。人為的に置いたように溝底面から出土し、何らかの祭祀に伴う可能性もあるが、墓域周辺ということで、家畜等の遺体が墓域周辺に廃棄されたのであろう。そのほか遺構外からもウマの歯が単独で点々と出土しているが、古代・中世の遺跡を調査するとこうした出土状況をしばしば目にすることがある。中世には御勅使川流域の八田地内に県内有数の牧、八田牧が存在したことが知られており、中部横断自動車道建設に伴って調査された百々遺跡での牛馬類88個体以上の出土は、有野、百々、六科付近に想定される八田牧の存在を裏付けるものと考えられている（今福 2004）。韮崎市上条北割あたりから有野、飯野新田、曲輪田、平岡、中野にかけての一帯は『甲斐国志』でみると近世、牛馬の保有数、保有率が極めて高いことが指摘されており（今福 2004）、中世以来の牧の伝統を引く地域であったとされる。1号溝のウマの出土状況を考えるうえで、そうした背景を考慮すべきであろう。

4

最後に、御座田村はどこにあって、いつ消えたのか再整理しておく。万延2年（1861）の千野家文書「甘利庵御用留」によれば、度重なる水難によって人家は高台へ移ったとあり、現在龍岡台地上にある越道集落の由緒について記したものとされる。移転時期は不明ながら移転理由を知ることができる史料で、釜無川氾濫原にあった御座田村移転についての伝えとみることができよう。越道には、かつて古宮にあったといわれる唐土神社があり、神社の遷宮棟札、石造物類の記年銘を集落移転年代の参考にすることができる。

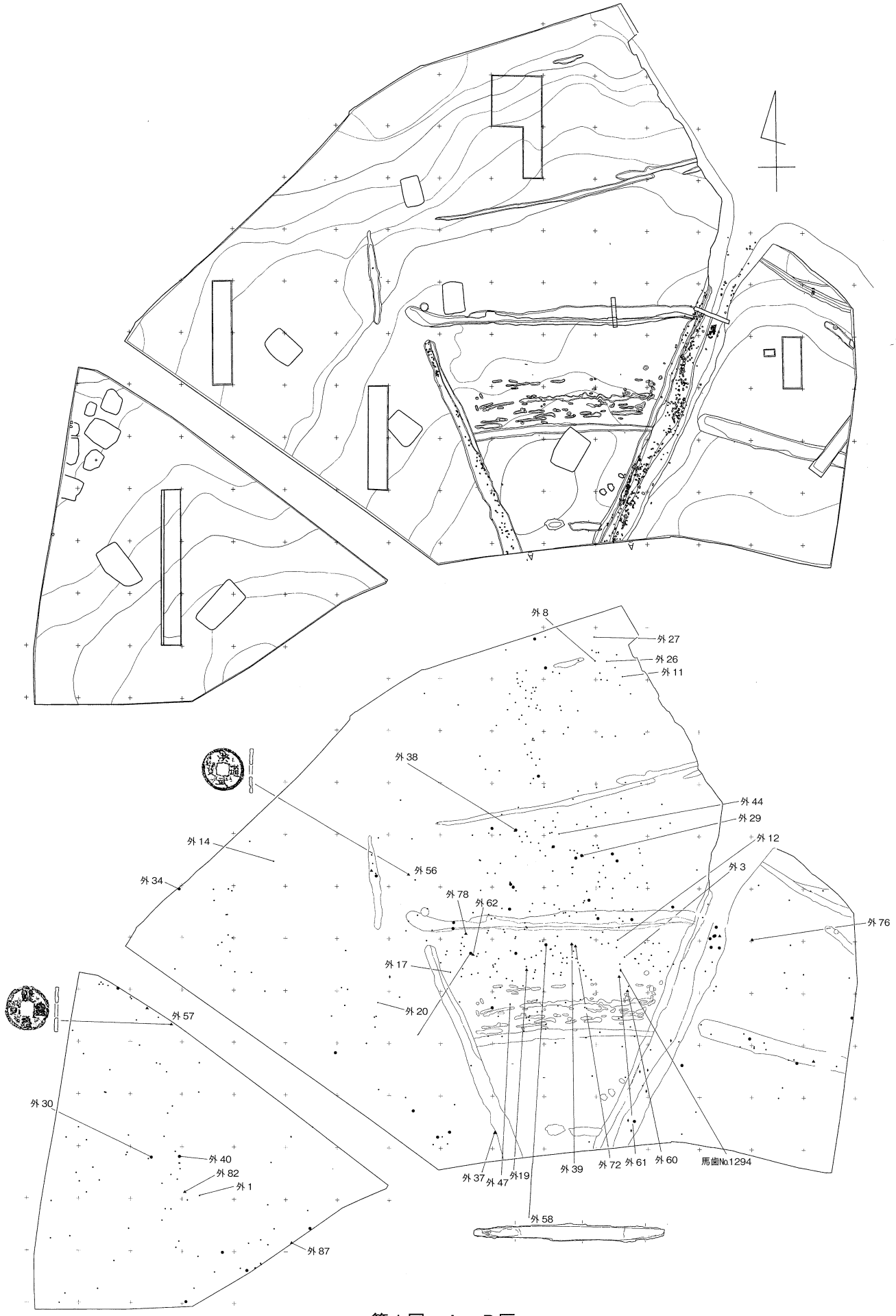
御座田村の位置を図示した史料として「巨摩郡下条南割村差出絵図」（文化3年、1806）、「巨摩郡野牛島村遠藤堰井路並水揚口争論場所御見分用絵図」（嘉永5年、1852）がある。いずれも移転後におおよその位置を示した図に過ぎないが、それらによれば釜無川氾濫原、十六石に近い場所にあったことがわかる。

文献史料からの検討によれば、堀切の出岩除去についての訴状（元禄13年、1700）は御座田村流出の危険性を訴えたもので、その時点で御座田村が存在したことは確かであり、100年後の文化3年絵図の時点、および『甲斐国志』の時点では「昔ハ御座田村アリテ」とあるように、廃村となって久しい年月が経過していた。したがって廃村時期はそれ以前で、ひとつの手がかりとしては唐土神社遷宮棟札（天明7年、1787）を神社移築時と考えたとき、天明7年以前といえる。今回の調査の一環として周辺を踏査したさいに、古宮付近で安永8年（1779）の石祠が確認されたことから、安永8年から天明7年の8年間に移転時期を絞ることが可能と思われる。天明年間およびその前後は毎年のように水害の被害が発生した時期で、いずれの年の水害か判断はできないものの、出岩除去工事がおそらく実施されたことにより、川筋がより北側に固定され、堀切の北東に位置する御座田村が水害によって被災するという結果に至ったものと思われる。調査で出土した遺物からみると、19世紀以降の陶磁器類がほとんどなく、18世紀後半までの時期に収まることから、御座田村移転の推定年代との整合性はあるといえる。天明年間は大飢饉、浅間山大爆発など天災、異常気象に見舞われた時期にあたり、そうした中で御座田村は移転を余儀なくされたのであろう。

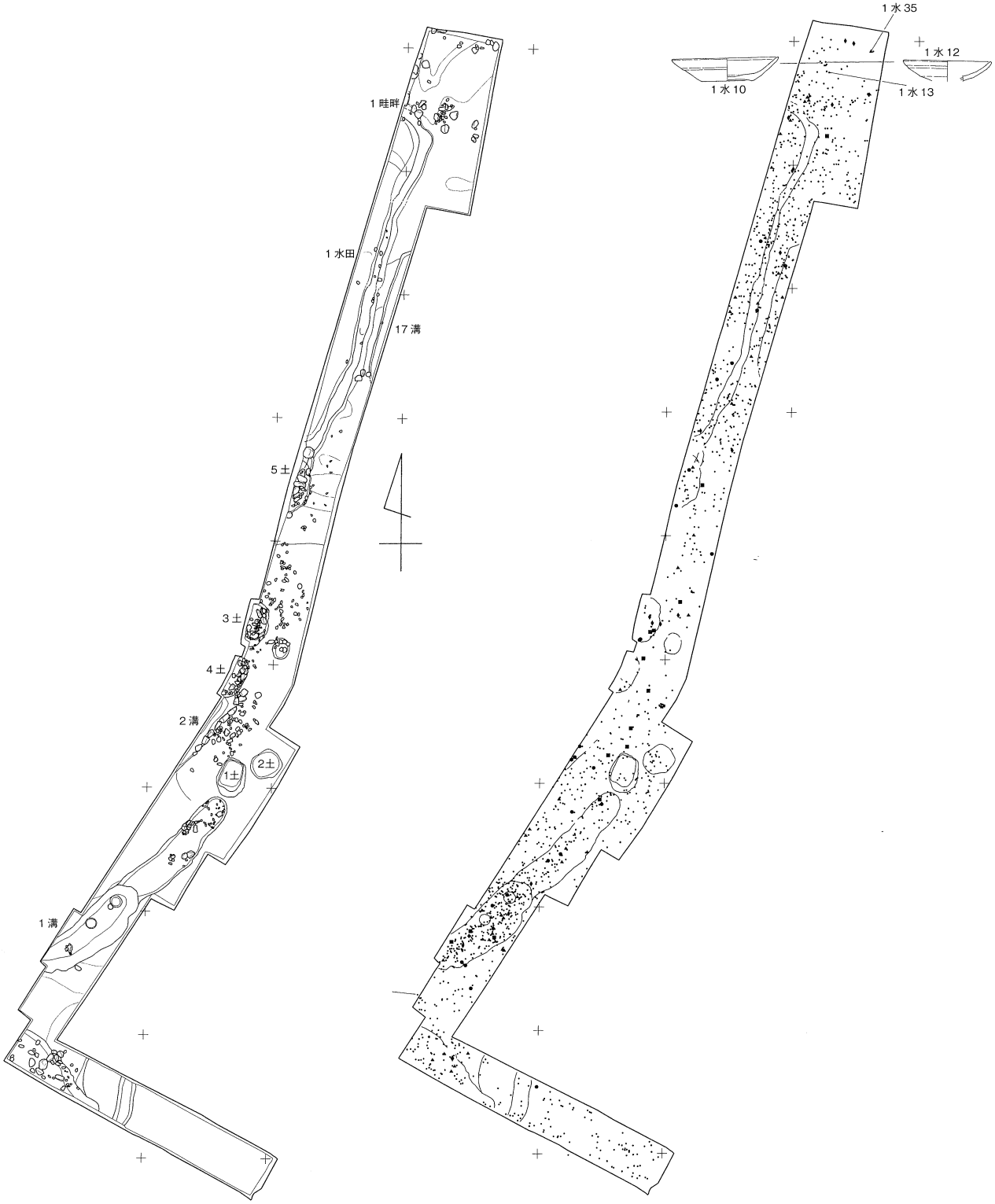
文末になりましたが、調査準備、発掘調査から報告書刊行に至るまでの間、峡北広域行政事務組合の皆様および韮崎市教育委員会をはじめとする関係者の方々には発掘調査に対してご理解いただくとともに、ご指導、ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。また調査に参加していただいた皆様には炎天下のもと、調査にご協力いただき、心より感謝申し上げます。

＜参考文献＞

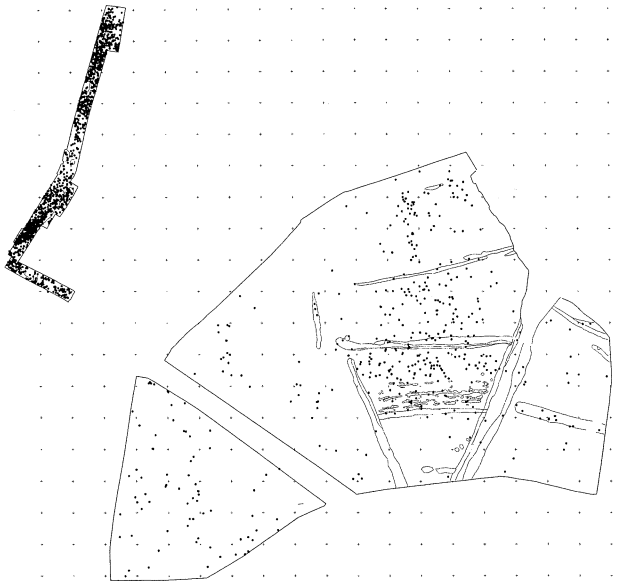
今福利恵　2004「調査の成果」『百々遺跡 3・5』山梨県教育委員会ほか
中世墓資料集成研究会　2005『中世墓資料集成―中部・東海編―』
櫛原功一　1997『社口遺跡第 3 次調査報告書』社口遺跡発掘調査団ほか
折井敦　1998『坂下遺跡』白州町教育委員会
新津健　1990『大輪寺東遺跡』山梨県教育委員会
降矢哲男・佐々木満・山下孝司　2001「山梨県内における中世の土器様相について―土師器皿を中心にして―」『中世土器研究論集―中世土器研究会 20 周年記念論集―』中世土器研究会


外8
外27
外26
外11
外38
外44
外29
外12
外3
外14
外56
外34
外78
外62
外76
外17
外20
外57
外30
外40
外82
外1
外87
外37
外47
外19
外39
外72
外61
外60
馬歯No.1294
外58

第1図　A・B区

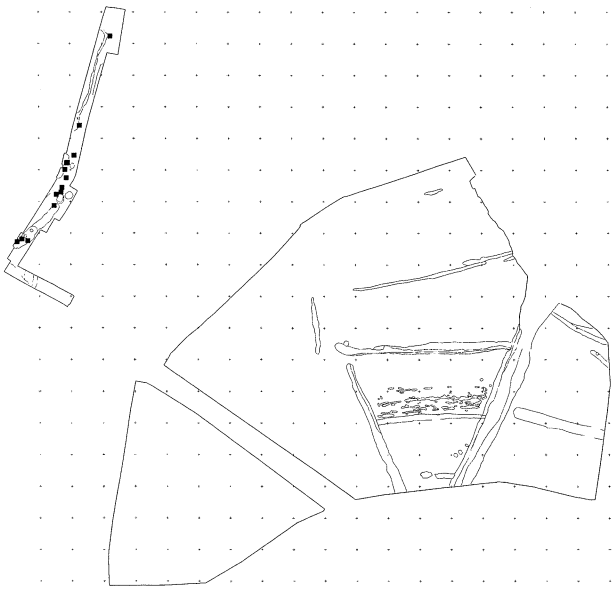


第2図　C区

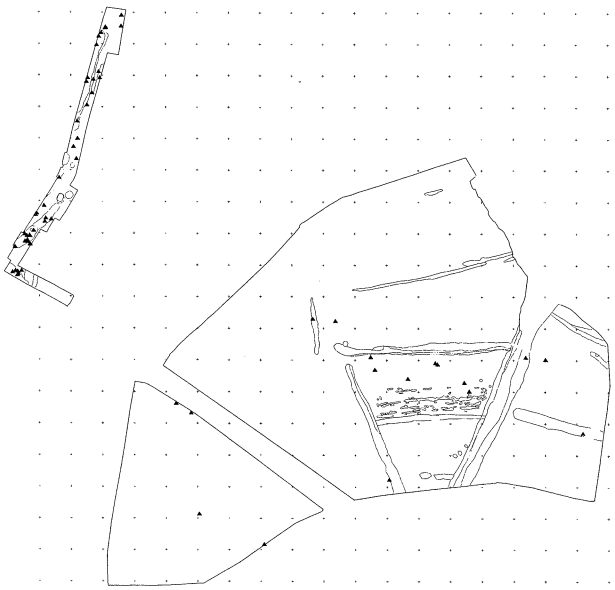


(1) 土師質土器（皿・内耳土器ほか）

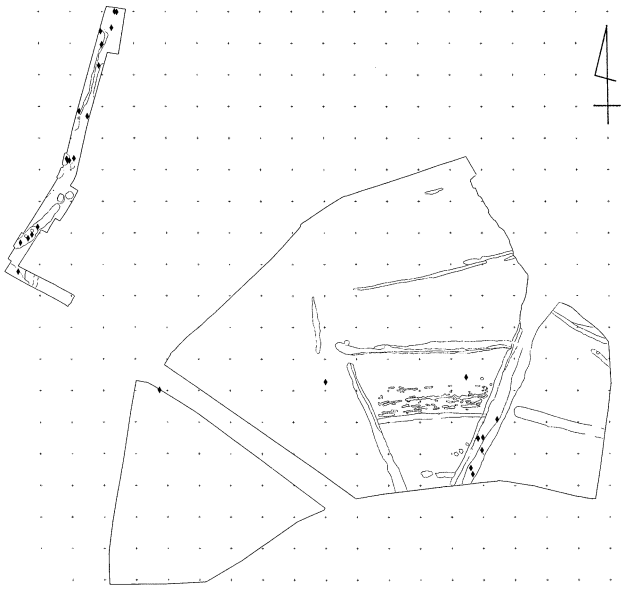
(2) 陶磁器（青磁・近世陶磁ほか）



(3) 石製品（石鉢・凹石・砥石ほか）

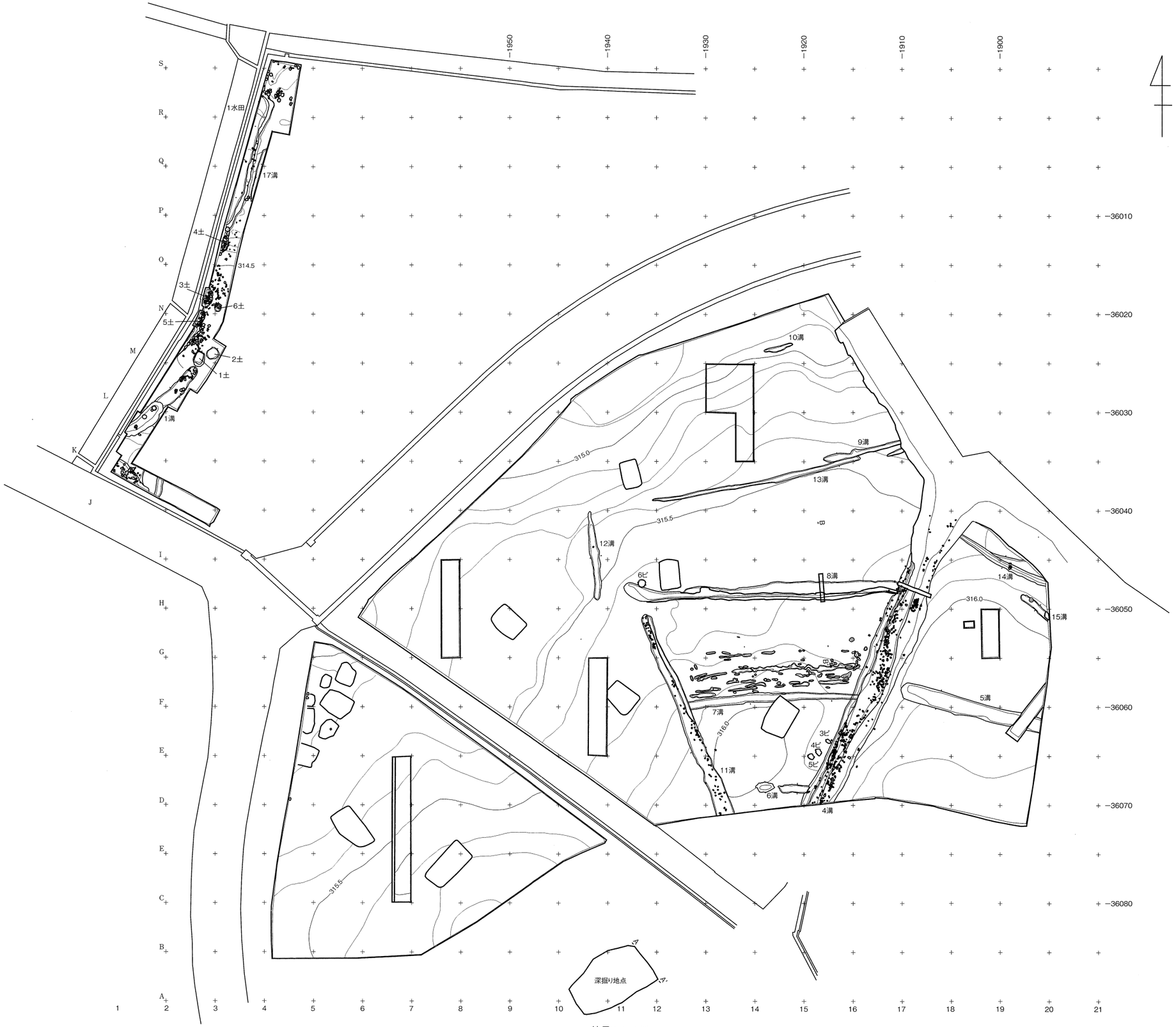


(4) 金属製品（銭貨・鉄釘・刀子ほか）



(5) 骨類（馬歯ほか）

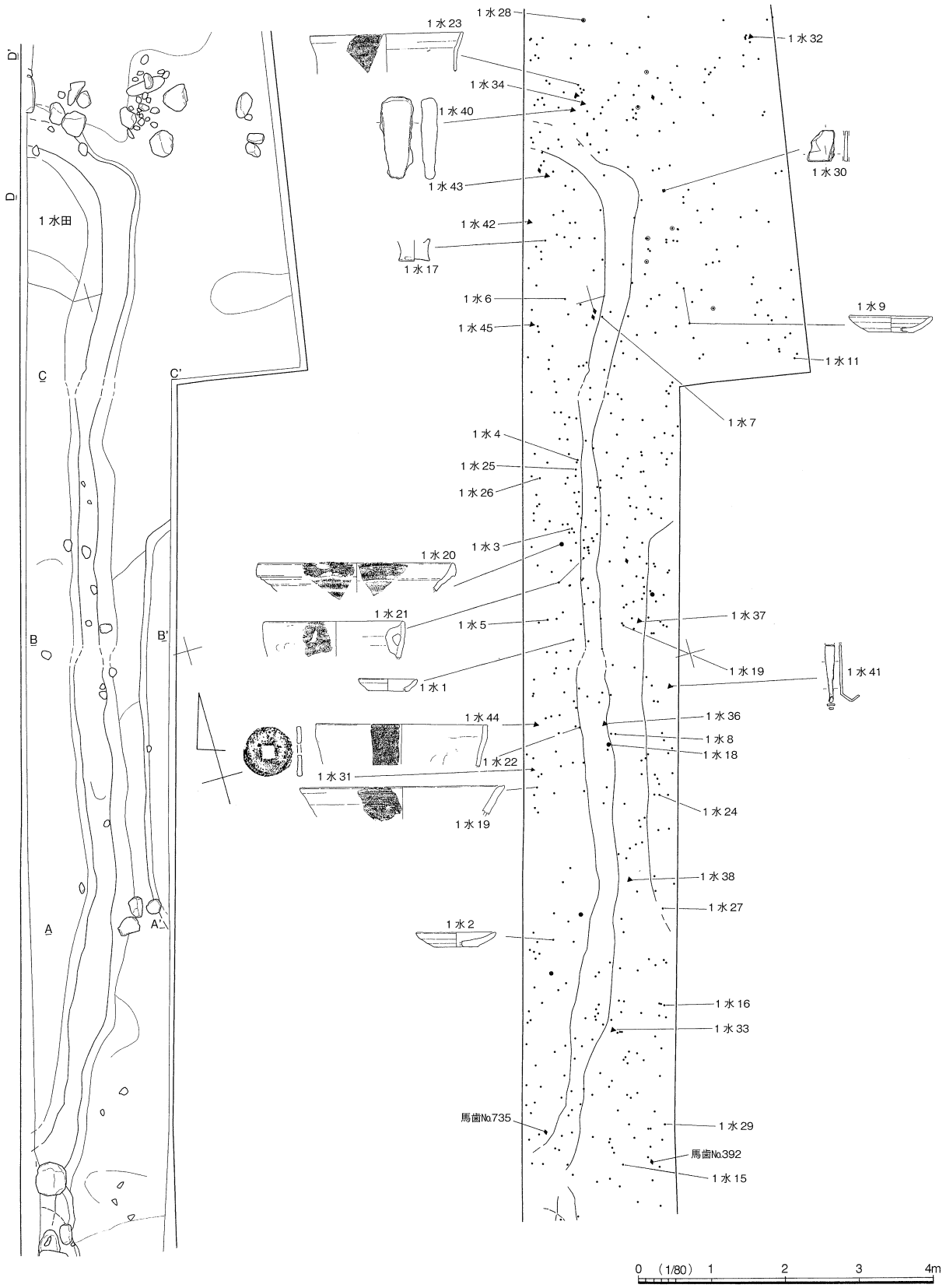
第３図　種別遺物分布図



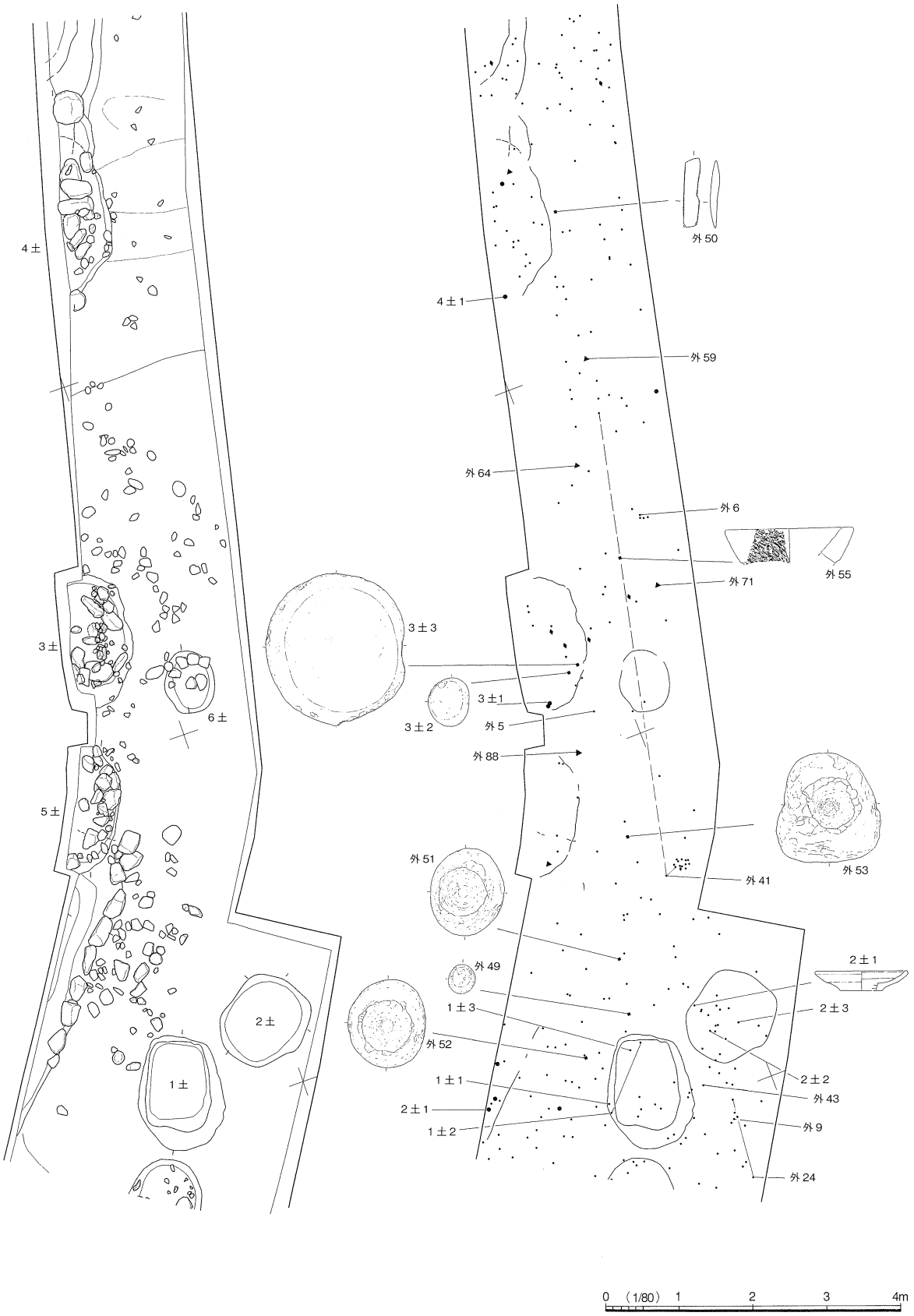
縮尺：1/400

第４図　御座田遺跡全体図

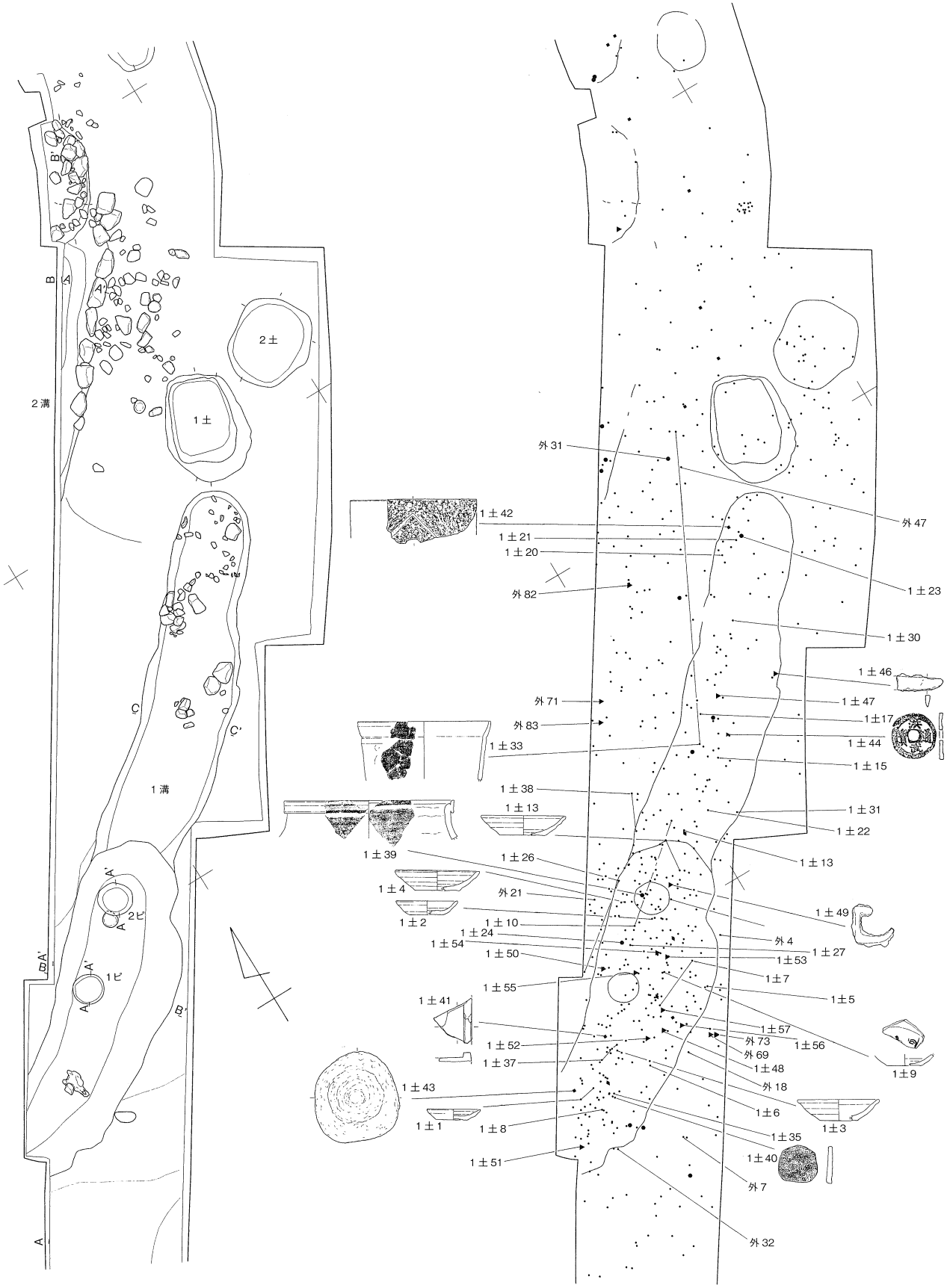
第５図　遺跡出土状況

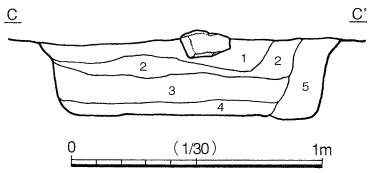


第６図　１号水田跡と周辺



第７図　１～５号土坑と周辺



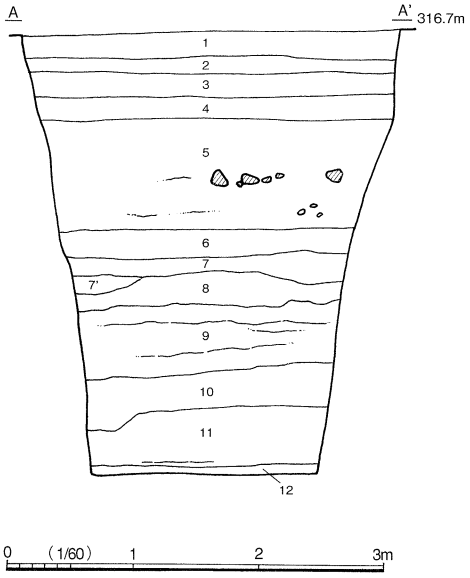


1号溝

1	鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）	礫を含む。炭化物、土器有。しまり・粘性強い。
2	鈍い黄褐色砂礫土（10YR4/3）	1層と3層の中間層。
3	暗褐色砂礫（10YR3/4）	粗い砂礫主体。しまり有、粘性なし。
4	褐灰色砂（10YR4/1）	砂主体。しまり・粘性なし。
5	褐色粘土（10YR4/6）	地山直上～地山。やや掘りすぎ。

0 (1/80) 1 2 3 4m

第8図　1号溝と周辺

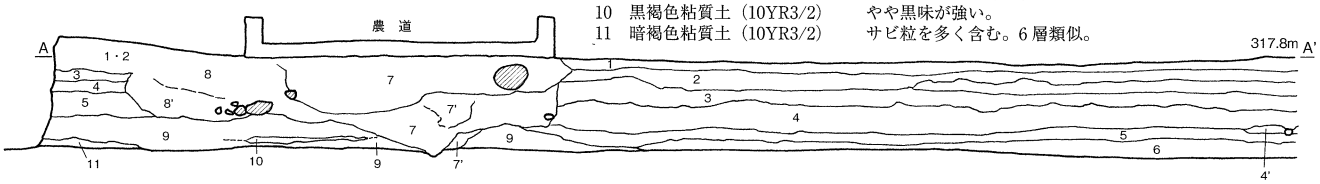


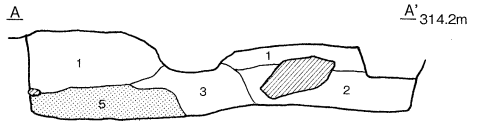
深掘り地点（第４図）

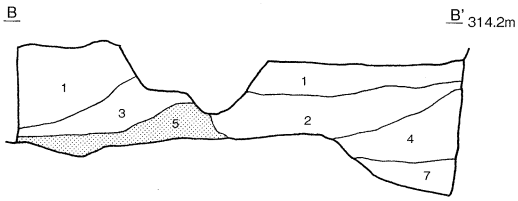
1	黒褐色粘質土（10YR2/3）	表土（耕作土）。
2	鈍い黄褐色土（10YR5/4）	サビ粒多い。水田床土。
3	鈍い黄褐色土（10YR5/4）	サビ粒少ない。試料 No.8 採取。
4	鈍い黄褐色土（10YR5/4）	サビ粒多い。水田床土。
5	鈍い黄褐色砂礫土（10YR4/3）	径１～15cm 大の円礫を多く含む砂礫層。試料 No.7 採取。
6	暗褐色粘土（10YR3/4）	サビ粒を含む。試料 No.6 採取。
7	鈍い黄褐色砂礫（10YR4/3）	径１～4cm 大の円礫主体の砂利層。試料 No.5 採取。
8	暗灰黄砂（2.5Y4/2）	試料 No.4 採取。
9	暗灰黄礫（2.5Y4/2）	径 0.5 ～ 3cm 大の円礫主体。試料 No.3 採取。
10	暗灰黄粘質土（2.5Y4/2）	
11	暗灰黄砂礫（2.5Y4/2）	試料 No.2 採取。
12	オリーブ褐色粘土（2.5Y4/3）	試料 No.1 採取。

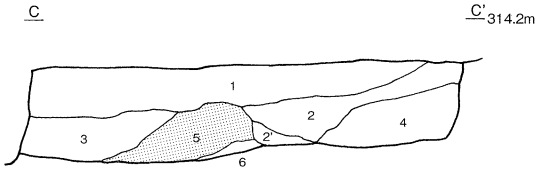
南壁断面土層説明（第１図）

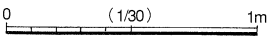
1	黒褐色粘質土（10YR4/2）	表土・耕作土。しまり弱い。
2	褐灰色粘質土（10YR4/1）	水田覆土。しまり強い。
2'	鈍い黄褐色粘質土（10YR5/4）	２層と３層の中間層。３層に類似。径 0.5cm の礫をごく少量含む。褐色粒を含む。
3	黄褐色粘質土（10YR5/6）	水田床土。径１～2cm の礫を少量含む。炭化物を微量に含む。
4	暗褐色粘質土（10YR3/4）	旧耕作土。径１～2cm の礫を少量含む。褐色粒を含む。
4'	鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）	４層と５層の中間層。５層にやや類似する。
5	黄褐色粘質土（10YR5/6）	水田床土。炭化粒少量含む。
6	黒褐色粘質土（10YR3/2）	サビ粒を多く含む。径 0.5cm の礫を少量含む。
7	黒褐色砂礫（10YR2/2）	農道下面の砂礫層。
7'	褐色土（10YR4/4）	砂礫中の混入土。
8	暗褐色土（10YR3/3）	
8'	暗褐色砂混土（10YR3/3）	撹乱土。
9	褐色土（10YR4/4）	サビ粒を薄く全体に含む。
10	黒褐色粘質土（10YR3/2）	やや黒味が強い。
11	暗褐色粘質土（10YR3/2）	サビ粒を多く含む。６層類似。





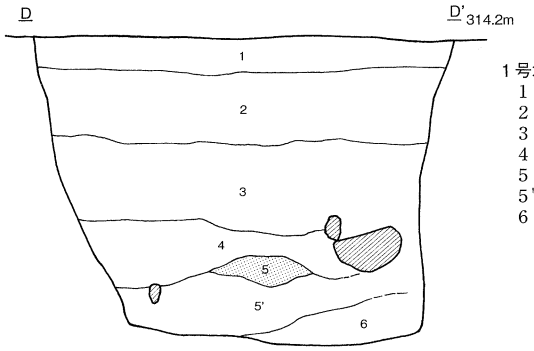






１号水田（第６図）

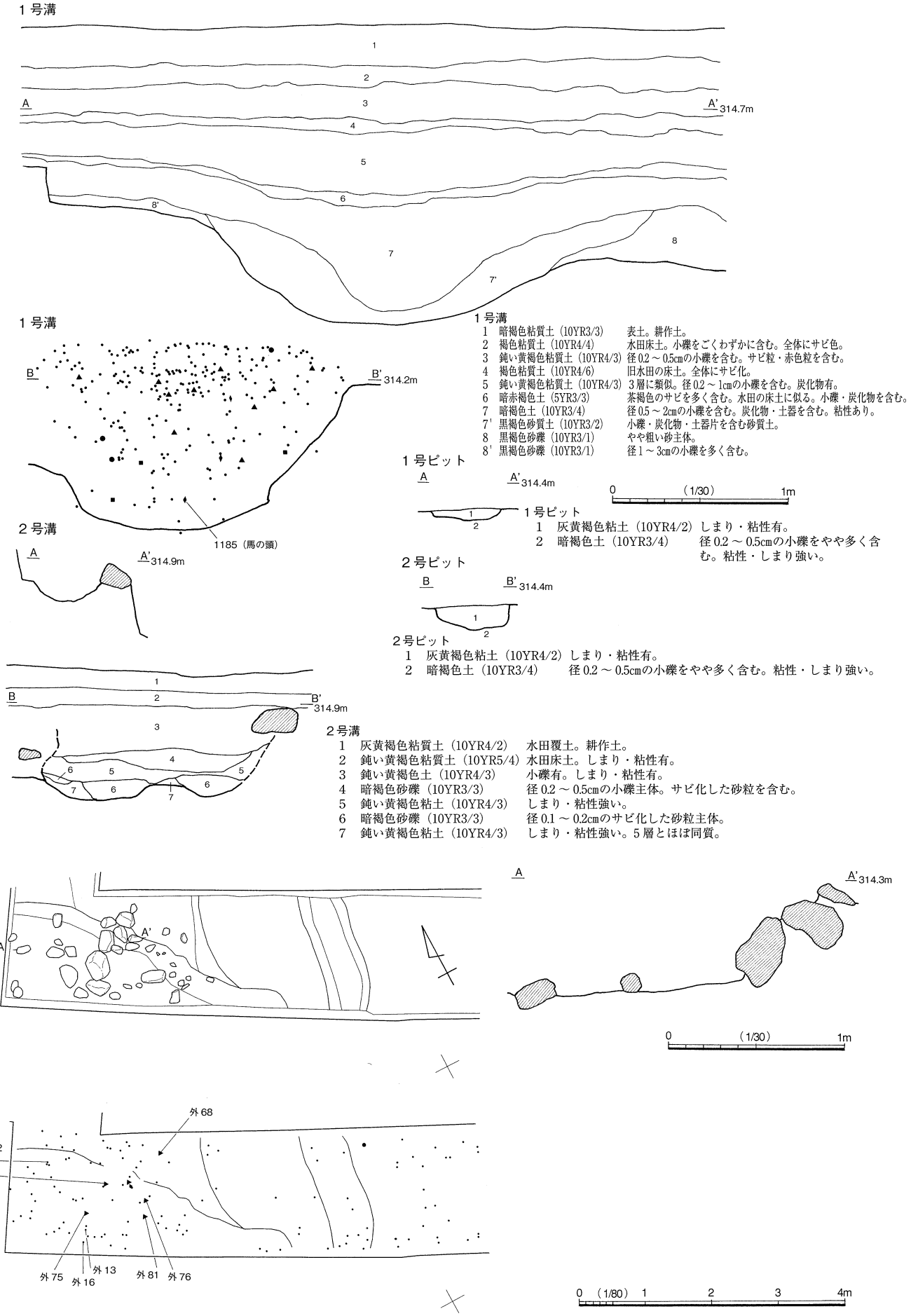
1	鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）	サビ粒多。径１～2cm の礫を含む。サビ粒が擬似畦畔を形成する。炭化物あり。
2	暗褐色粘質土（10YR3/4）	南側から堆積したような状況を呈す。サビ粒をやや多く含む。２層よりもやや暗い色調。
2'	暗褐色粘質土（10YR3/4）	２層よりもやや暗い色調。
3	暗褐色粘質土（10YR3/3）	水田覆土か。灰色味あり。土器を含む。しまり・粘性強い。
4	褐色土（10YR4/4）	炭化物あり。しまり・粘性強い。
5	灰黄褐色粘土（10YR4/2）	畝状。極めて粘性が高い。
6	灰黄褐色砂利混合土（10YR4/2）	小礫を多く含む。下層全体に広がる。
7	暗褐色粘質土（10YR3/3）	黒味のある粘質土。しまり・粘性強い。



１号水田サンプリング地点（第６図）

1	表土・耕作土。	
2	水田層。床土を含む。	
3	暗褐色土（10YR3/4）	
4	灰黄褐色粘質土（10YR4/2）	粘土混じり。径 0.2cm 程度の小礫を含む。粘性・しまり強い。
5	褐灰色粘土（10YR5/1）	やや白色味が強い。粘性極めて強い。
5'	灰黄褐色粘土（10YR5/2）	灰色味やや強い。粘性極めて強い。
6	灰黄褐色砂礫土（10YR4/2）	粘性なし。砂粒主体。径 0.1 ～ 2cm の細かな小礫を含む。

第９図　土層（１号水田跡ほか）



1号溝

1	暗褐色粘質土（10YR3/3）	表土。耕作土。
2	褐色粘質土（10YR4/4）	水田床土。小礫をごくわずかに含む。全体にサビ色。
3	鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）	径0.2～0.5cmの小礫を含む。サビ粒・赤色粒を含む。
4	褐色粘質土（10YR4/6）	旧水田の床土。全体にサビ化。
5	鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）	3層に類似。径0.2～1cmの小礫を含む。炭化物有。
6	暗赤褐色土（5YR3/3）	茶褐色のサビを多く含む。水田の床土に似る。小礫・炭化物を含む。
7	暗褐色土（10YR3/4）	径0.5～2cmの小礫を含む。炭化物・土器を含む。粘性あり。
7'	黒褐色砂質土（10YR3/2）	小礫・炭化物・土器片を含む砂質土。
8	黒褐色砂礫（10YR3/1）	やや粗い砂主体。
8'	黒褐色砂礫（10YR3/1）	径1～3cmの小礫を多く含む。

1号ピット

1	灰黄褐色粘土（10YR4/2）	しまり・粘性有。
2	暗褐色土（10YR3/4）	径0.2～0.5cmの小礫をやや多く含む。粘性・しまり強い。

2号ピット

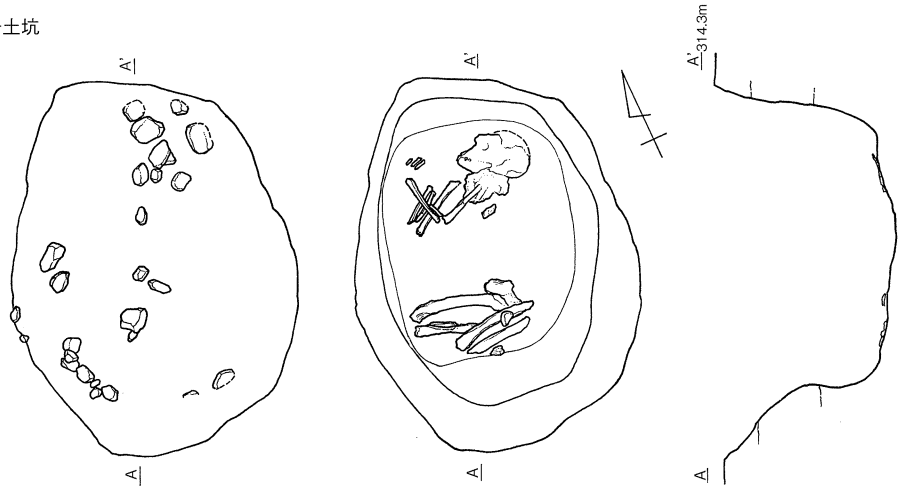
1	灰黄褐色粘土（10YR4/2）	しまり・粘性有。
2	暗褐色土（10YR3/4）	径0.2～0.5cmの小礫をやや多く含む。粘性・しまり強い。

2号溝

1	灰黄褐色粘質土（10YR4/2）	水田覆土。耕作土。
2	鈍い黄褐色粘質土（10YR5/4）	水田床土。しまり・粘性有。
3	鈍い黄褐色土（10YR4/3）	小礫有。しまり・粘性有。
4	暗褐色砂礫（10YR3/3）	径0.2～0.5cmの小礫主体。サビ化した砂粒を含む。
5	鈍い黄褐色粘土（10YR4/3）	しまり・粘性強い。
6	暗褐色砂礫（10YR3/3）	径0.1～0.2cmのサビ化した砂粒主体。
7	鈍い黄褐色粘土（10YR4/3）	しまり・粘性強い。5層とほぼ同質。

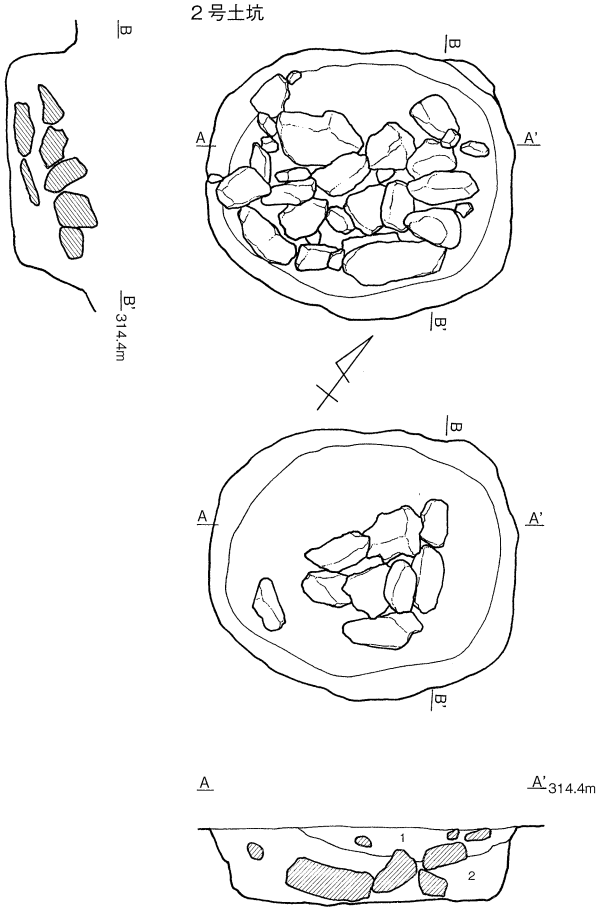
第10図　1・2号溝ほか

1号土坑



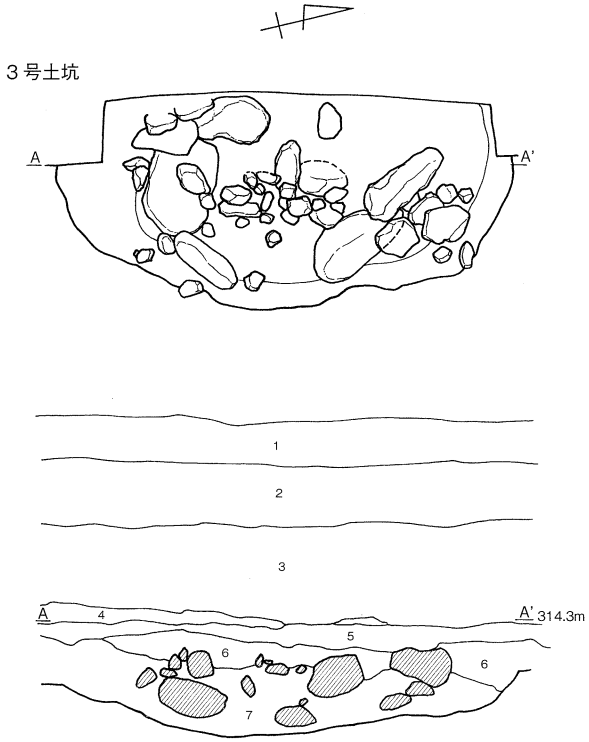
1号土坑
1　灰黄褐色礫混粘質土（10YR4/2）しまりやや弱い。粘性強い。径0.5～2cmの小礫を多く含む。最下層に人骨。

2号土坑



2号土坑
1　鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）しまり・粘性あり。小礫を含む。炭化物あり。
2　暗褐色粘質土（10YR3/3）　しまり・粘性あり。径5～20cmの礫（集石）を含む。

3号土坑



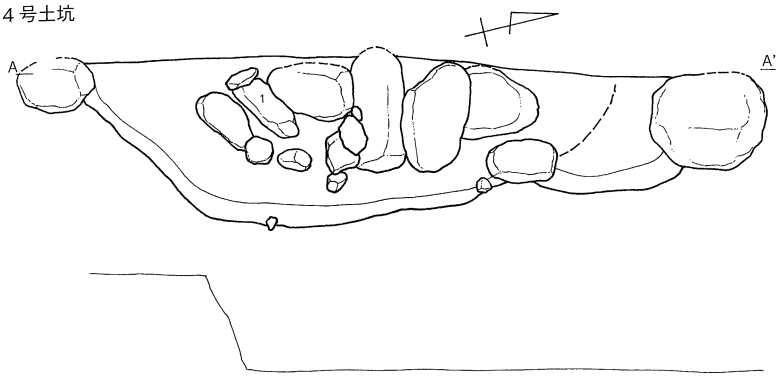
3号土坑

1	灰黄褐色土（10YR4/2）	耕作土・表土。
2	褐色土（10YR4/6）	水田床土層を2面含む。サビ化。
3	灰黄褐色粘質土（10YR5/2）	サビ粒・焼土粒・炭化粒を含む。
4	鈍い黄褐色粘質土（10YR5/4）	粘性・しまり強い。6層に類似するが、やや明るい。
5	灰黄褐色粘質土（10YR5/2）	径1～2cmの小礫を含む。粘性・しまり強い。サビ化する。
6	暗褐色土（10YR3/4）	炭化粒を含む。やや粗。サビ化は弱い。
7	灰黄褐色粘土（10YR4/2）	土坑覆土。礫を多く含む。

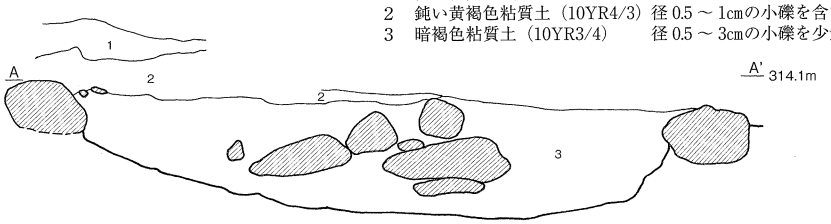
0　（1/30）　1m

第11図　1～3号土坑（1/30）

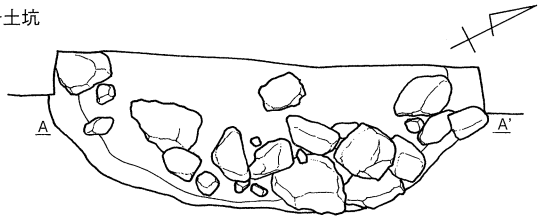
4号土坑



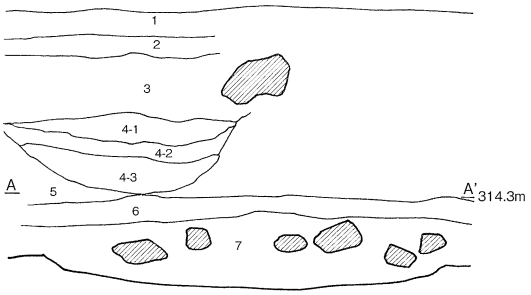
4号土坑
1　褐色粘質土（10YR4/6）　径0.5cm程度の小礫を含む。炭化物あり。全体にサビ化する。しまり・粘性強い。
2　鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）径0.5～1cmの小礫を含む。炭化物・サビ粒を含む。しまり・粘性強い。
3　暗褐色粘質土（10YR3/4）　径0.5～3cmの小礫を少量含む。しまり・粘性強い。土坑覆土。配石をもつ。



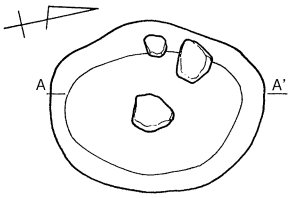
5号土坑

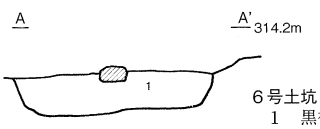


5号土坑
1　耕作土
2　耕作土
3　水田床土層
4-1 鈍い黄褐色砂利（10YR4/3）　径0.2～0.5cmの小礫が非常に多い。2号溝の覆土。
4-2 鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）
4-3 鈍い黄褐色砂利（10YR4/3）　4-1と同じ。
5　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）　径0.5cmの小礫をやや多く含む。炭化物あり。
6　暗褐色粘質土（10YR3/4）　径0.5cmの小礫をやや多く含む。サビ化する。
7　黒褐色粘質土（10YR3/2）　6層よりも黒味がある。



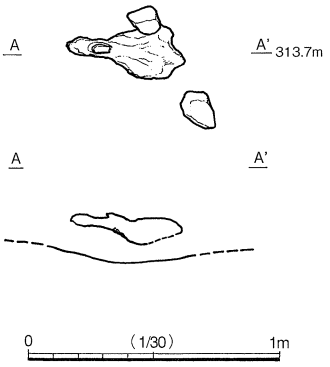
6号土坑



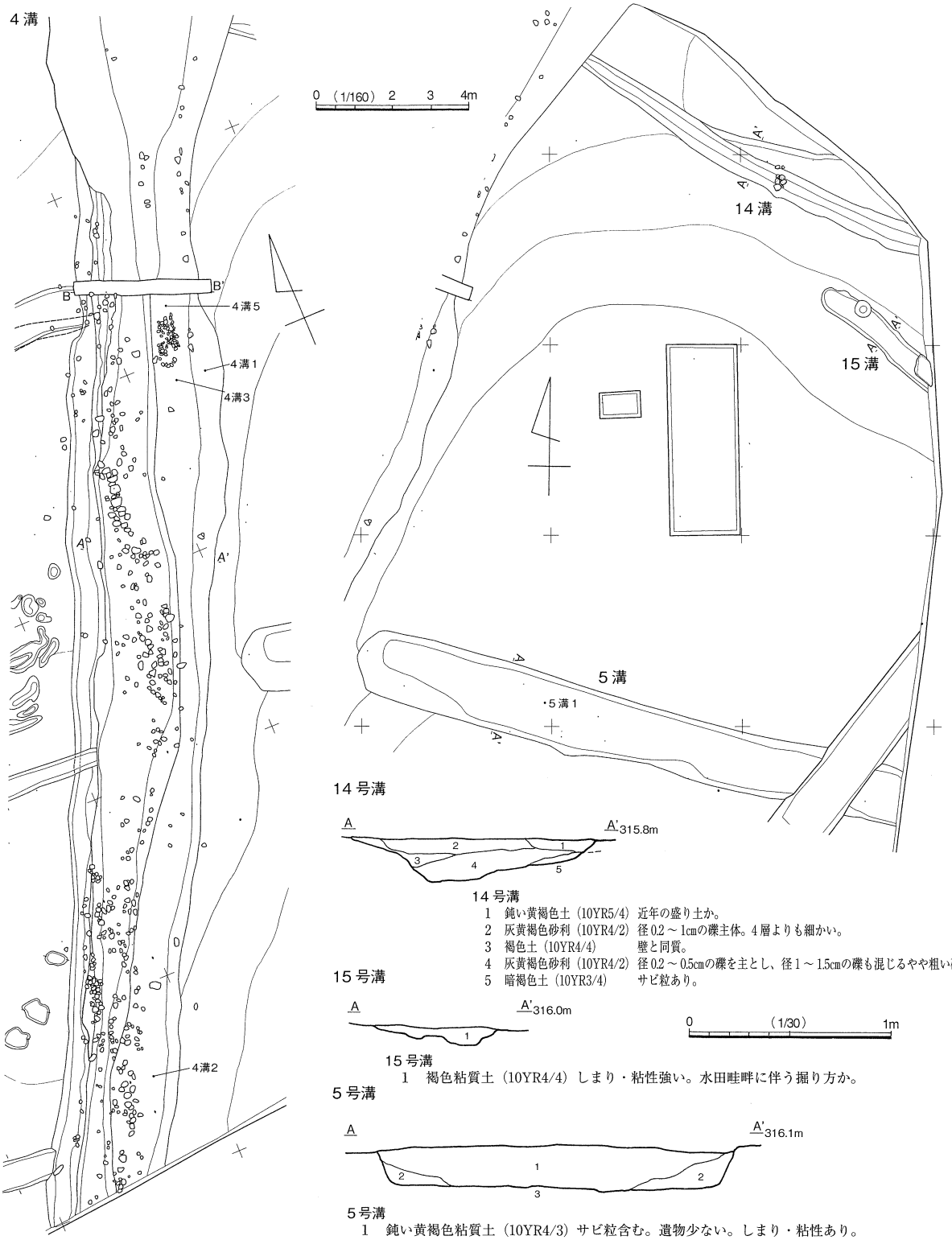


6号土坑
1　黒褐色粘質土（10YR3/4）粘性・しまり強い。炭化物有。

1号溝内出土ウマ頭骨



第12図　4～6号土坑



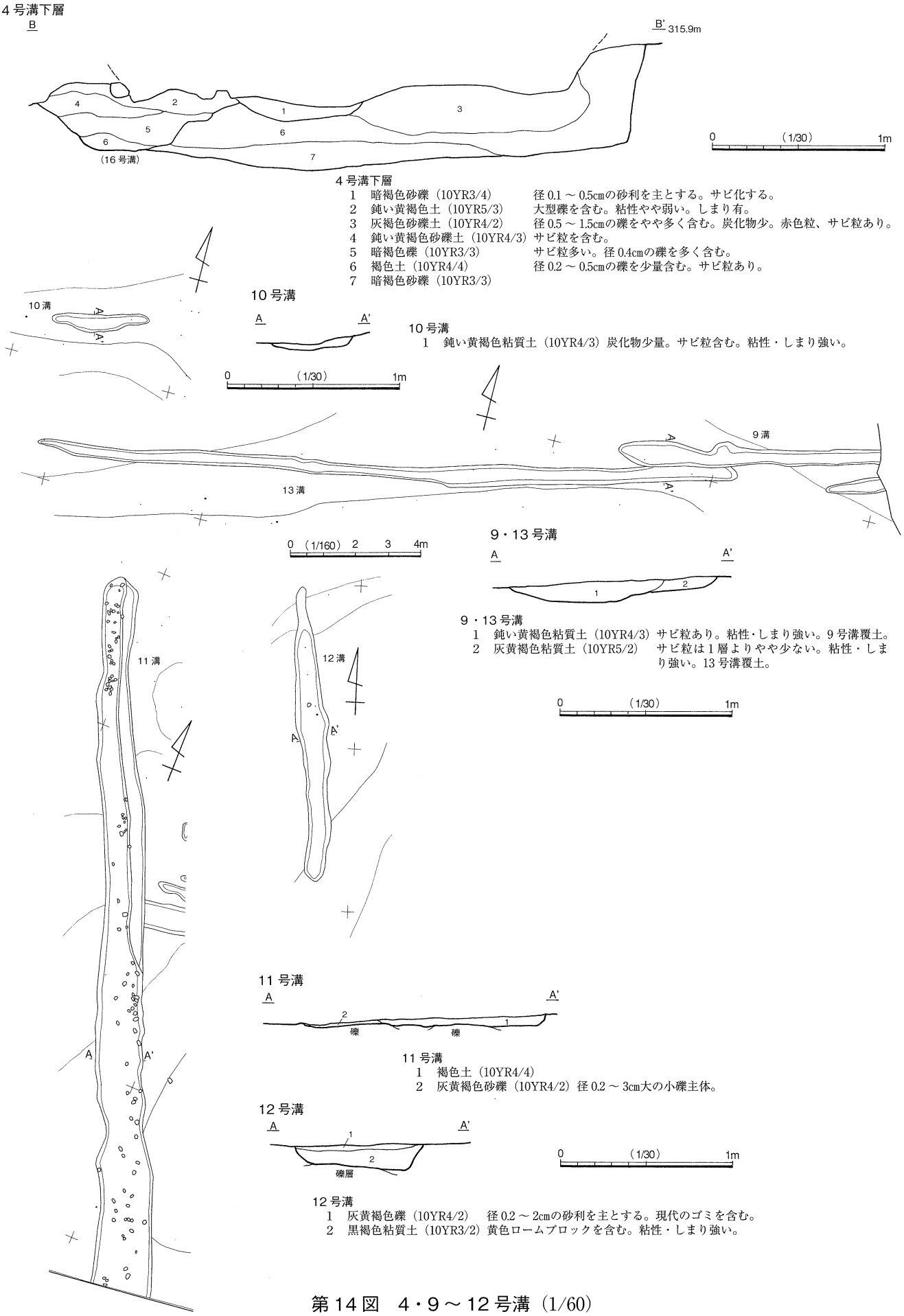
14号溝
1 鈍い黄褐色土（10YR5/4）近年の盛り土か。
2 灰黄褐色砂利（10YR4/2）径0.2～1cmの礫主体。4層よりも細かい。
3 褐色土（10YR4/4） 壁と同質。
4 灰黄褐色砂利（10YR4/2）径0.2～0.5cmの礫を主とし、径1～1.5cmの礫も混じるやや粗い礫層。
5 暗褐色土（10YR3/4） サビ粒あり。

15号溝
1 褐色粘質土（10YR4/4）しまり・粘性強い。水田畦畔に伴う掘り方か。

5号溝
1 鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）サビ粒含む。遺物少ない。しまり・粘性あり。
2 灰褐色粘質土（10YR4/2） サビ粒あり。しまり・粘性あり。
3 褐色粘質土（10YR4/4） サビ粒をやや多く含む。しまり・粘性あり。

4号溝
1 灰褐色シルト 粒子細かい。サビ粒あり。灰色味強い。粘性やや弱い。
2 鈍い黄褐色土（10YR4/3）細かい砂層が入る。小礫を含む。サビ化する。
3 褐色シルト（10YR4/4） 1層に類似。やや黒味強い。
4 暗褐色砂礫 径0.2～0.5cmの小礫やや多い。非常に堅くしまる。サビ化する。

第13図 4・5・14・15号溝



4号溝下層

1	暗褐色砂礫（10YR3/4）	径 0.1 ～ 0.5cmの砂利を主とする。サビ化する。
2	鈍い黄褐色土（10YR5/3）	大型礫を含む。粘性やや弱い。しまり有。
3	灰褐色砂礫土（10YR4/2）	径 0.5 ～ 1.5cmの礫をやや多く含む。炭化物少。赤色粒、サビ粒あり。
4	鈍い黄褐色砂礫土（10YR4/3）	サビ粒を含む。
5	暗褐色礫（10YR3/3）	サビ粒多い。径 0.4cmの礫を多く含む。
6	褐色土（10YR4/4）	径 0.2 ～ 0.5cmの礫を少量含む。サビ粒あり。
7	暗褐色砂礫（10YR3/3）	

10号溝

1　鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）炭化物少量。サビ粒含む。粘性・しまり強い。

9・13号溝

1　鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）サビ粒あり。粘性・しまり強い。9号溝覆土。
2　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）　サビ粒は1層よりやや少ない。粘性・しまり強い。13号溝覆土。

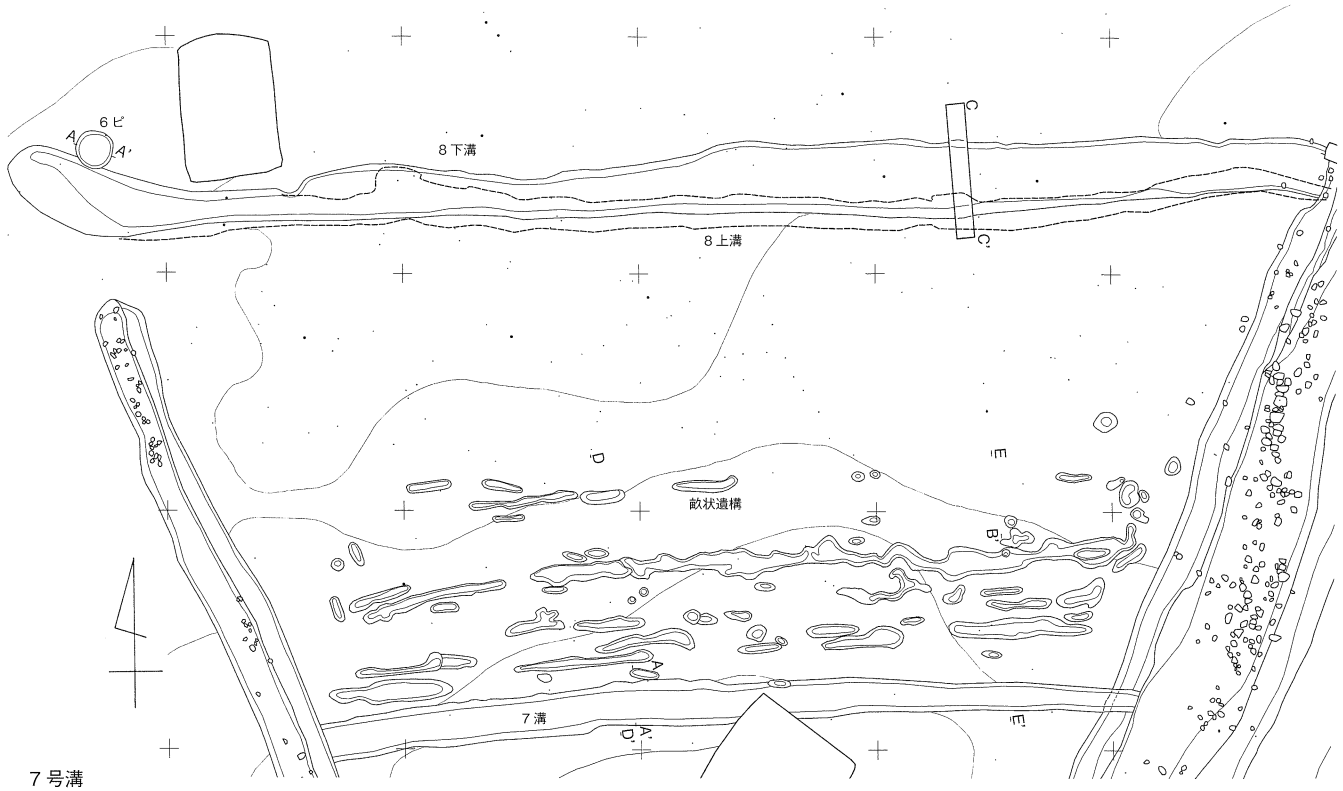
11号溝

1　褐色土（10YR4/4）
2　灰黄褐色砂礫（10YR4/2）径 0.2 ～ 3cm大の小礫主体。

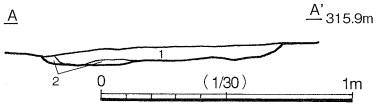
12号溝

1　灰黄褐色礫（10YR4/2）　径 0.2 ～ 2cmの砂利を主とする。現代のゴミを含む。
2　黒褐色粘質土（10YR3/2）黄色ロームブロックを含む。粘性・しまり強い。

第14図　4・9～12号溝（1/60）



7号溝



7号溝
1　灰黄褐色粘土（10YR4/2）灰色味強い。粘性強い。しまり有。
2　暗褐色土（10YR3/4）　サビ化する。しまり・粘性有。

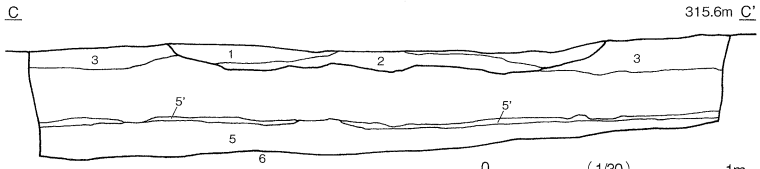
0 (1/160) 2 3 4m

(B－B' の位置は第4図参照)

8号溝上層
1　鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）しまり・粘性強い。灰色味が強い。サビ粒少量含む。
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）　1層と同質。1層よりもサビ粒多い。
3　鈍い黄褐色粘質土（10YR5/3）サビ粒により全体に褐色味がある。遺物あり。炭化物を含む。
4　暗褐色土（10YR3/3）　サビ粒主体
4'　褐色土（10YR4/4）　やや薄いサビ化層。

0 (1/60) 1 2 3m

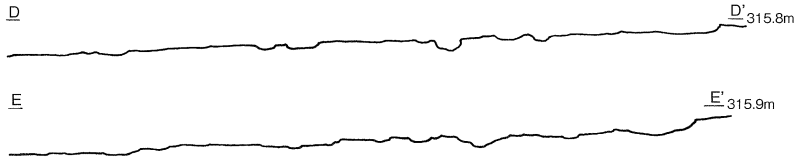
8号溝下層



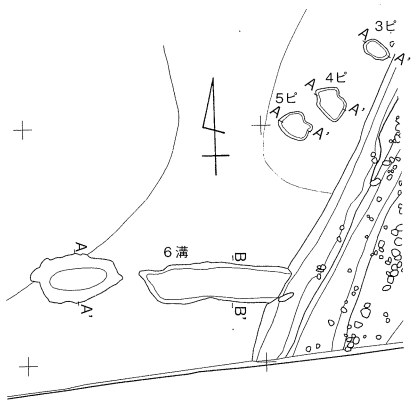
8号溝下層
1　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）8号溝下層の覆土。
2　暗褐色砂質土（10YR3/3）　サビ粒を多く含んだ砂層。赤色粒を含む。
3　褐色粘質土（10YR4/4）　炭化物・赤色粒を含む。
4　褐色土（10YR4/4）　サビ層を中間に断続的に含む。径0.5㎝程度のサビ小ブロックを全体に含む。
5　鈍い黄褐色土（10YR4/3）　4層に類似。やや黄味あり。
5'　褐色土（10YR4/6）　サビ化した薄い層。

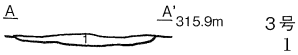
0 (1/30) 1m

畝状遺構



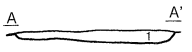
0 (1/60) 1 2 3m



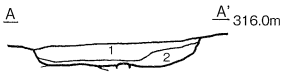


3号ピット
1　鈍い黄褐色土（10YR4/3）サビ粒混じる。

4号ピット
1　鈍い黄褐色土（10YR4/3）サビ粒混じる。

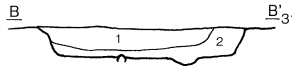


5号ピット
1　鈍い黄褐色土（10YR4/3）サビ粒混じる。



6号ピット
1　鈍い黄褐色粘質土（10YR4/3）炭化物少量、サビ粒やや多く含む。しまり・粘性強い。
2　暗褐色土（10YR3/3）　サビ粒を多く含む。

6号溝A
1　灰黄褐色粘土（10YR5/2）しまり・粘性強い。現代の溝か。
2　暗褐色砂質土（10YR3/4）サビ粒多い。



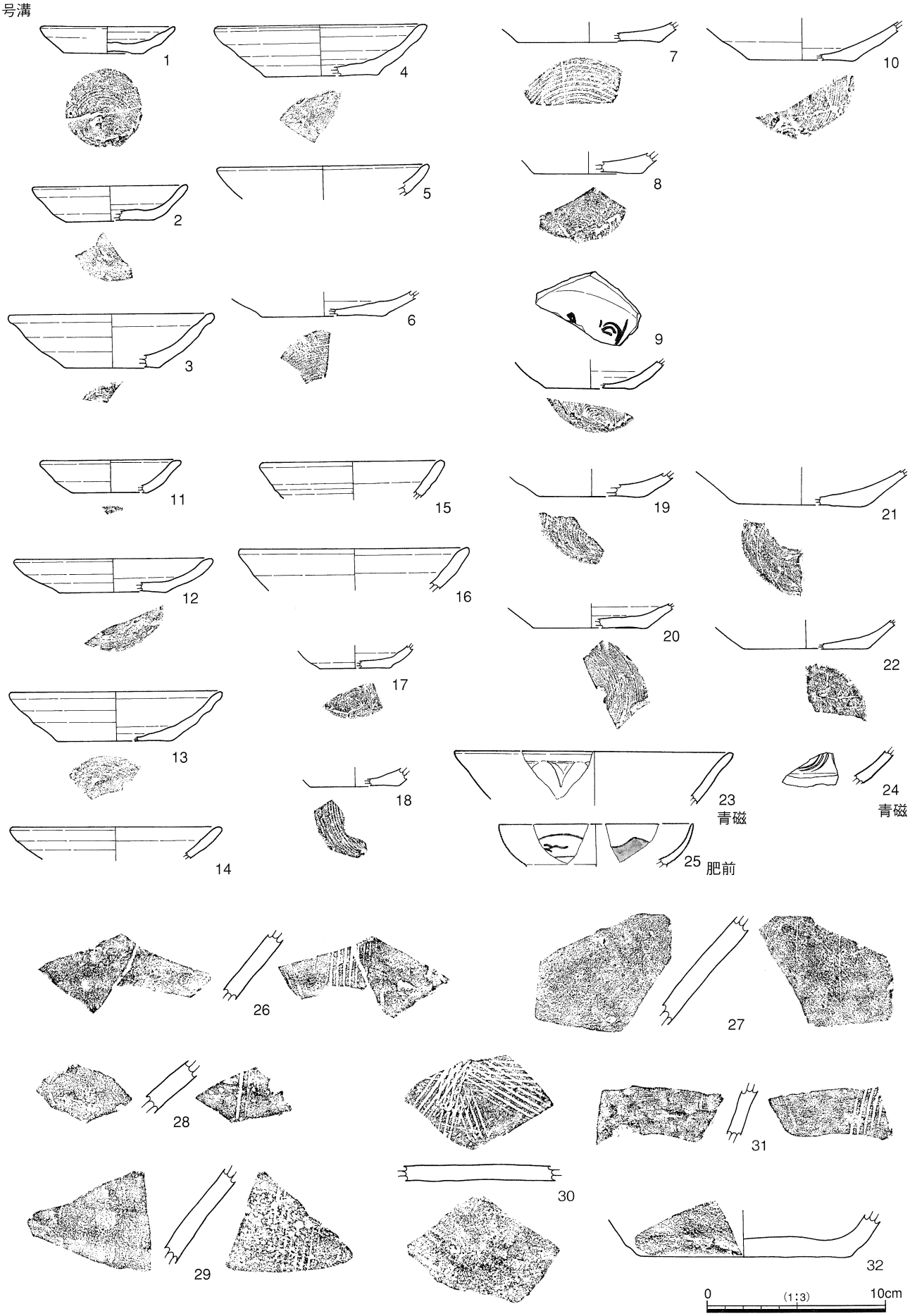
6号溝B
1　褐色土（10YR4/4）　サビ粒多い。現代の溝か。
2　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）粘性・しまり強い。

0 (1/160) 2 3 4m

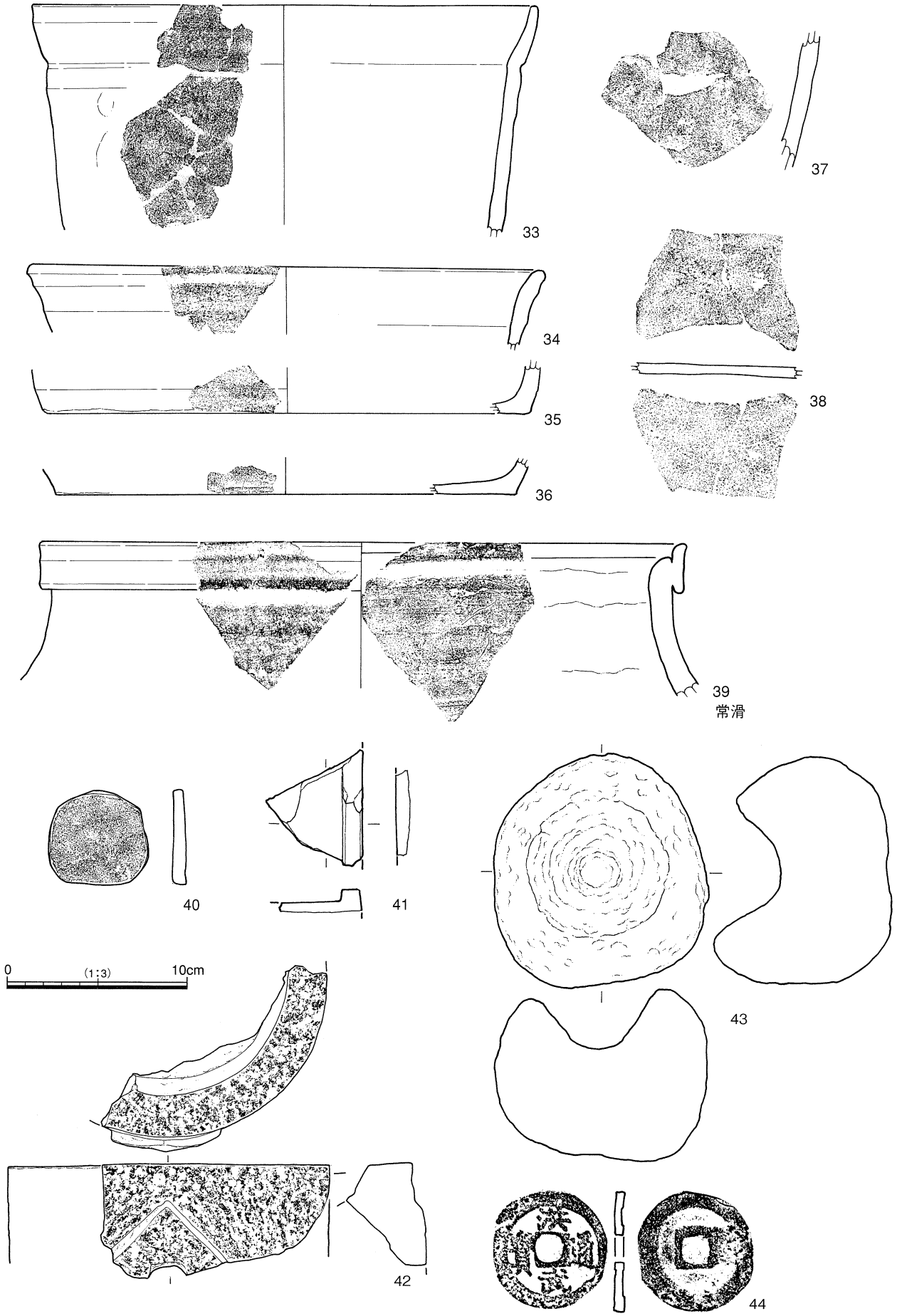
0 (1/30) 1m

第15図　6～8号溝、3～6号ピット

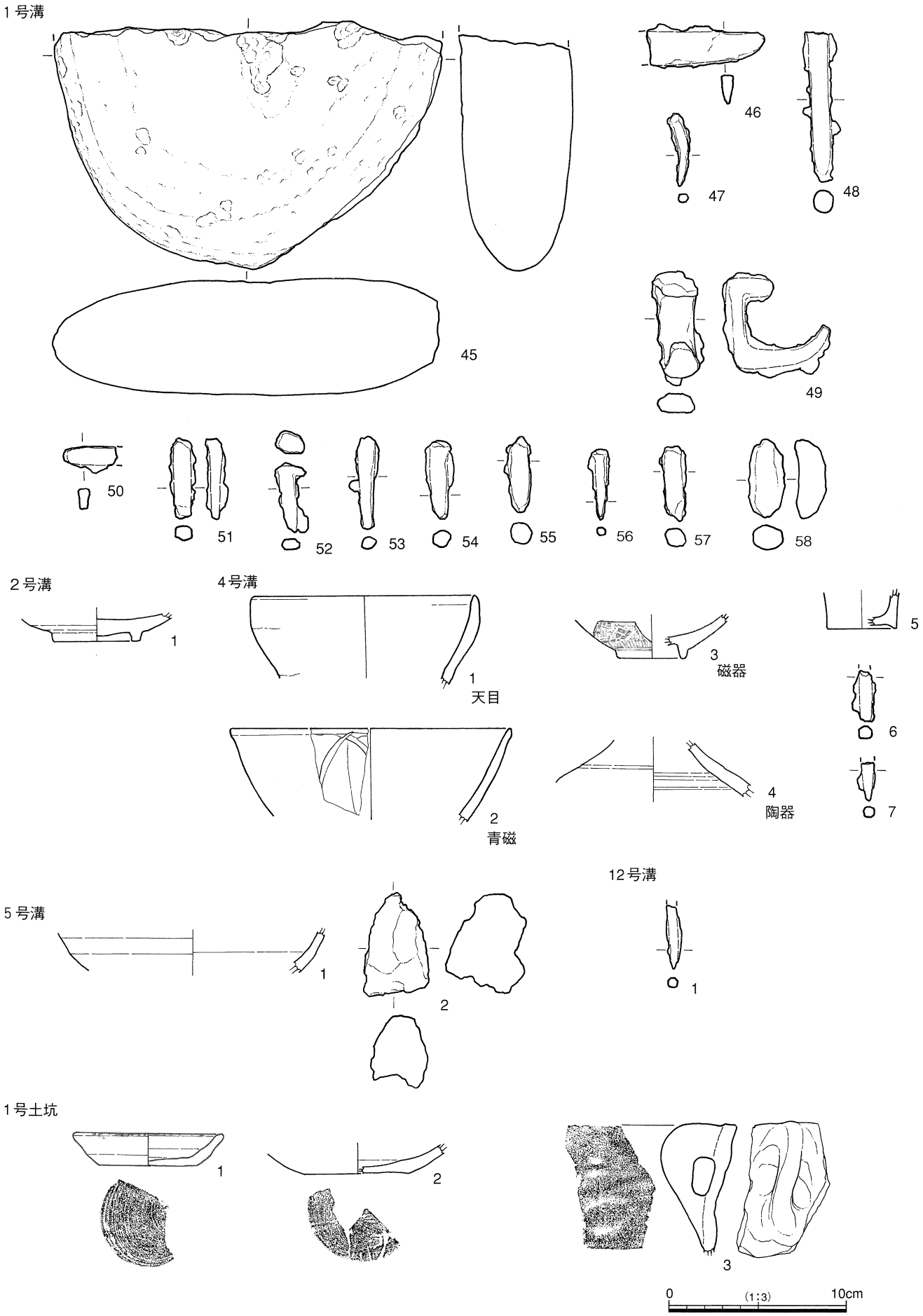
1号溝



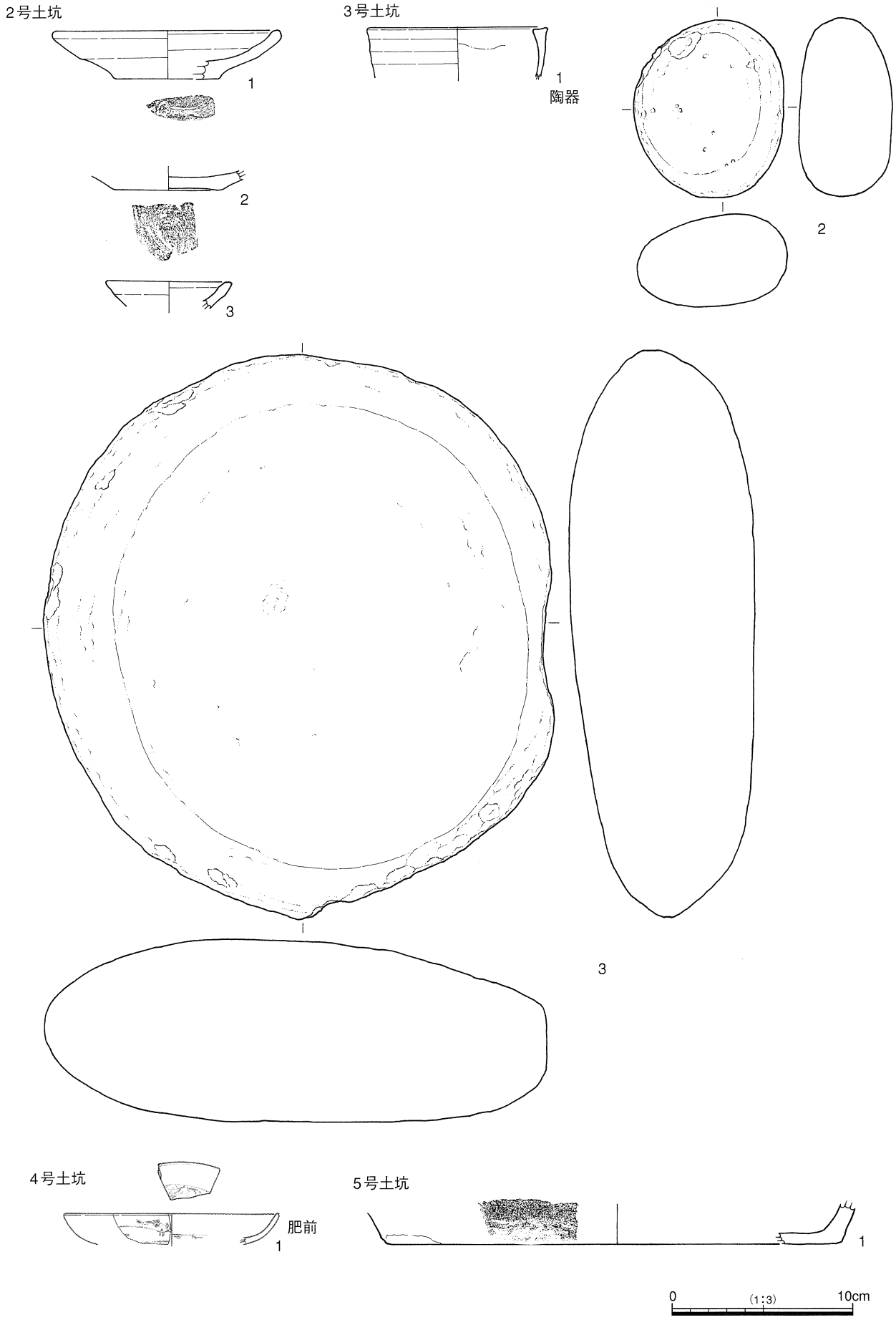
第16図　遺物（1号溝）



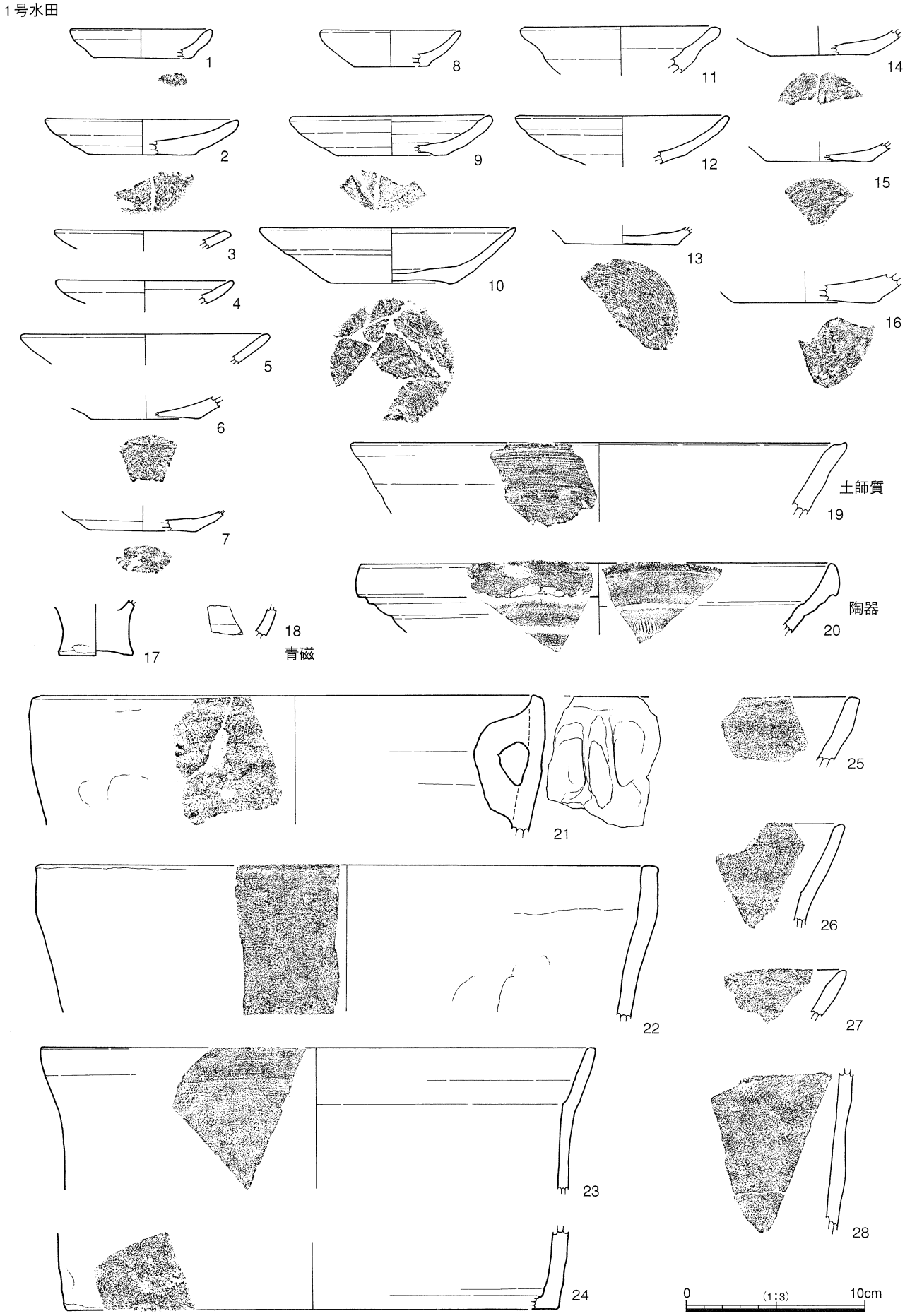
第17図　遺物（1号溝）



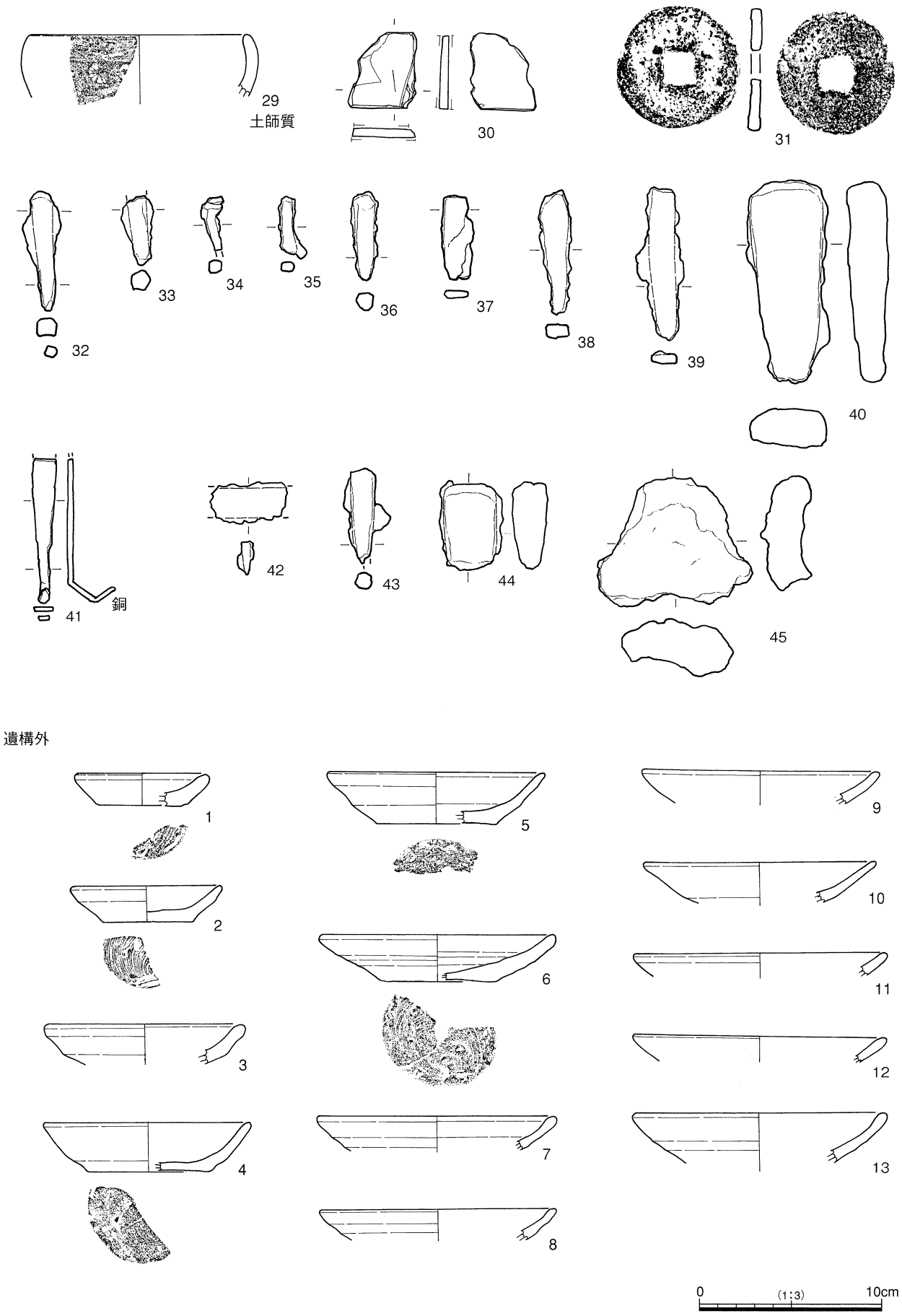
第18図　遺物（1・4・5・12号溝、1号土坑）



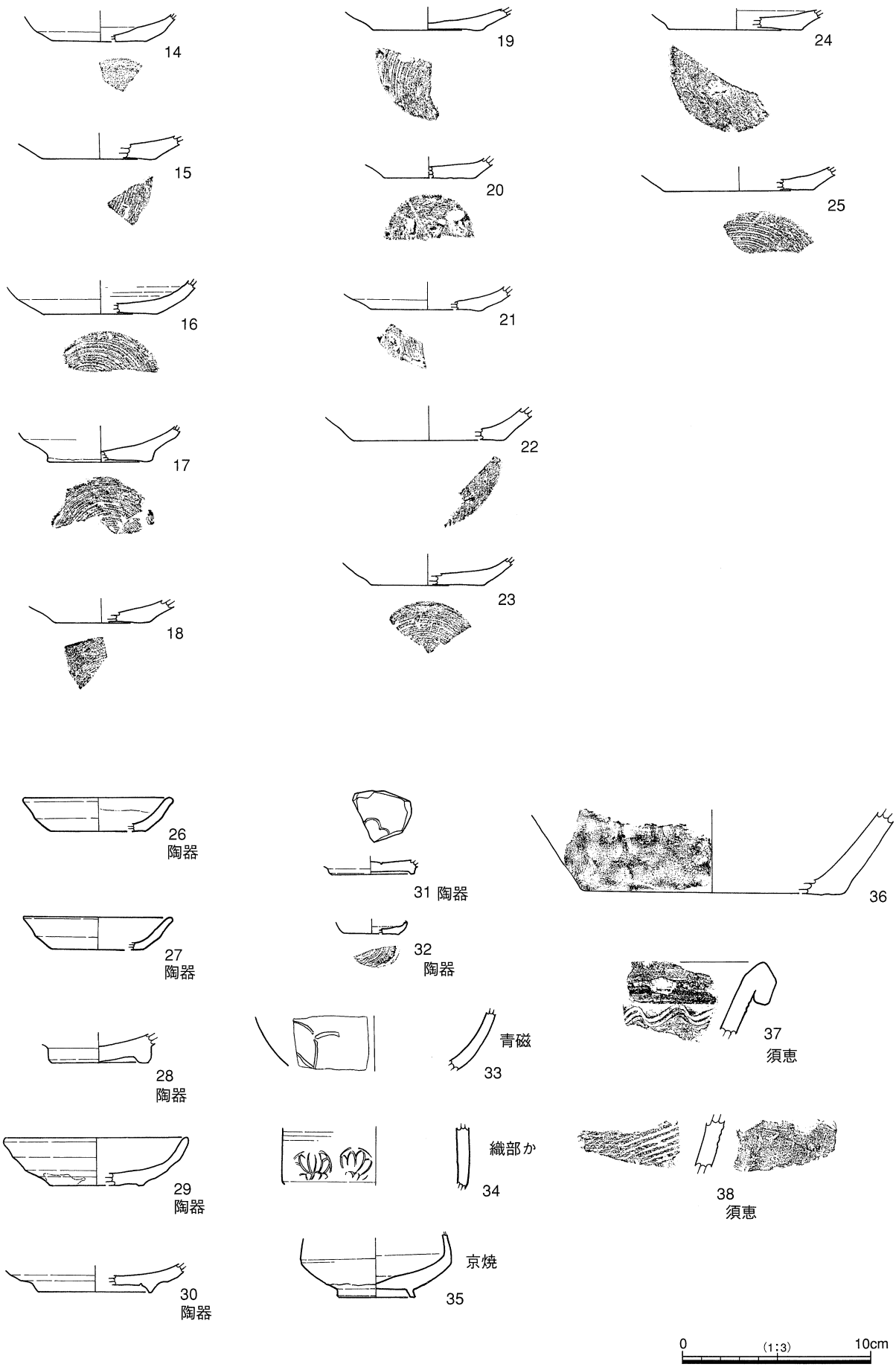
第19図　遺物（2～5号土坑）



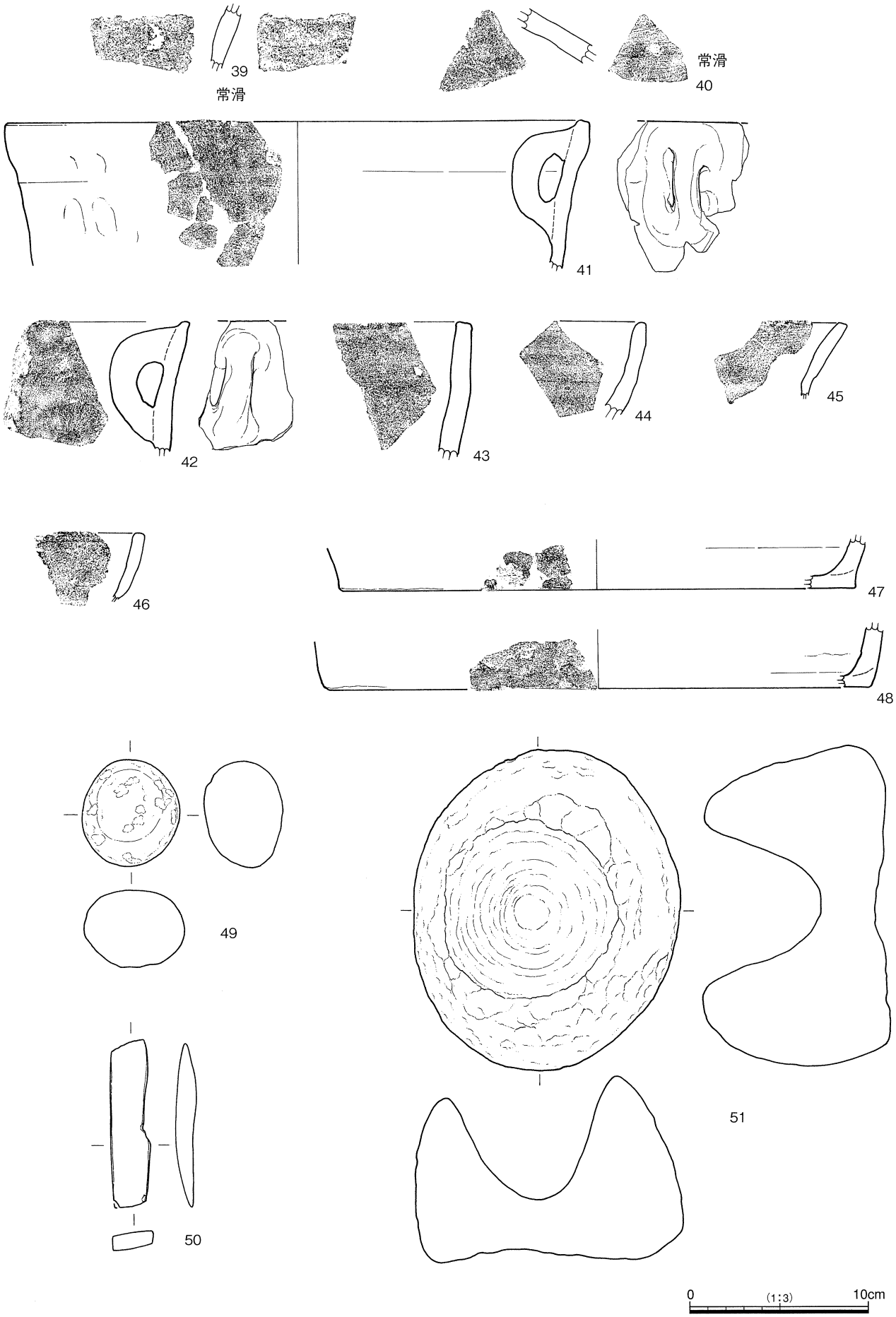
第20図　遺物（1号水田周辺）



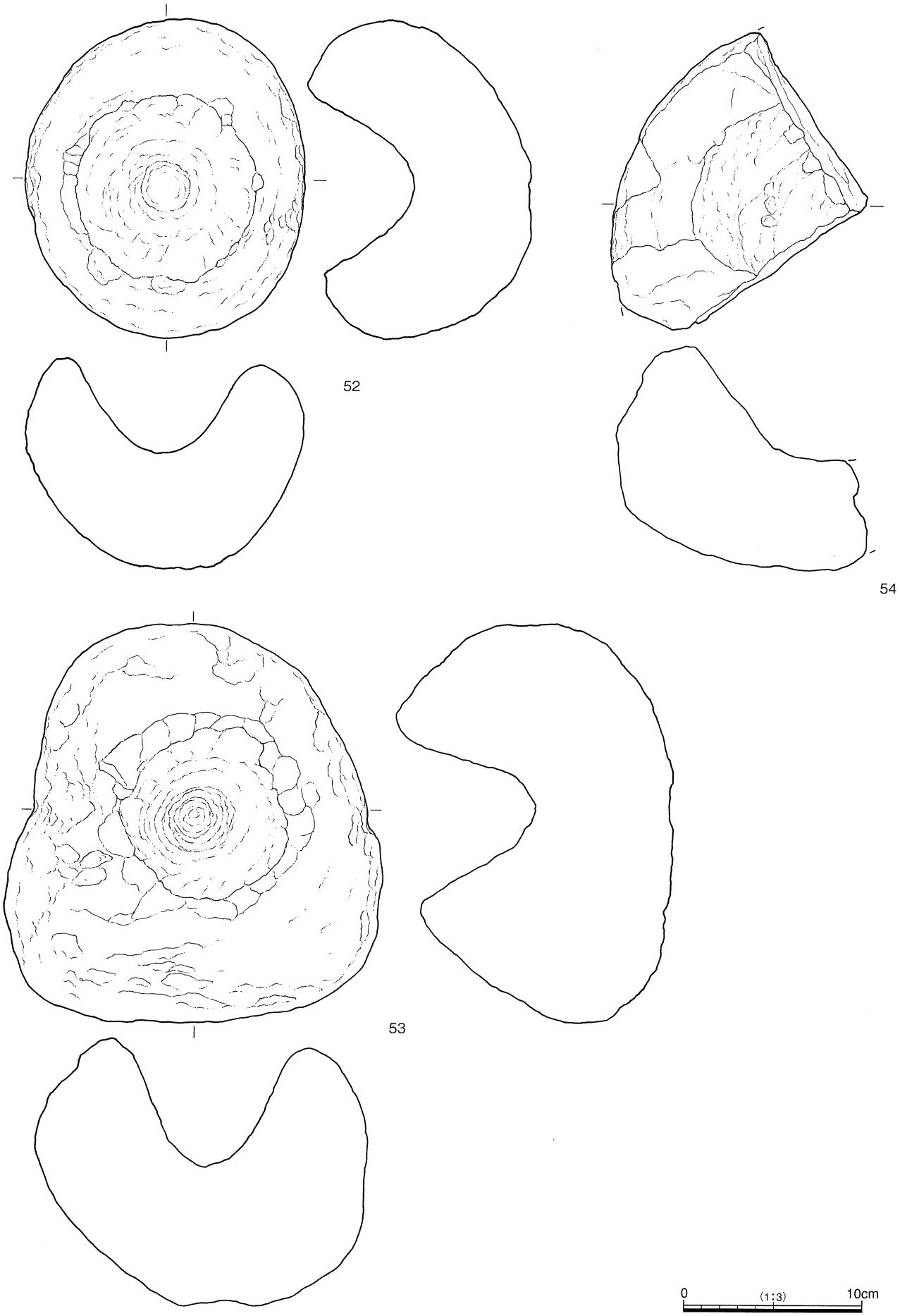
第 21 図　遺物（1 号水田周辺、遺構外）


14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
陶器
27
陶器
28
陶器
29
陶器
30
陶器
31 陶器
32
陶器
青磁
33
織部か
34
京焼
35
36
37
須恵
38
須恵
0
(1:3)
10cm

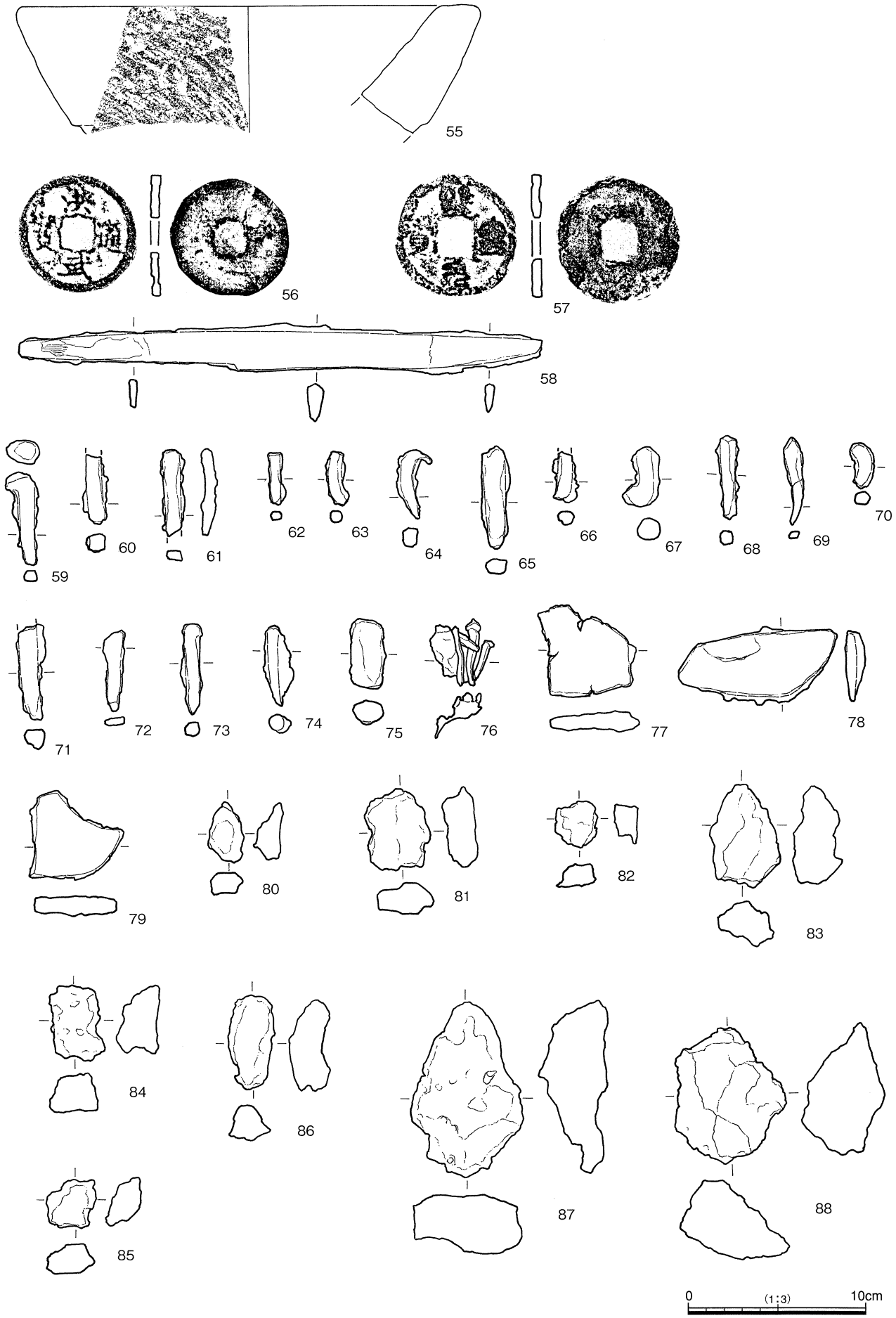
第22図　遺物（遺構外）



第23図　遺物（遺構外）



第24図　遺物（遺構外）

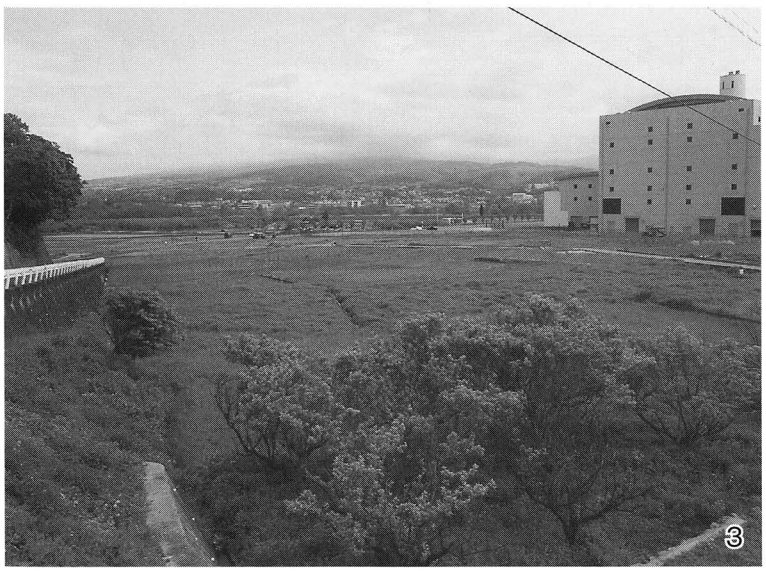

55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
0
(1:3)
10cm

第25図　遺物（遺構外）

図版2

1

2



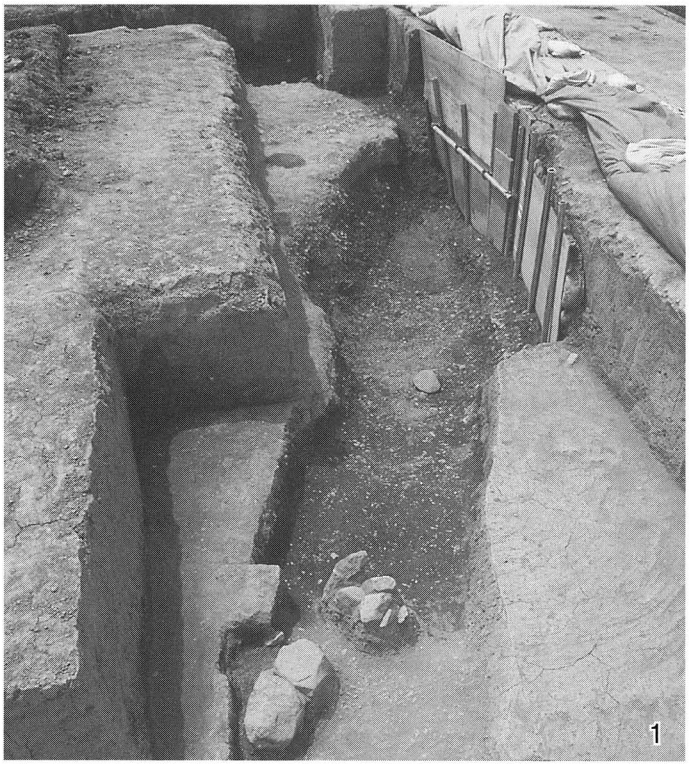
図版１
1　航空写真（昭和 37 年頃か）
　　写真提供：韮崎市教育委員会

図版２
1　空中写真（東より、堀切橋を望む）
2　同（南より）

図版３
1　調査区全景（南東より）
2　調査前風景
　　（複写、原写真：環境衛生センター）
3　同（南、堀切橋北側より）

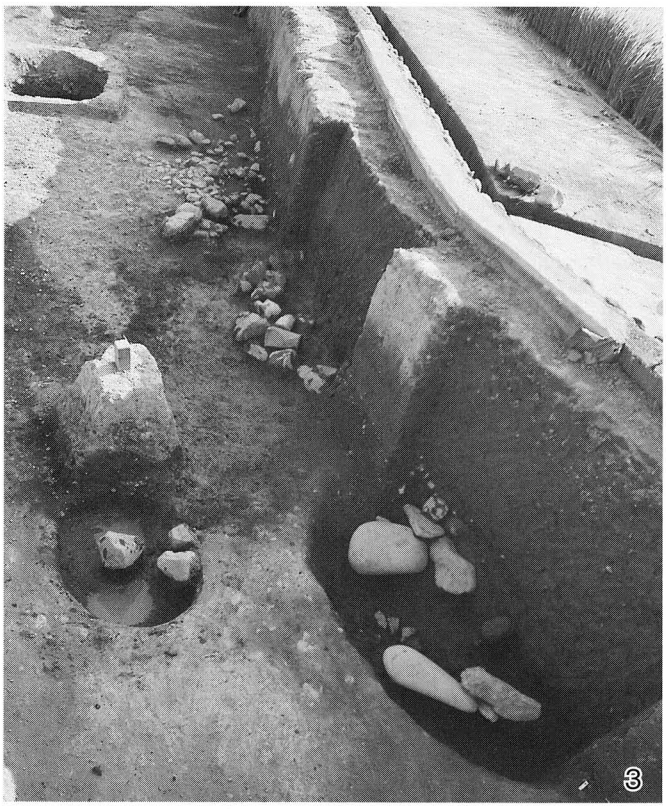
図版４
1　１号溝完掘状況西側（東より）
2　同　凹石出土状況
3　同　東側
4　同　馬頭骨出土状況
5　同　歯の状況
6　1・2号土坑付近（南より）

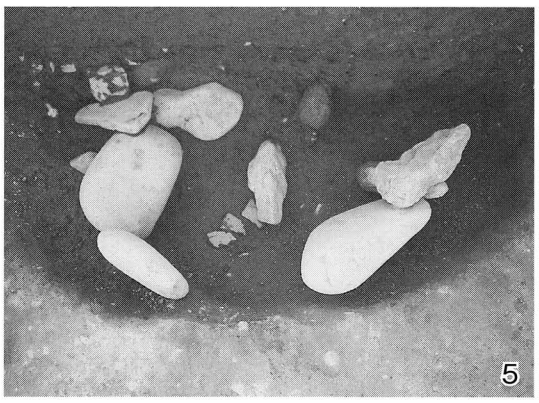
図版４

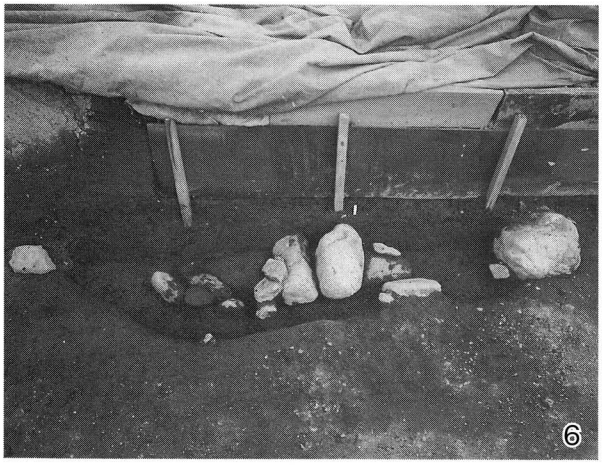


1　1・2号土坑付近（南より）
2　2号土坑（上面）
3　1号土坑（上面）
4　同　人骨出土状況

図版６





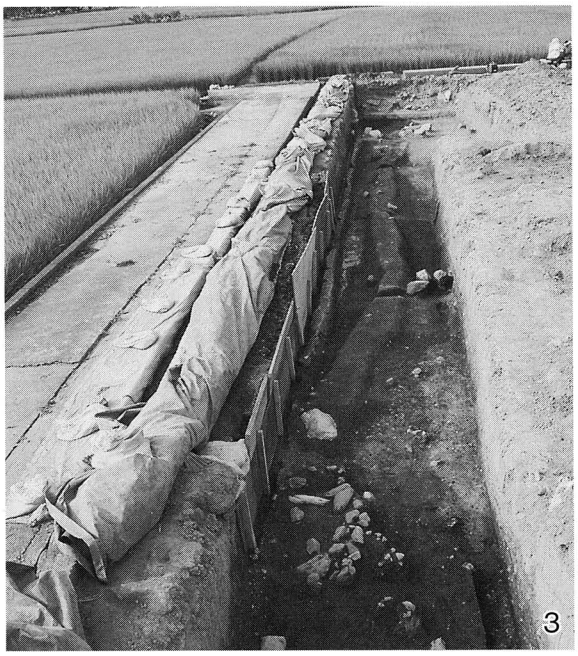


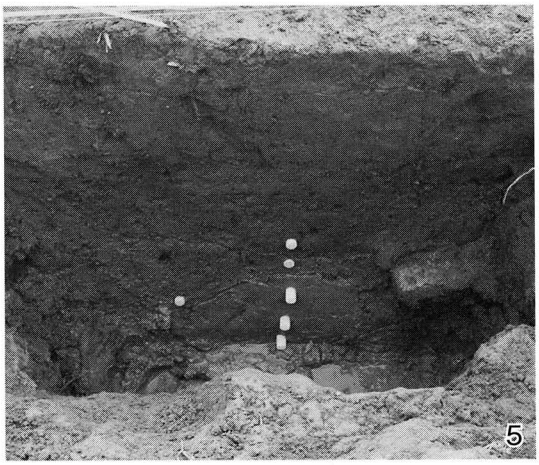
図版６

1　１号土坑人骨出土状況
2　宗源院の五輪塔
3　３・５号土坑付近の状況
4　３号土坑上面
5　同　下面
6　４号土坑
7　５号土坑

図版７

1　Ｃ区西側前景（東より）
2　同　調査風景（西より）
3　同　１号水田跡（西より）
4　同　水田写真（東より）
5　同　畦畔サンプリング地点



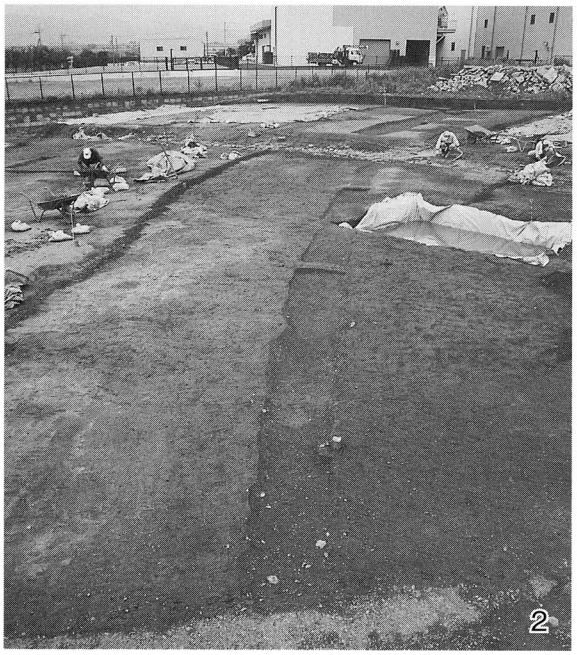


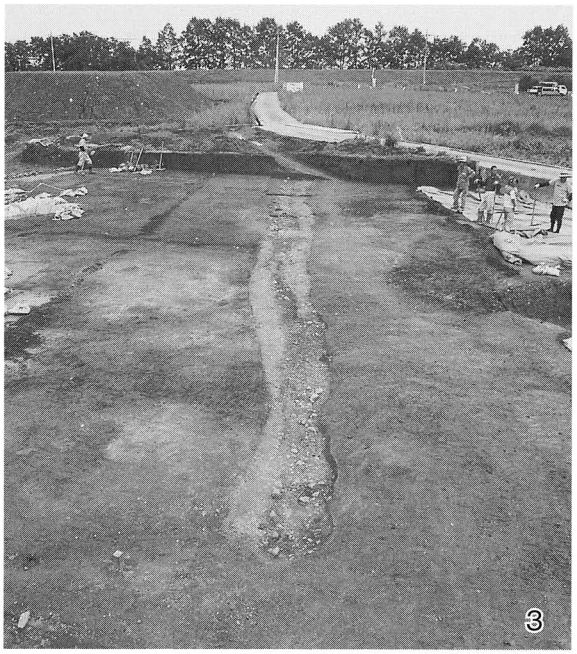
図版８

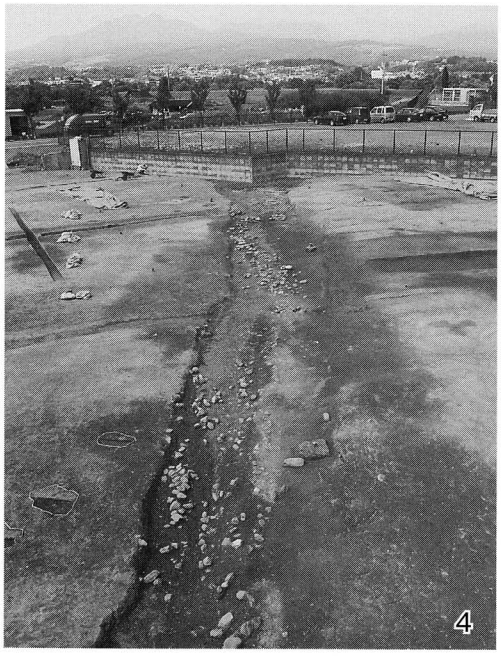
1　Ａ区調査風景（北より）
2　７号溝（西より）
3　11 号溝（南より）
4　４号溝（南より）
5　同（北より）

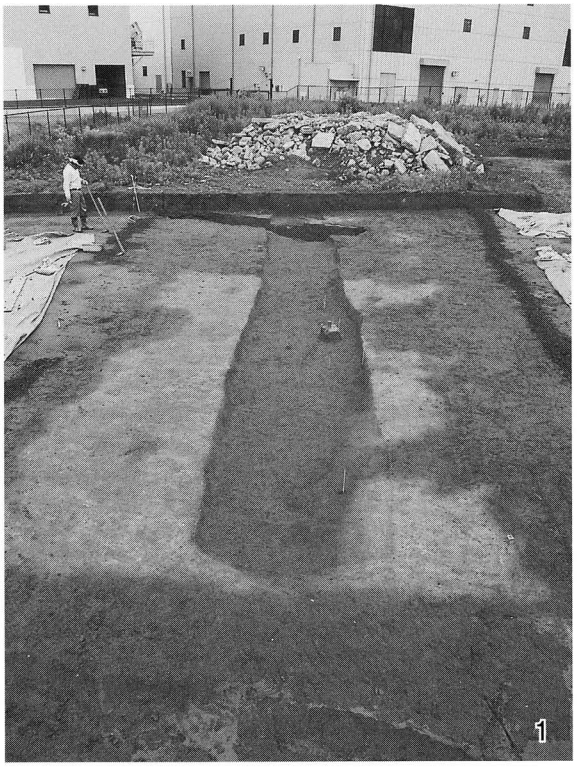
図版９

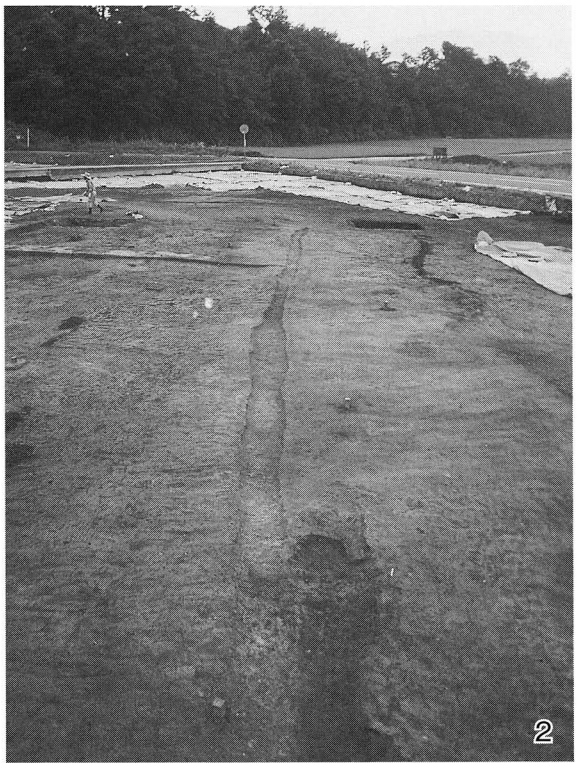
1　５号溝（西より）
2　９・13 号溝（東より）
3　14 号溝（西より）
4　Ａ区調査風景
5　同
6　同　刀子出土状況

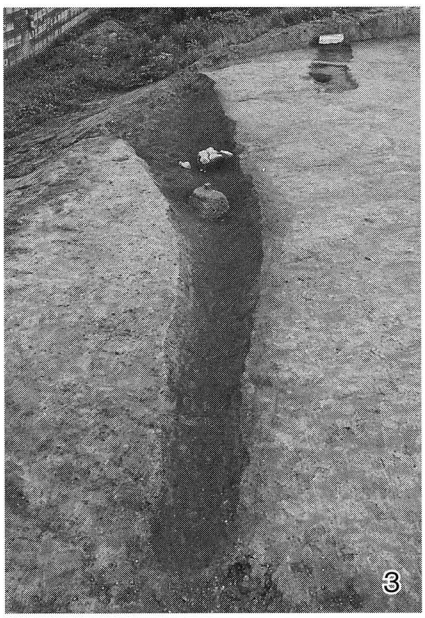


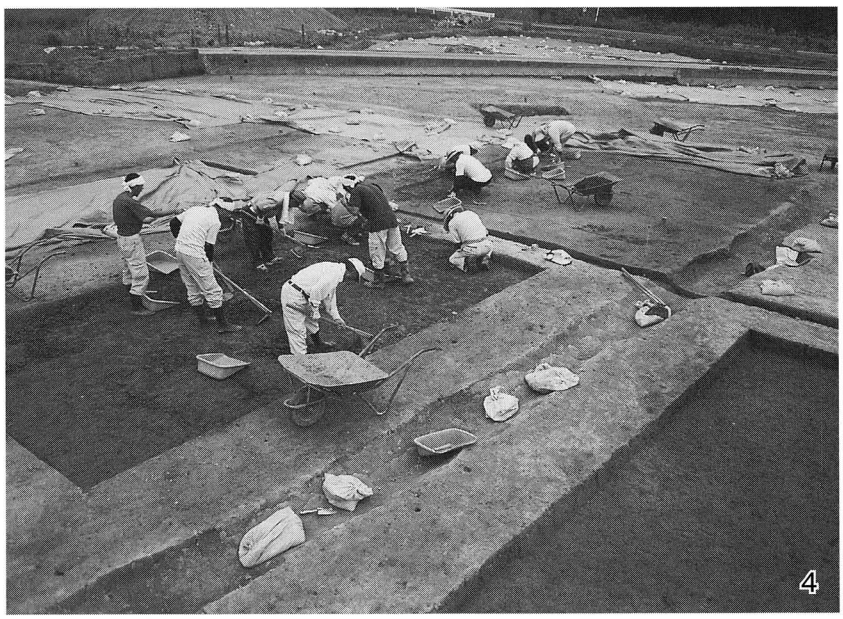





1


2


3

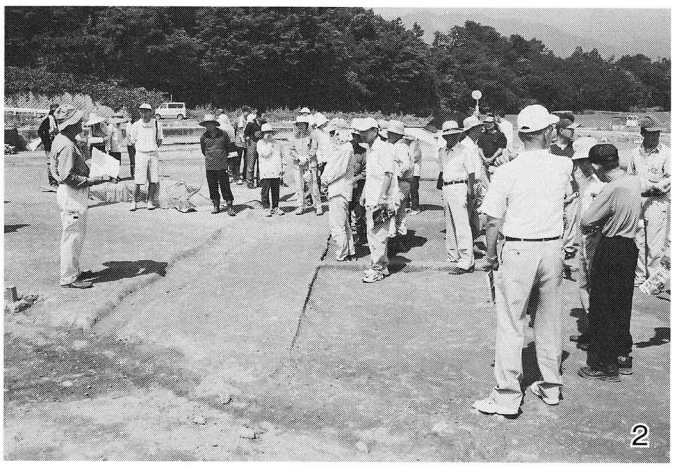

4

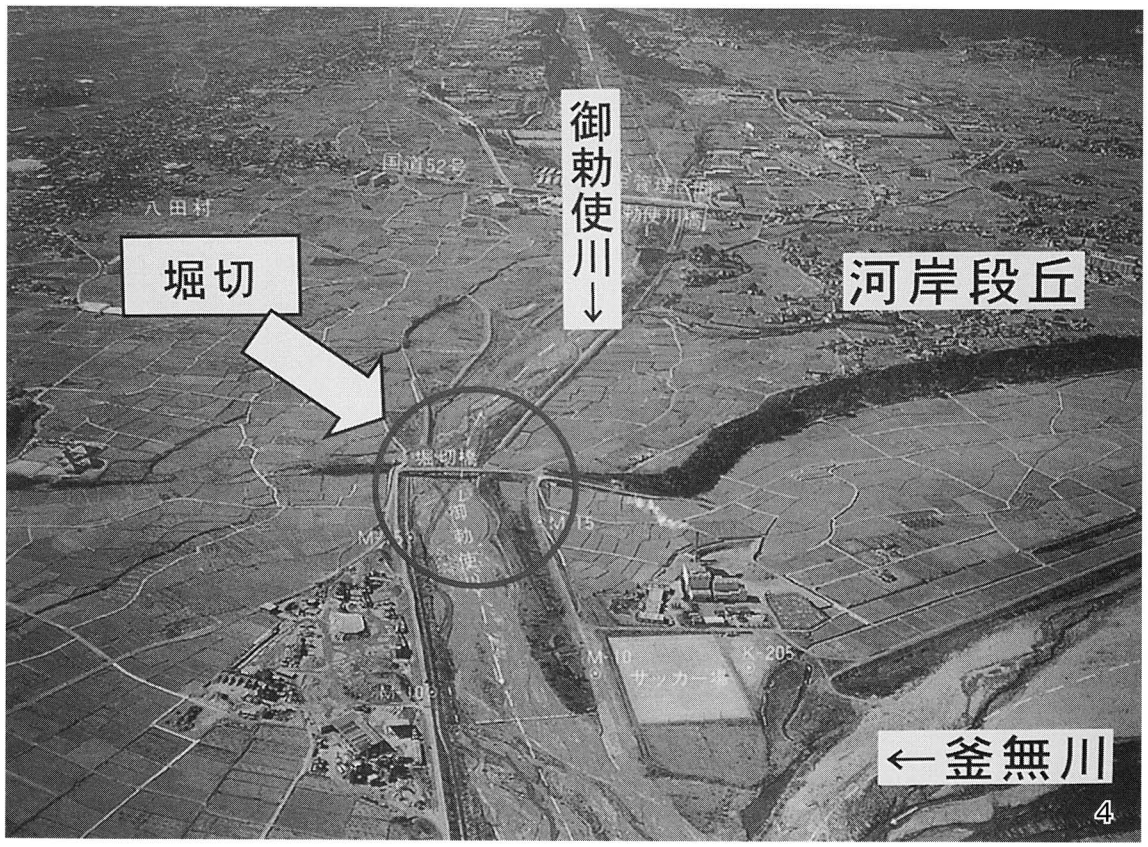
6

5

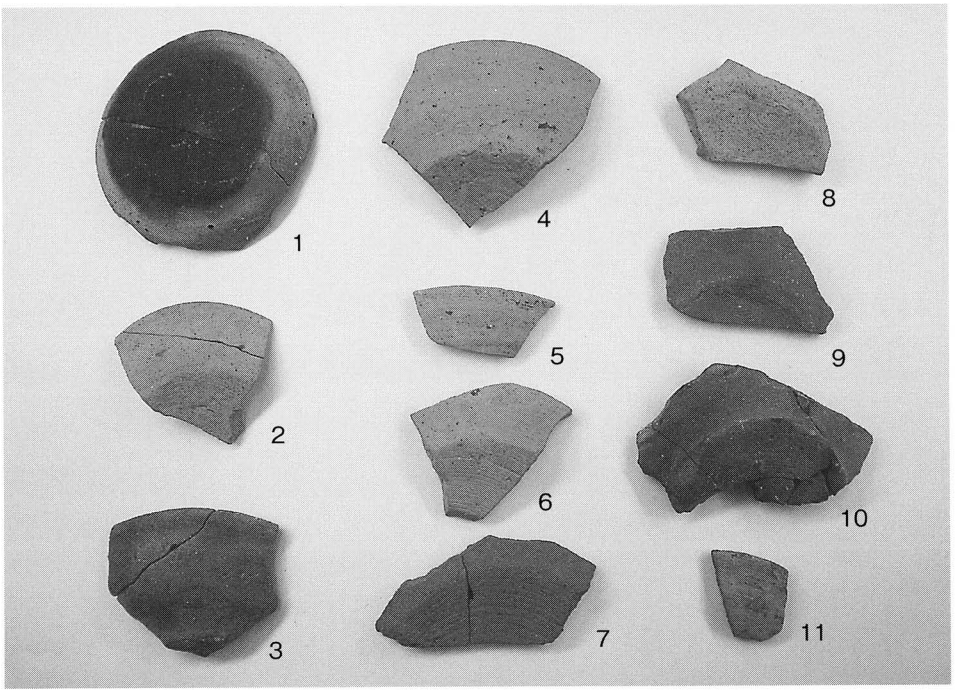
図版 10

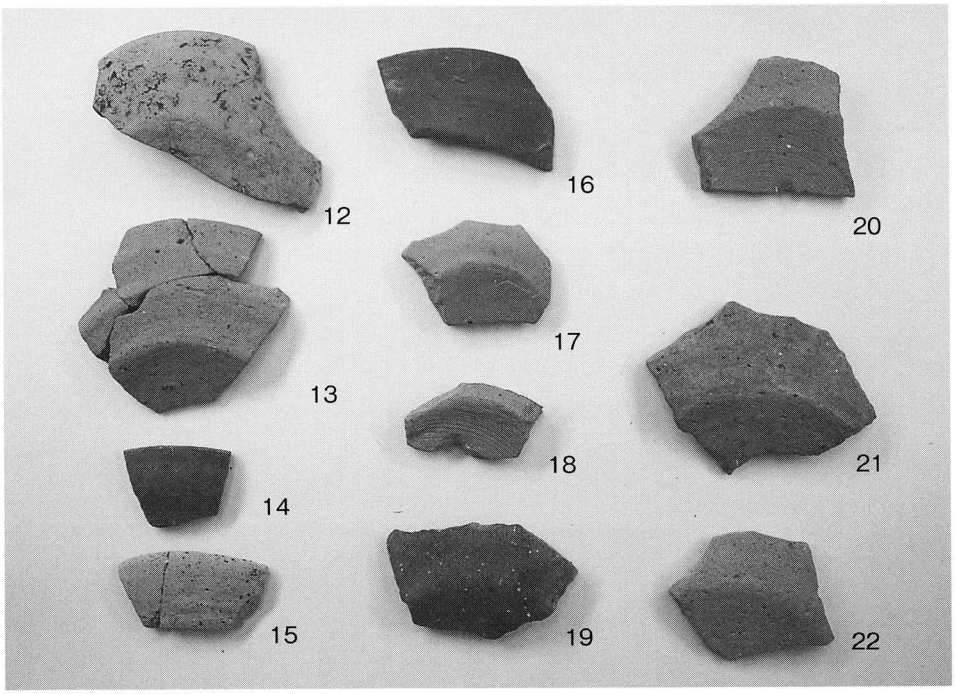
1　A 区畝状遺構
2　見学会（2006 年 7 月 8 日）
3　堀切橋の看板
4　同　看板の説明写真（複写）

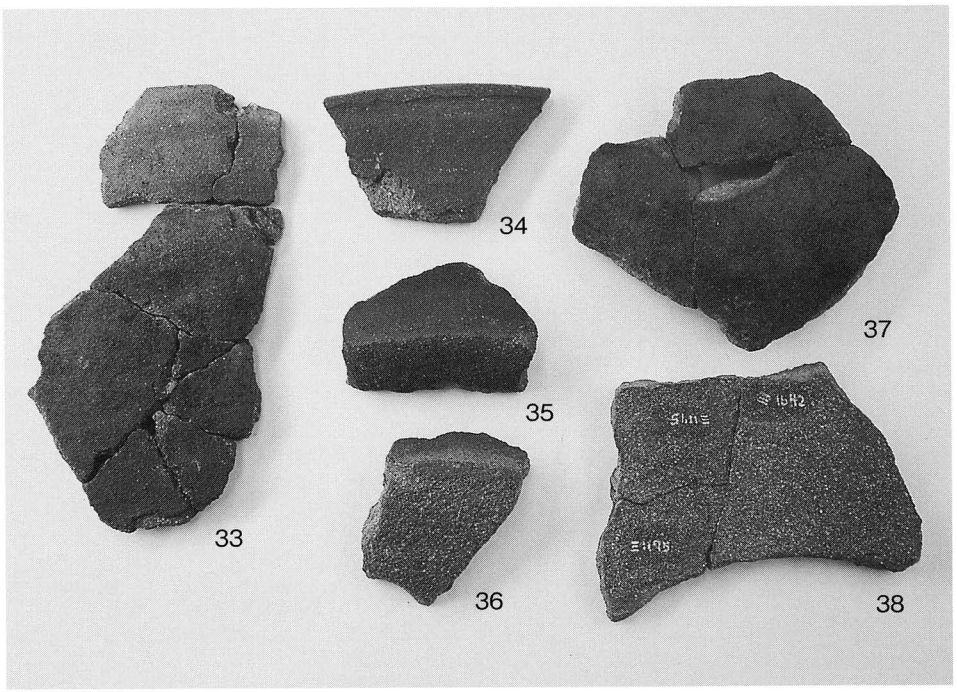




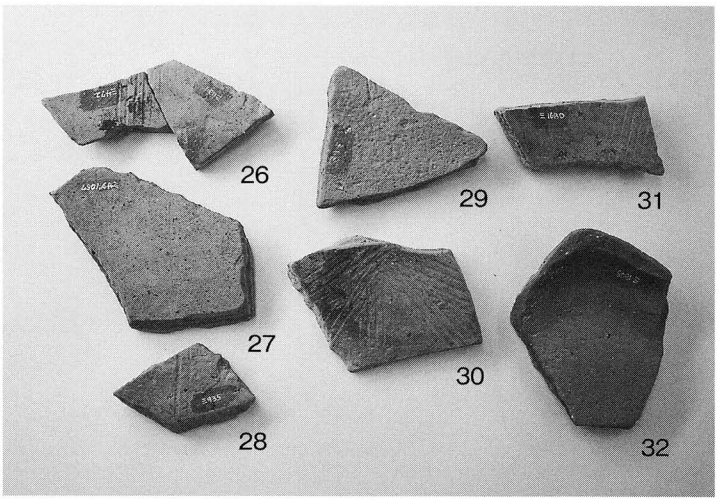
1 溝

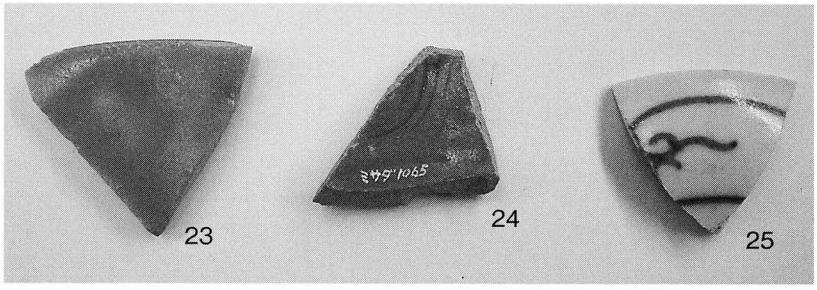


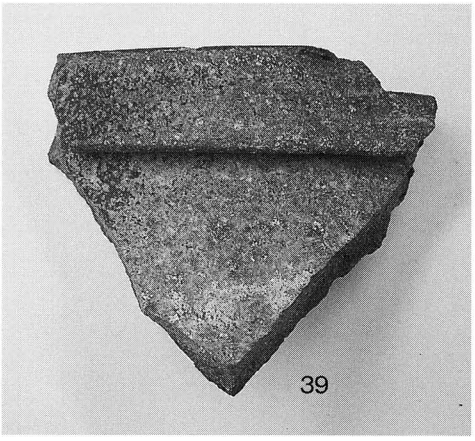


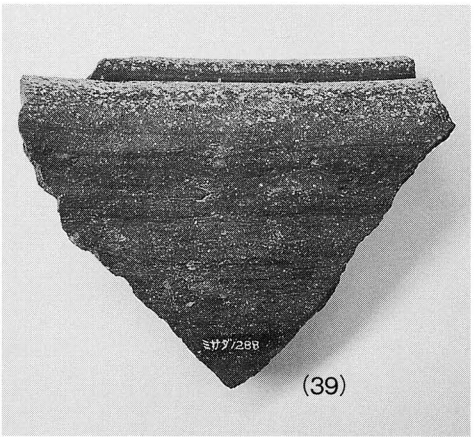


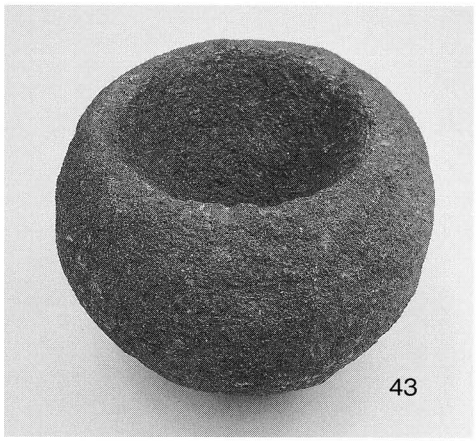
図版 12

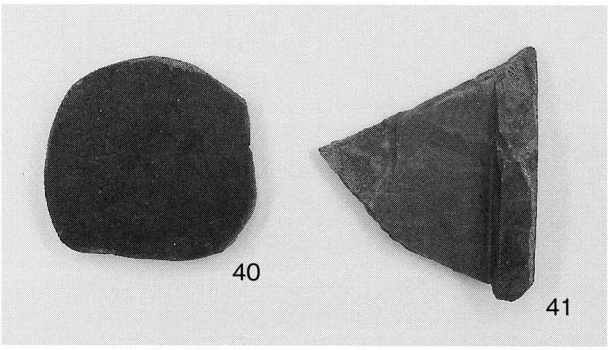


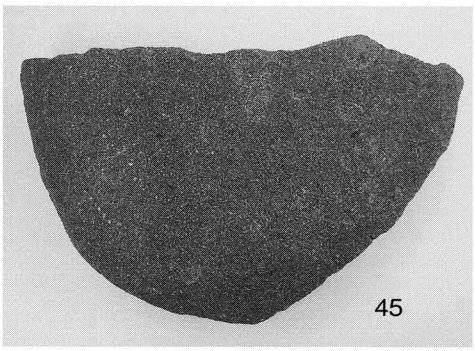


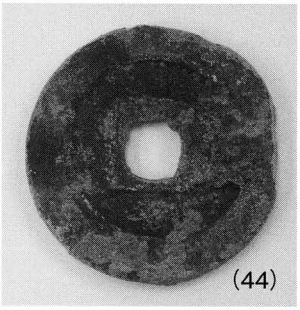


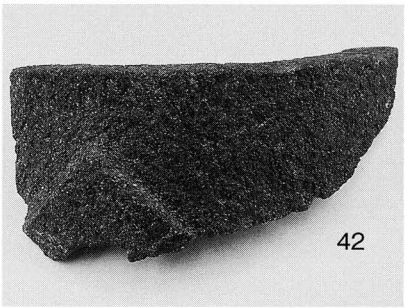


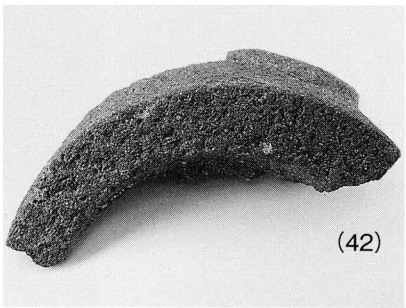


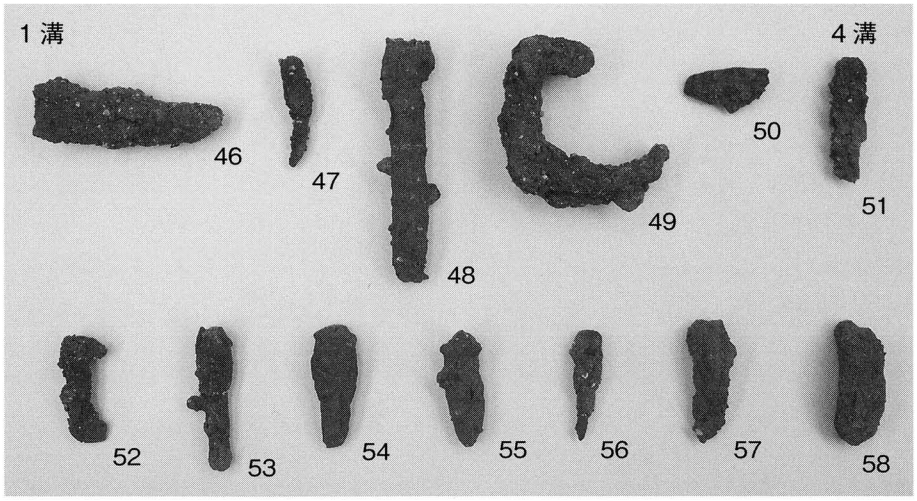


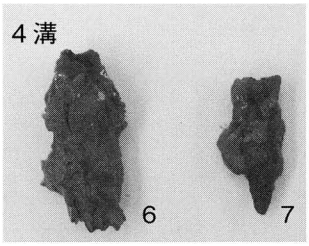


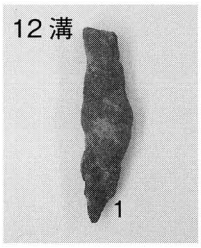


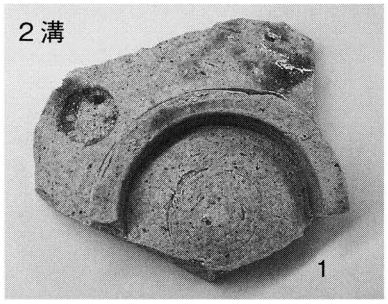


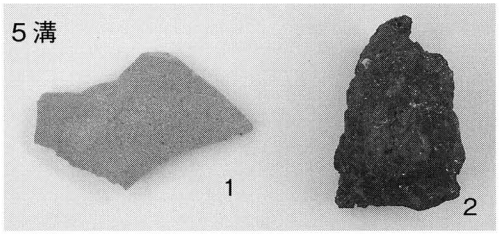


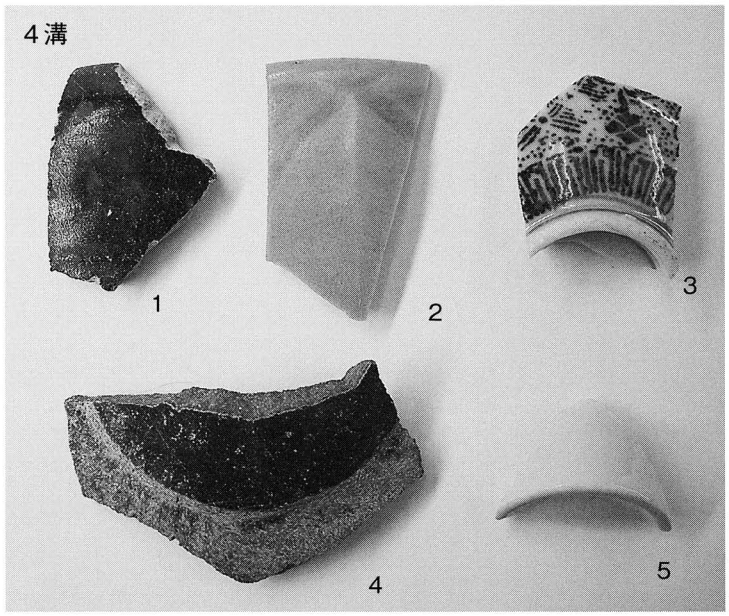

1 溝
4 溝
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58

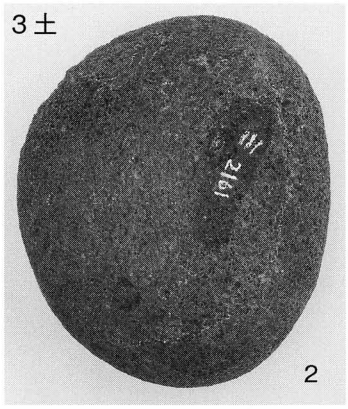

4 溝
6
7

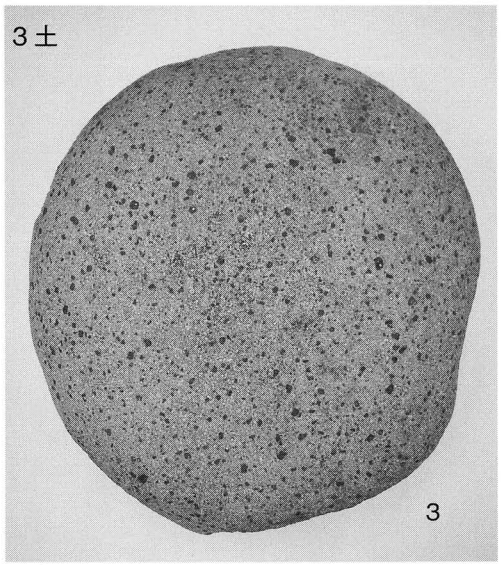

12 溝
1

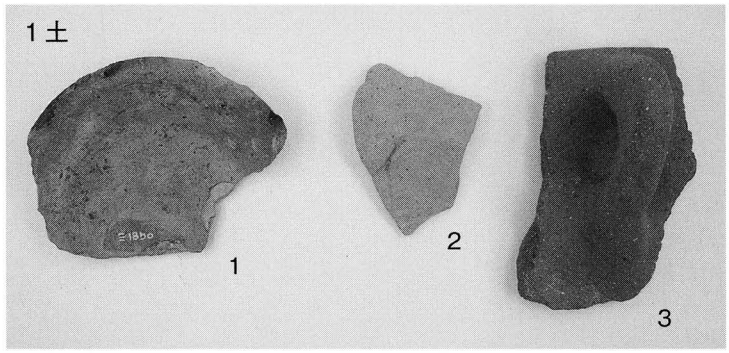

2 溝
1

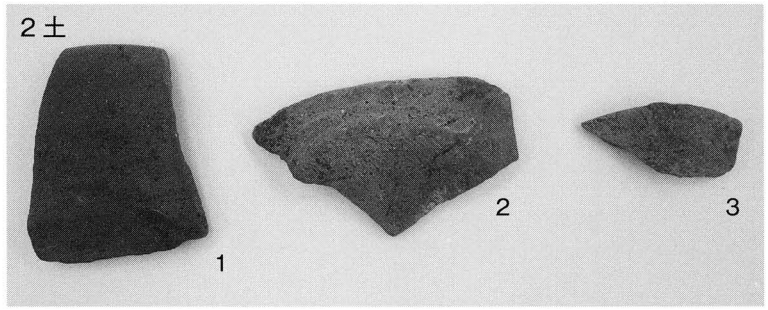

5 溝
1
2

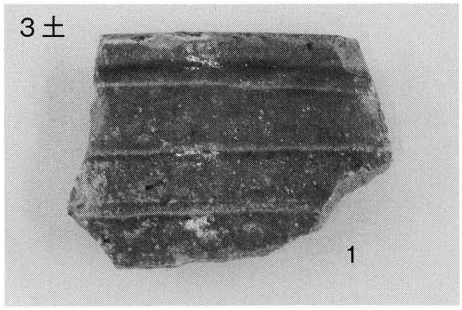

4 溝
1
2
3
4
5


3 土
2

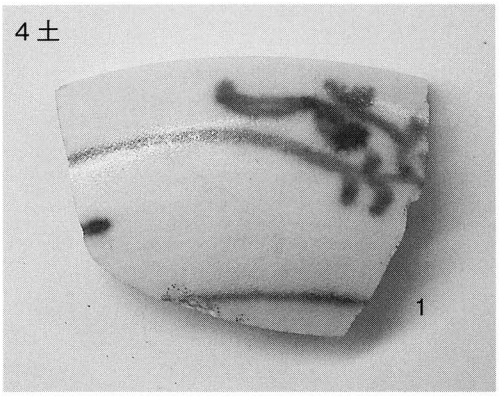

3 土
3

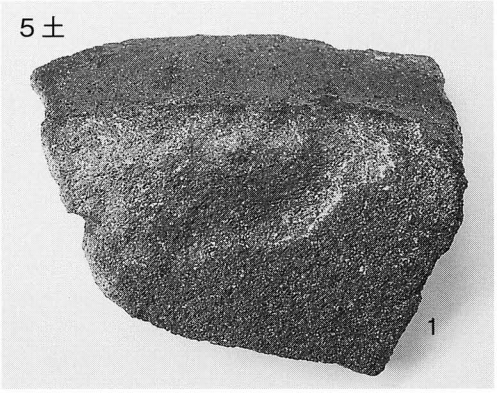

1 土
1
2
3

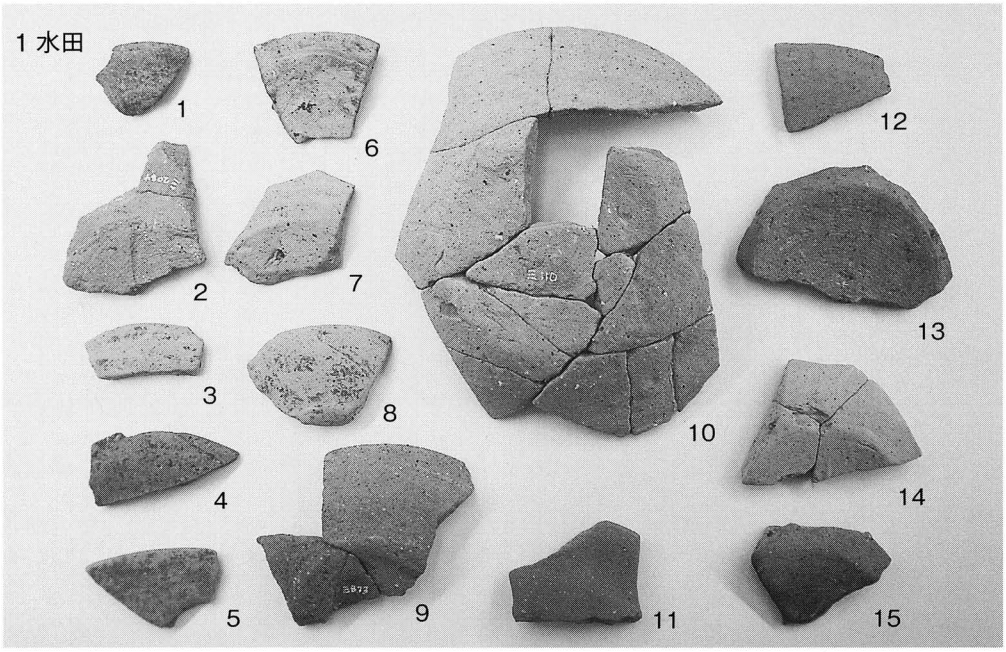

2 土
1
2
3

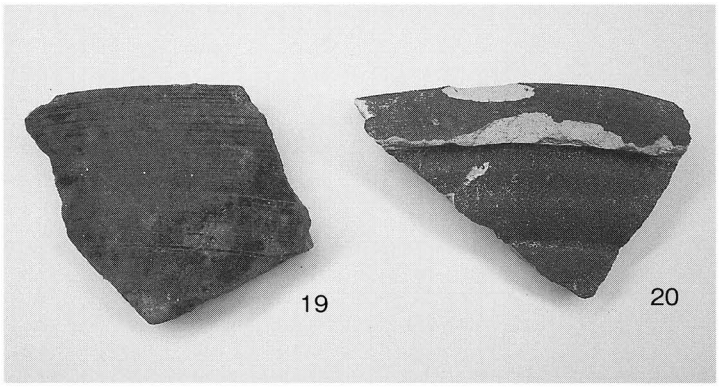

3 土
1

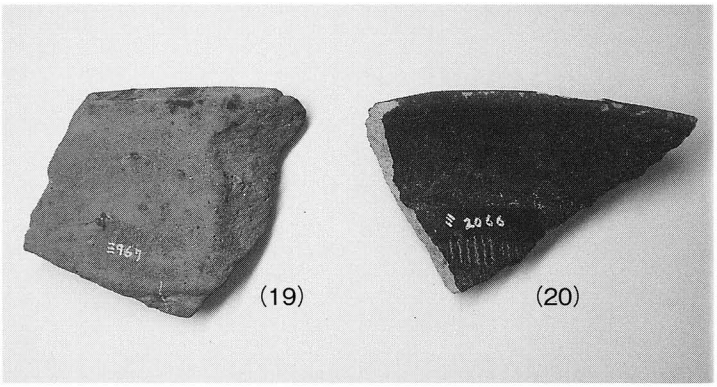
図版 14

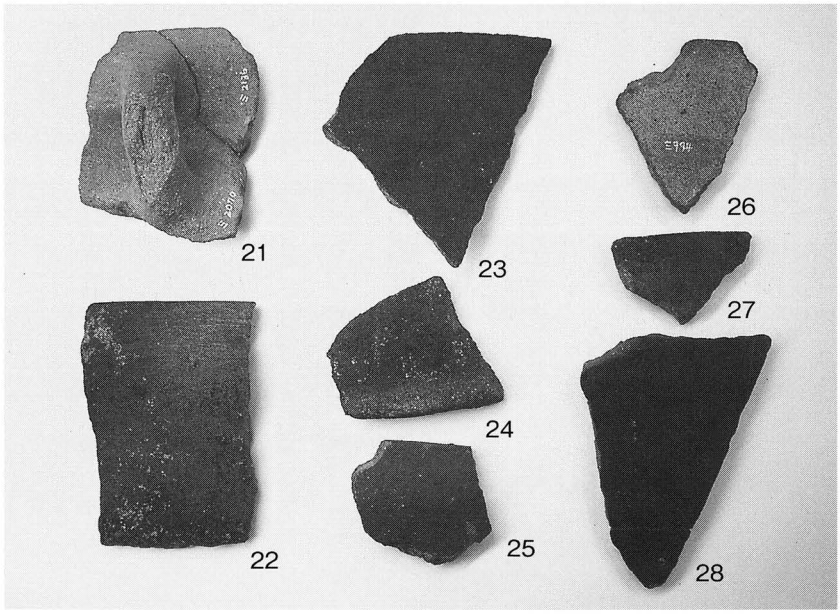

4 土
1

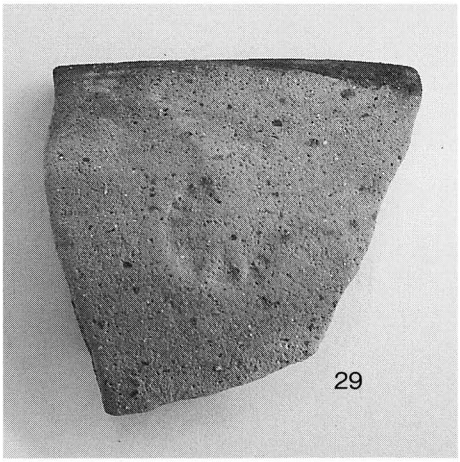

5 土
1

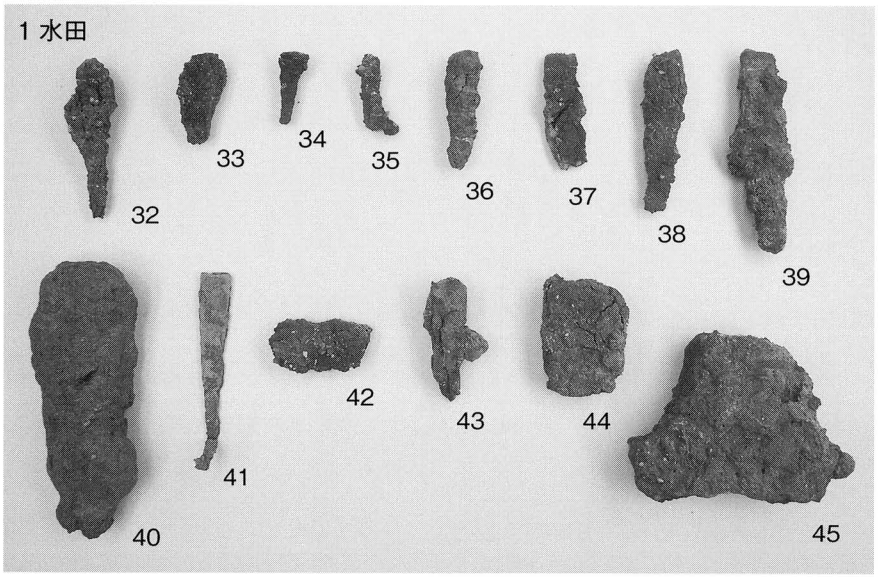

1 水田
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15

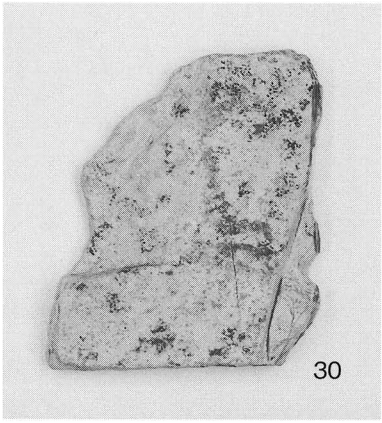

19
20

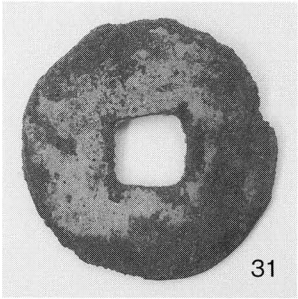

(19)
(20)

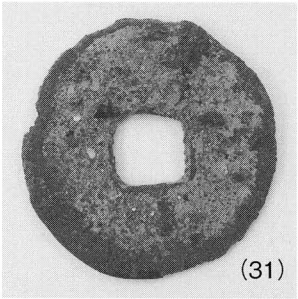

21
22
23
24
25
26
27
28

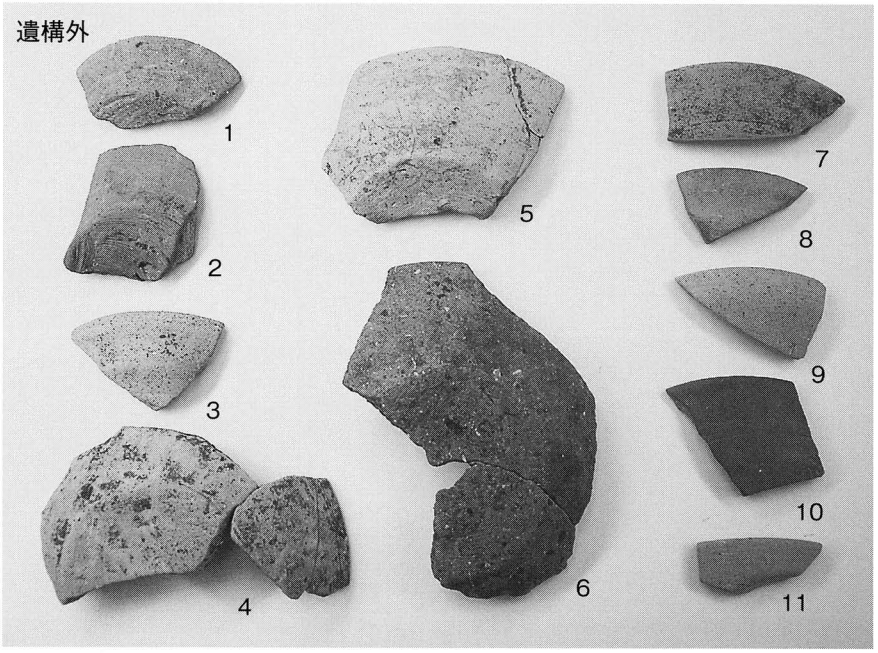

29

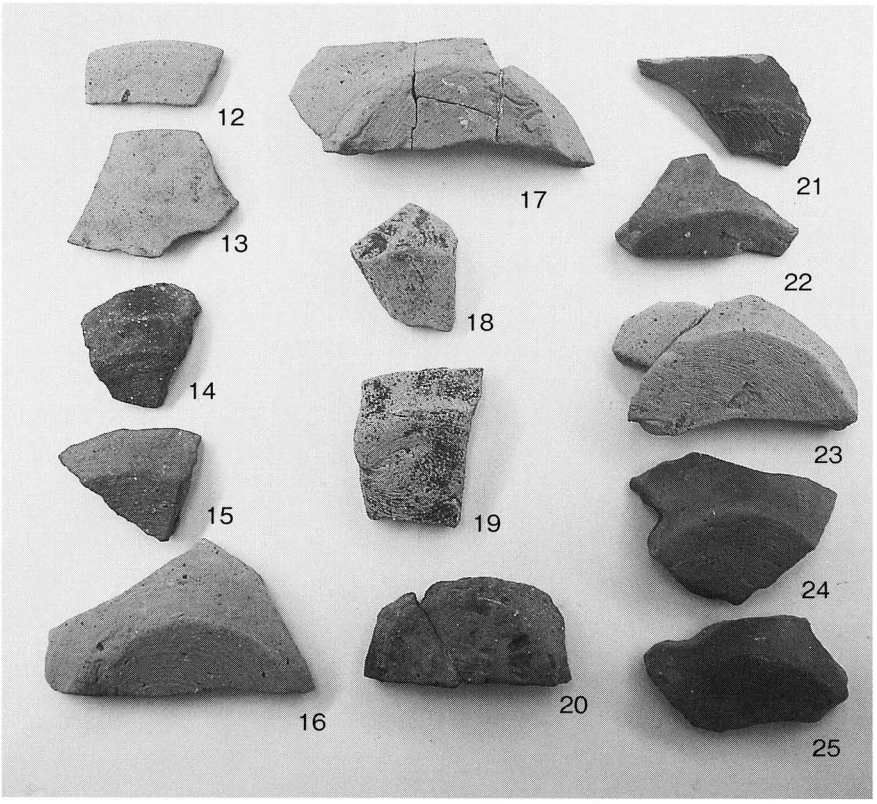

1 水田
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45


30

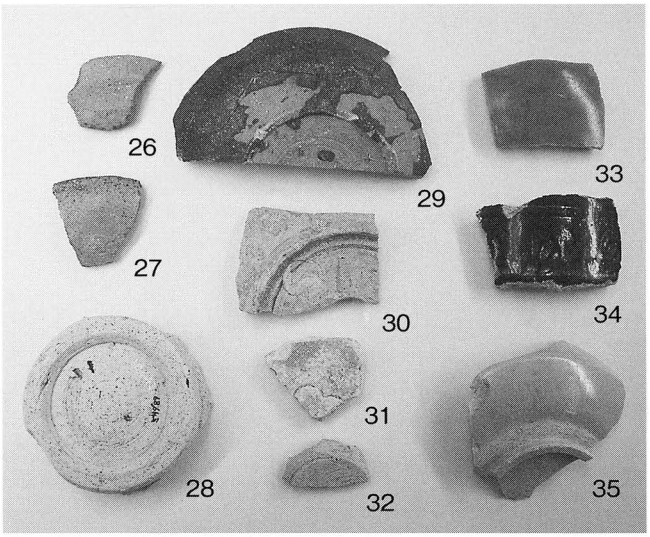

31

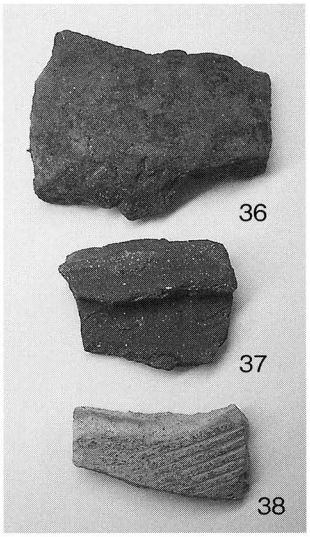

(31)

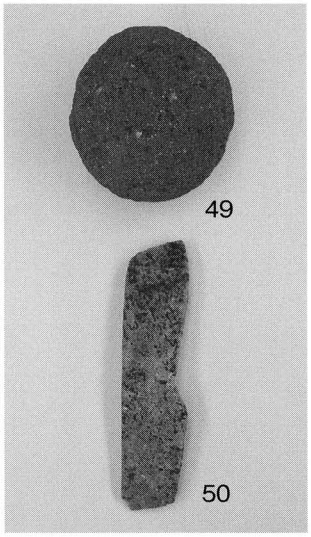

遺構外
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

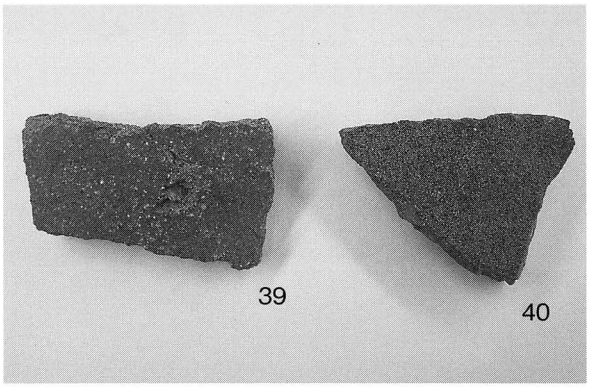

12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25

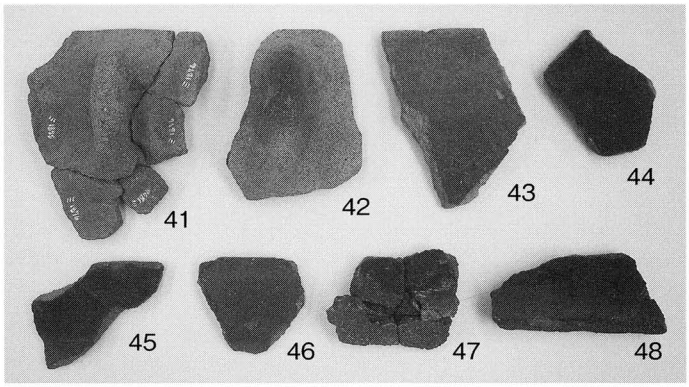
図版 16

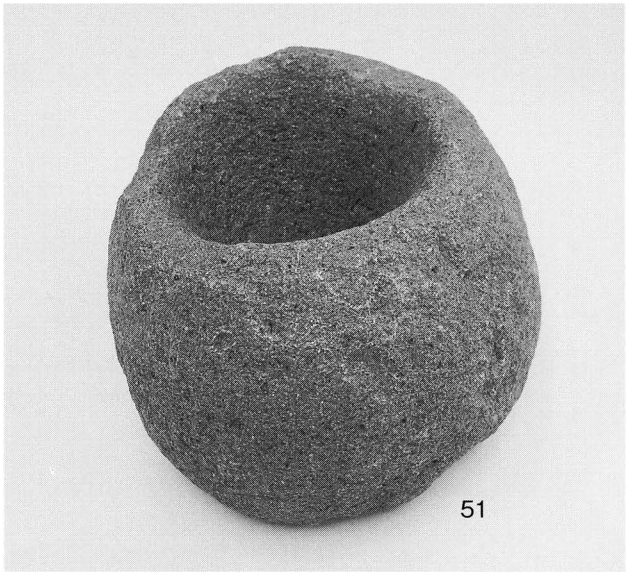

26
29
33
27
30
34
31
28
32
35

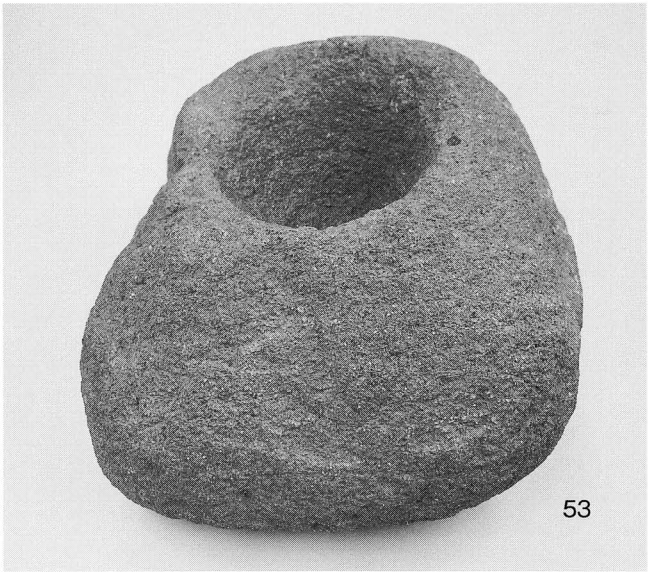

36
37
38

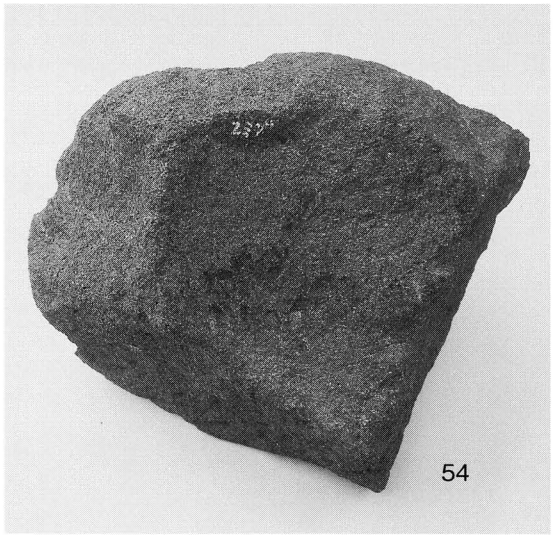

49
50

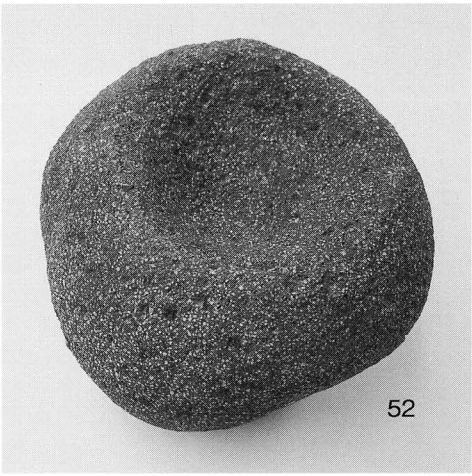

39
40

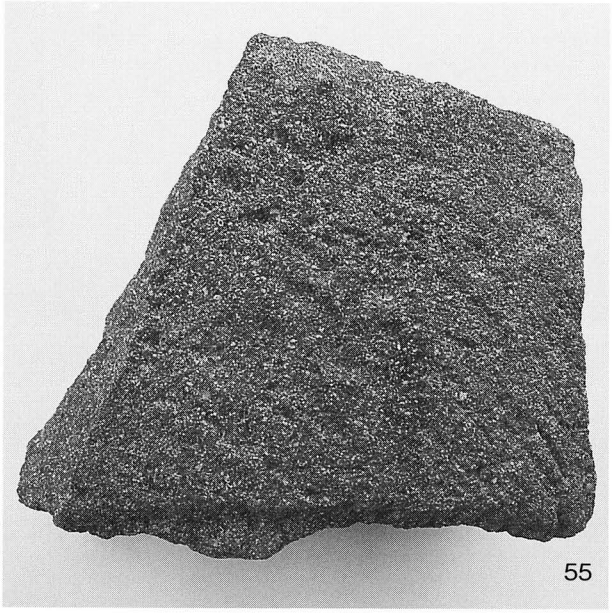

41
42
43
44
45
46
47
48

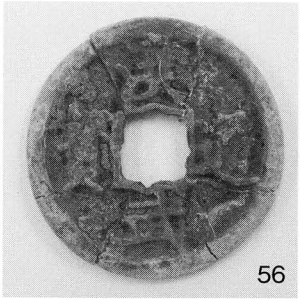

51

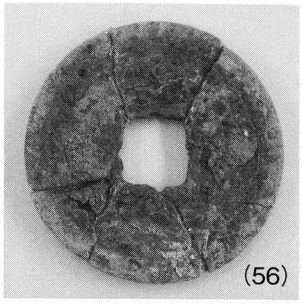

53

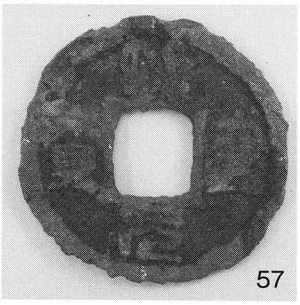

54

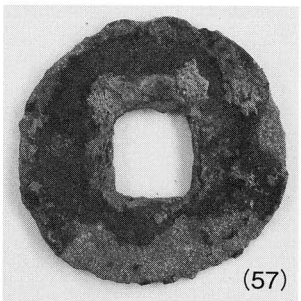

52

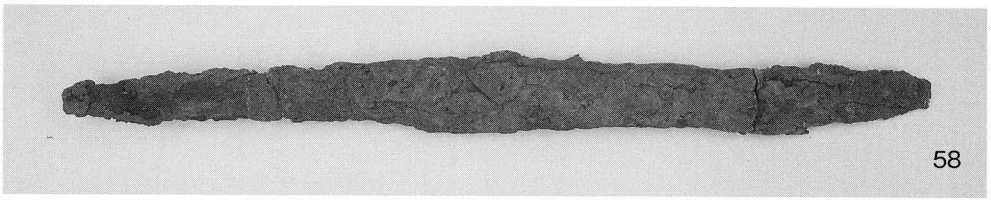

55

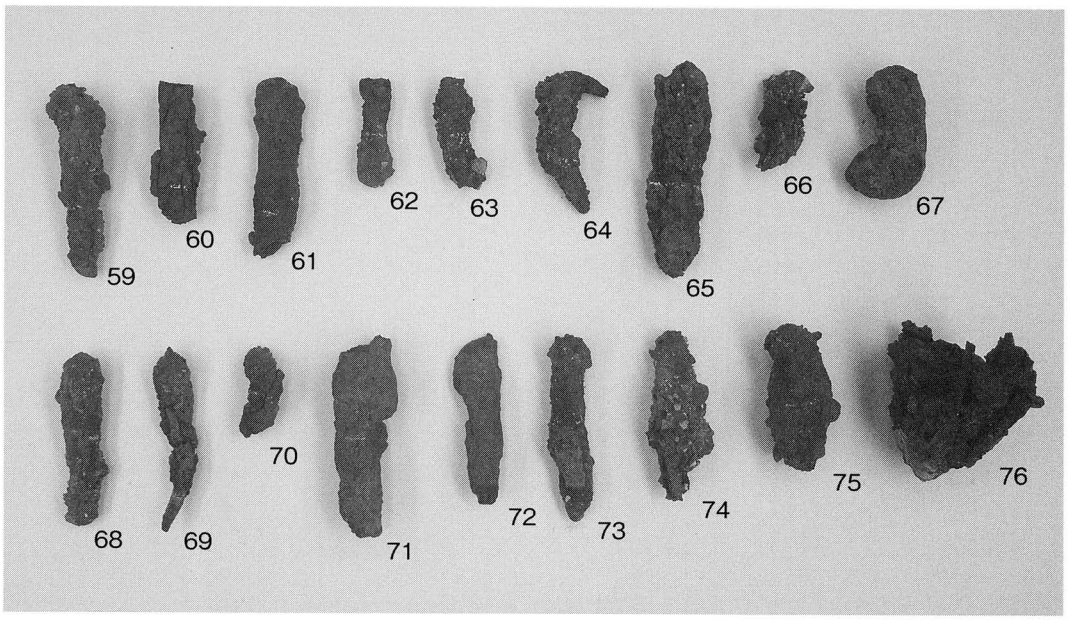

56

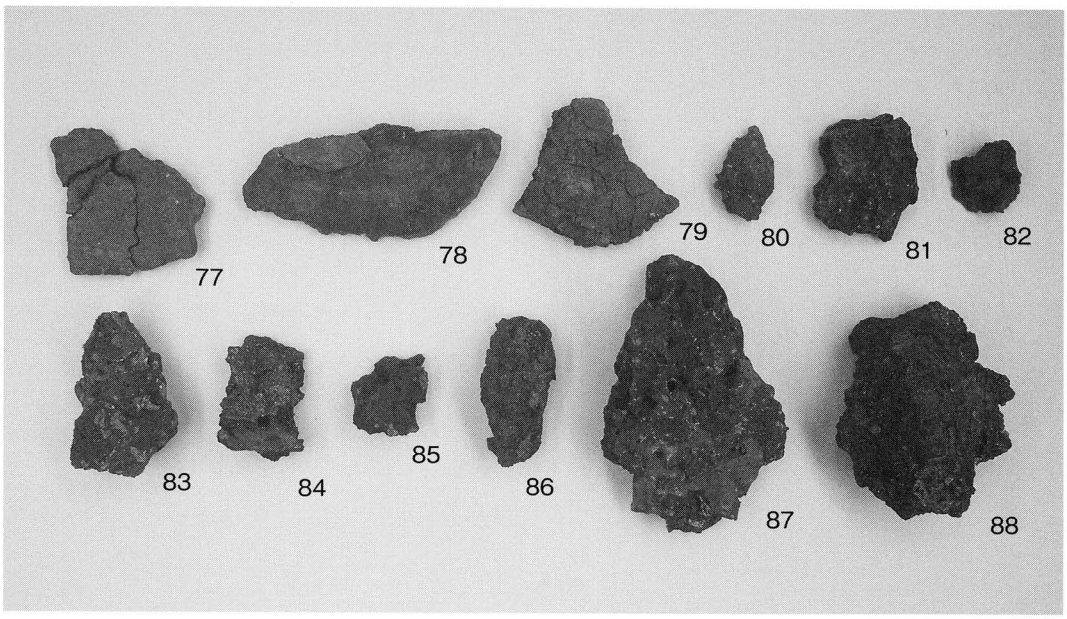

(56)


57

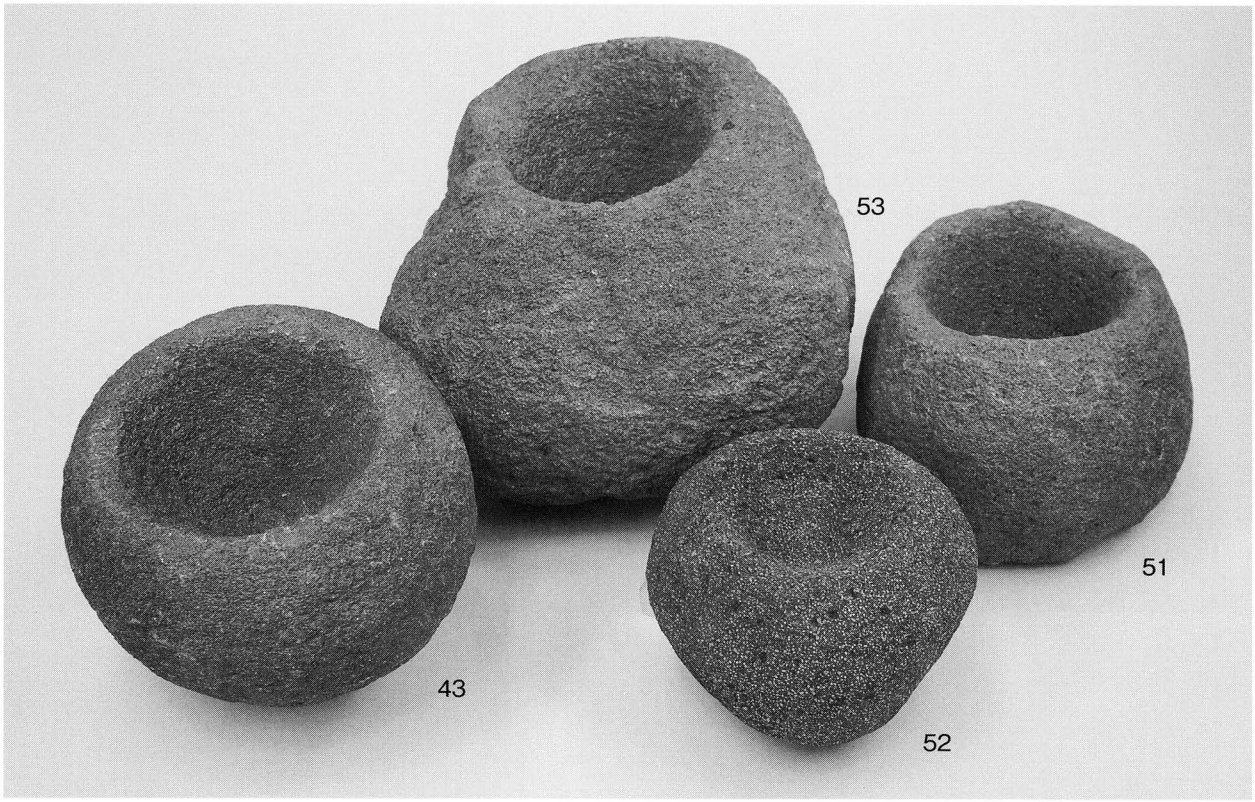

(57)

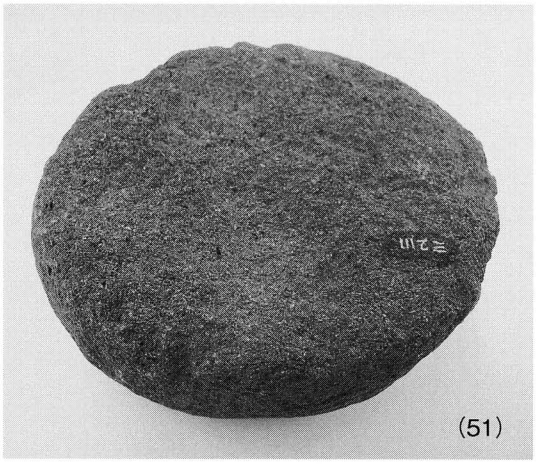

58

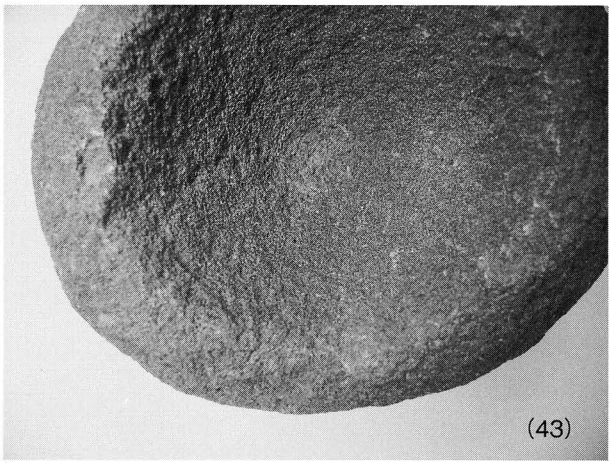

59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76

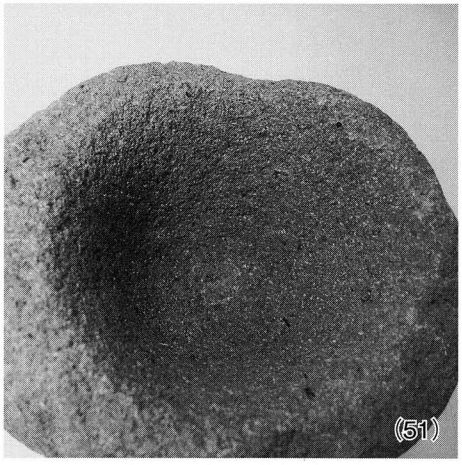

77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88

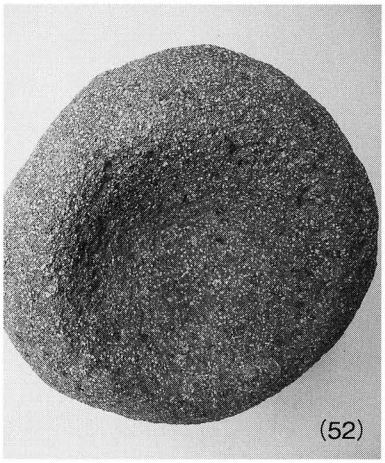
図版 18

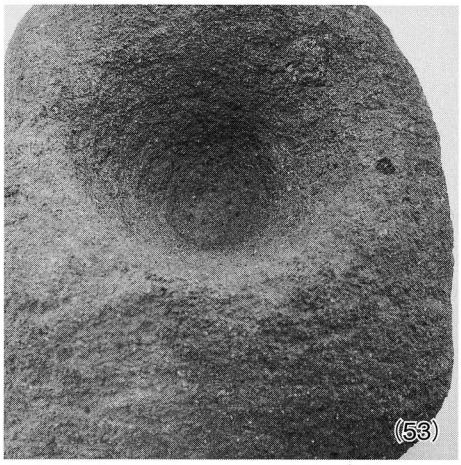


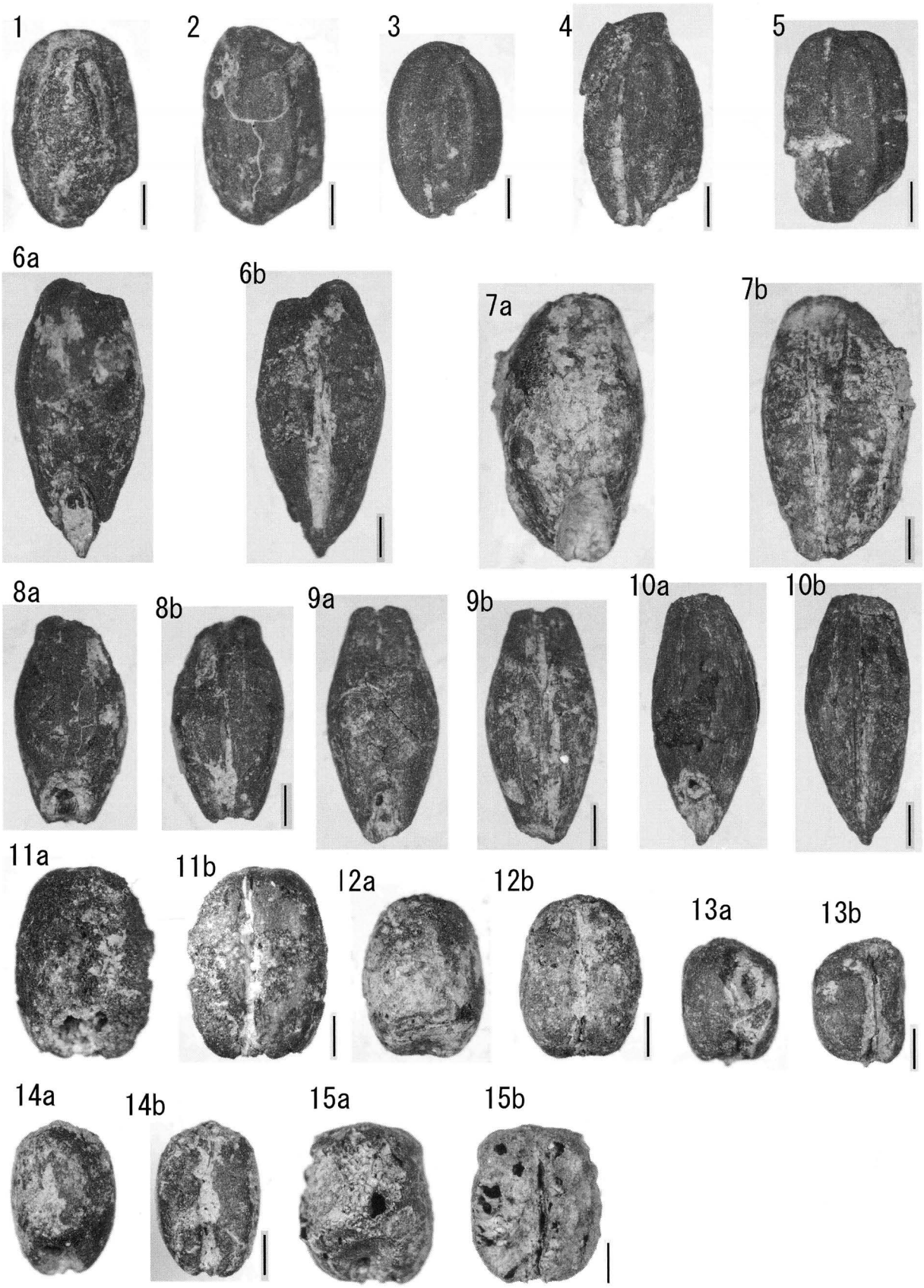






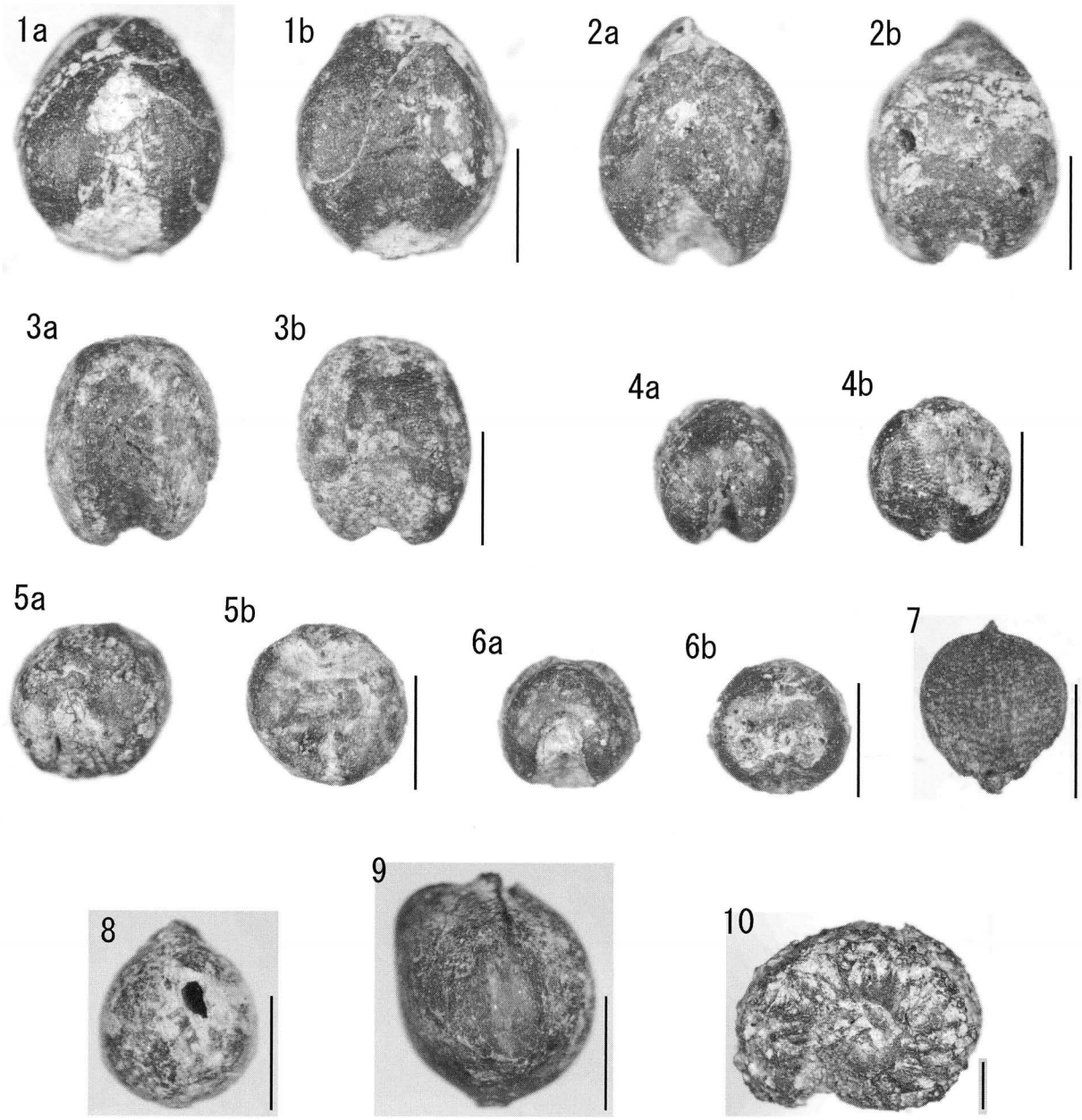




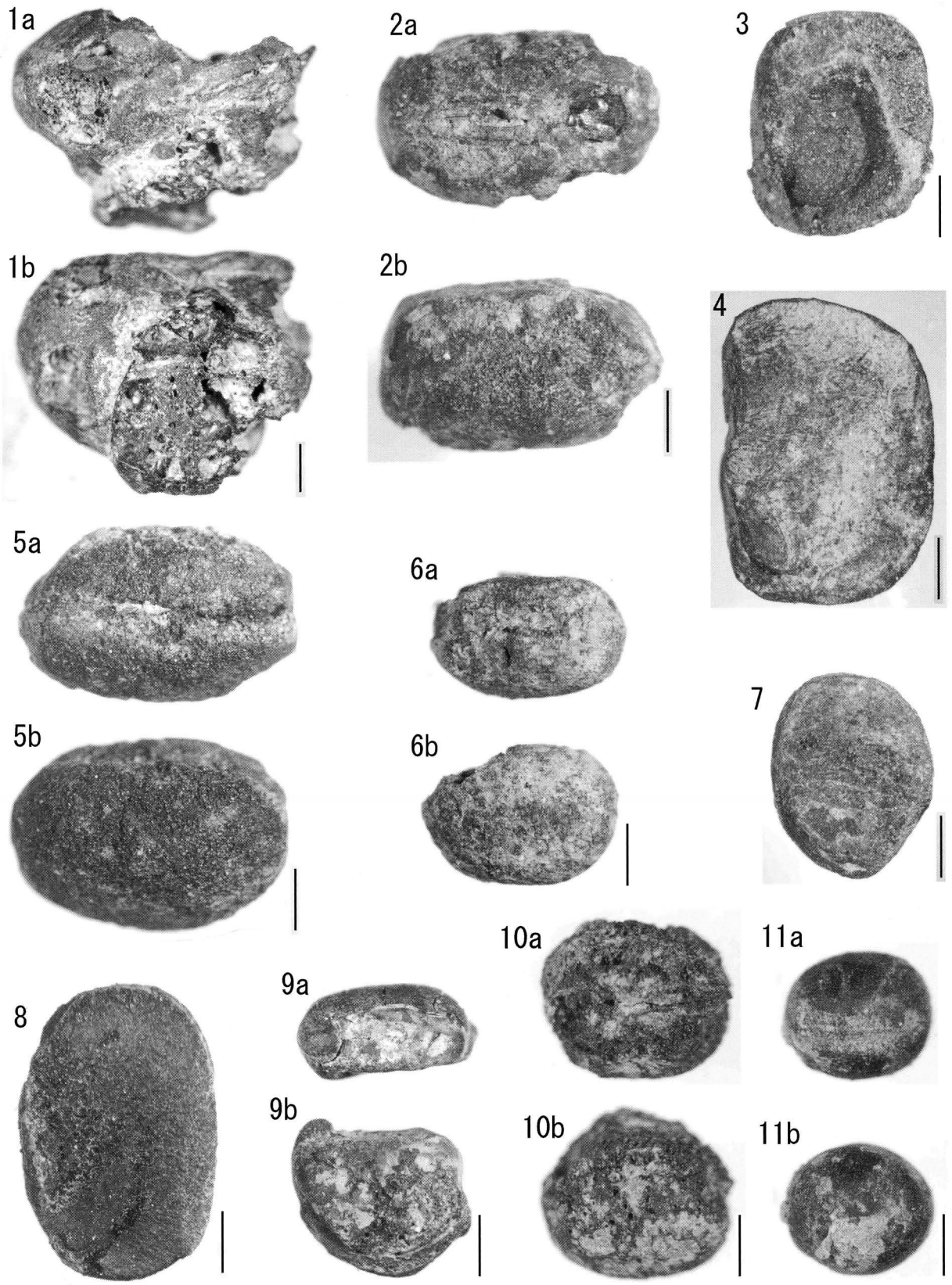


出土した炭化種実（スケールは 1mm）

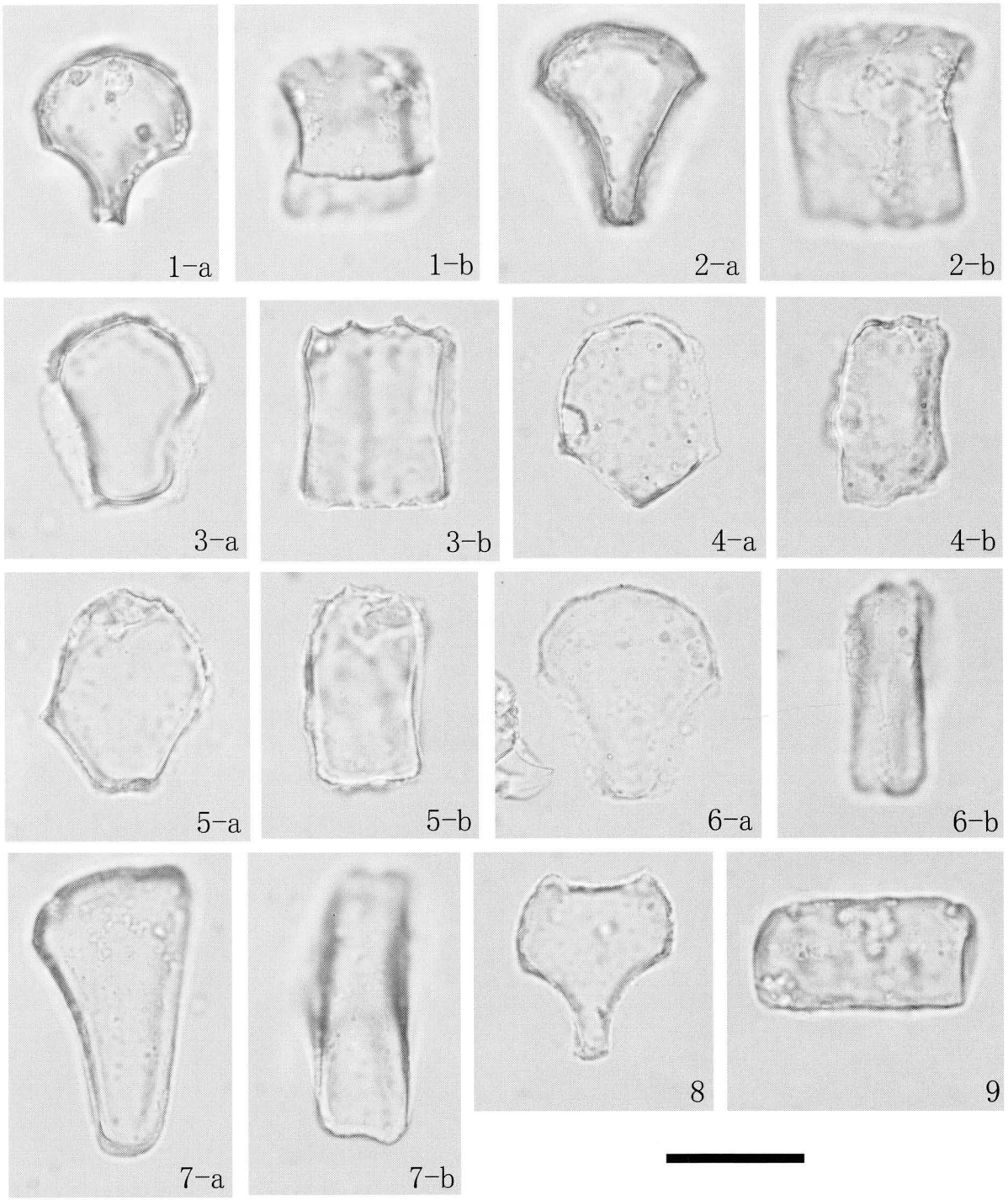
1 ～ 5. イネ、炭化胚乳　　6 ～ 10. オオムギ、炭化胚乳　　11 ～ 15. コムギ、炭化胚乳



出土した炭化種実（スケールは 1mm）
1 ～ 3. ヒエ属、炭化胚乳　　4 ～ 6. アワ、炭化胚乳　　7. ホタルイ属、炭化果実
8、9. タデ科、炭化果実　　10. アオツヅラフジ、炭化種子



出土した炭化種実（スケールは 1mm）
1. ダイズの仲間、炭化種子　　2 ～ 4. ササゲ属、炭化種子（2: 完形、3、4: 子葉内面）
5 ～ 8. マメ科 A、炭化種子（5、6: 完形、7、8: 子葉内面）　　9. マメ科 B、炭化種子
10、11. マメ科 C、炭化種子



御座田遺跡のプラント・オパール（scale bar:30μm）

1、2：イネ（a：断面、b：側面）1：試料C、2：試料E

3：ネザサ節型（a：断面、b：側面）　試料D

4：クマザサ属型（a：断面、b：側面）試料B

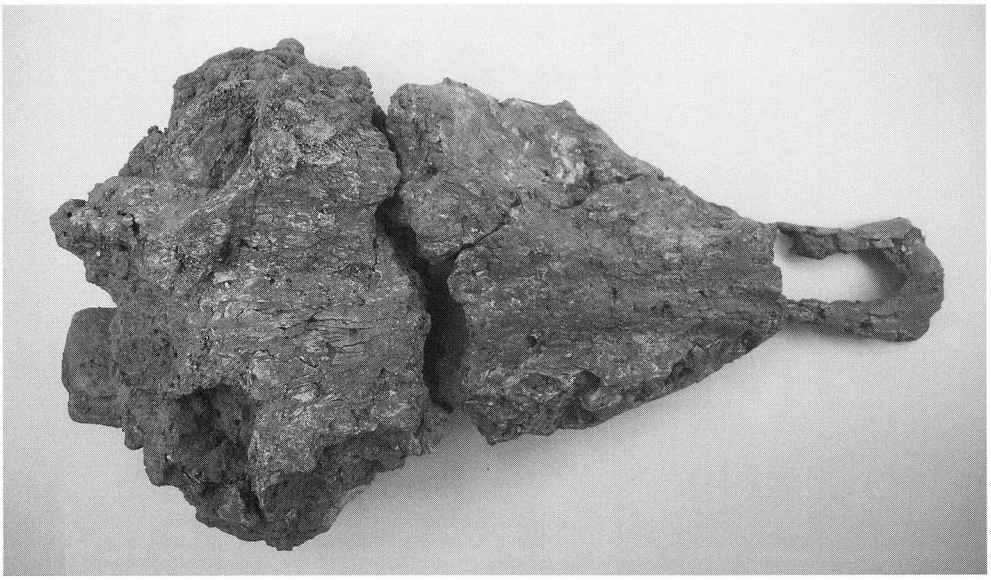
5：他のタケ亜科（a：断面、b：側面）試料D

6：サヤヌカグサ属（a：断面、b：側面）試料B

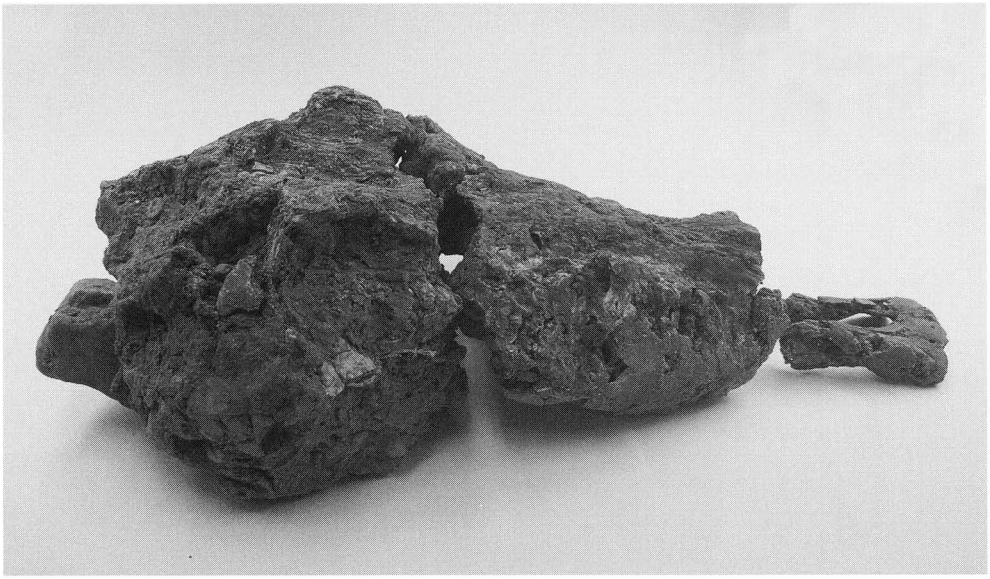
8：シバ属（断面）試料A

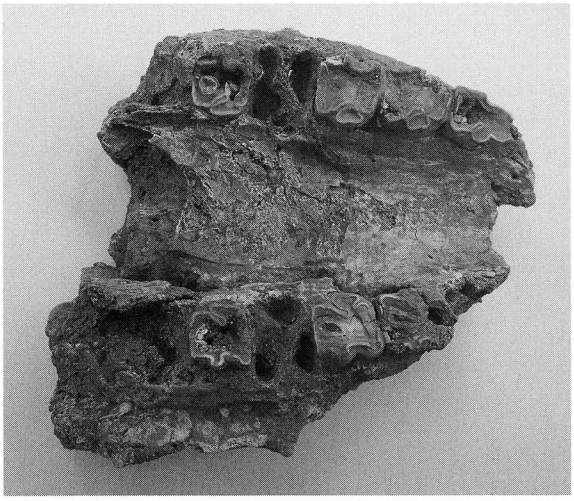
9：キビ族（側面）試料B

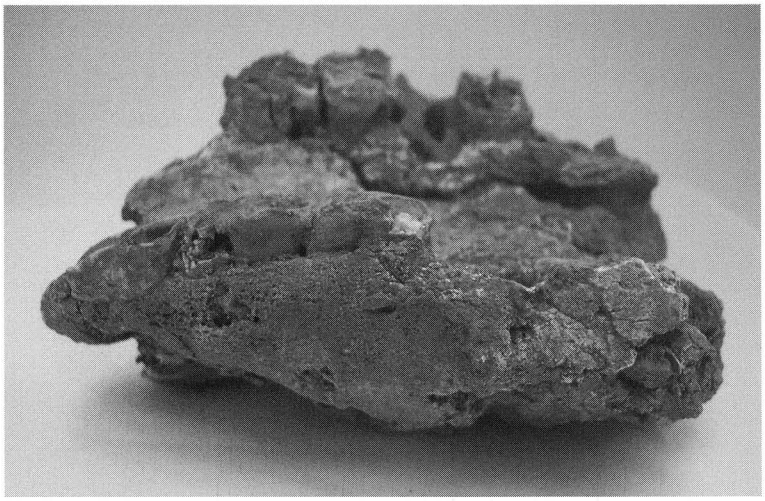
1号溝出土
ウマ頭骨
（上から）

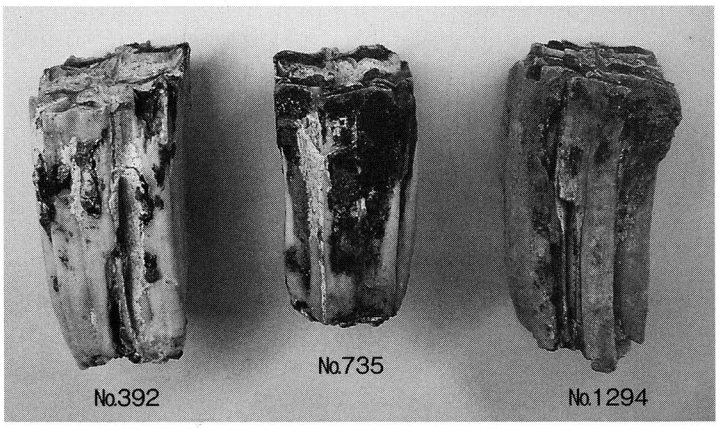


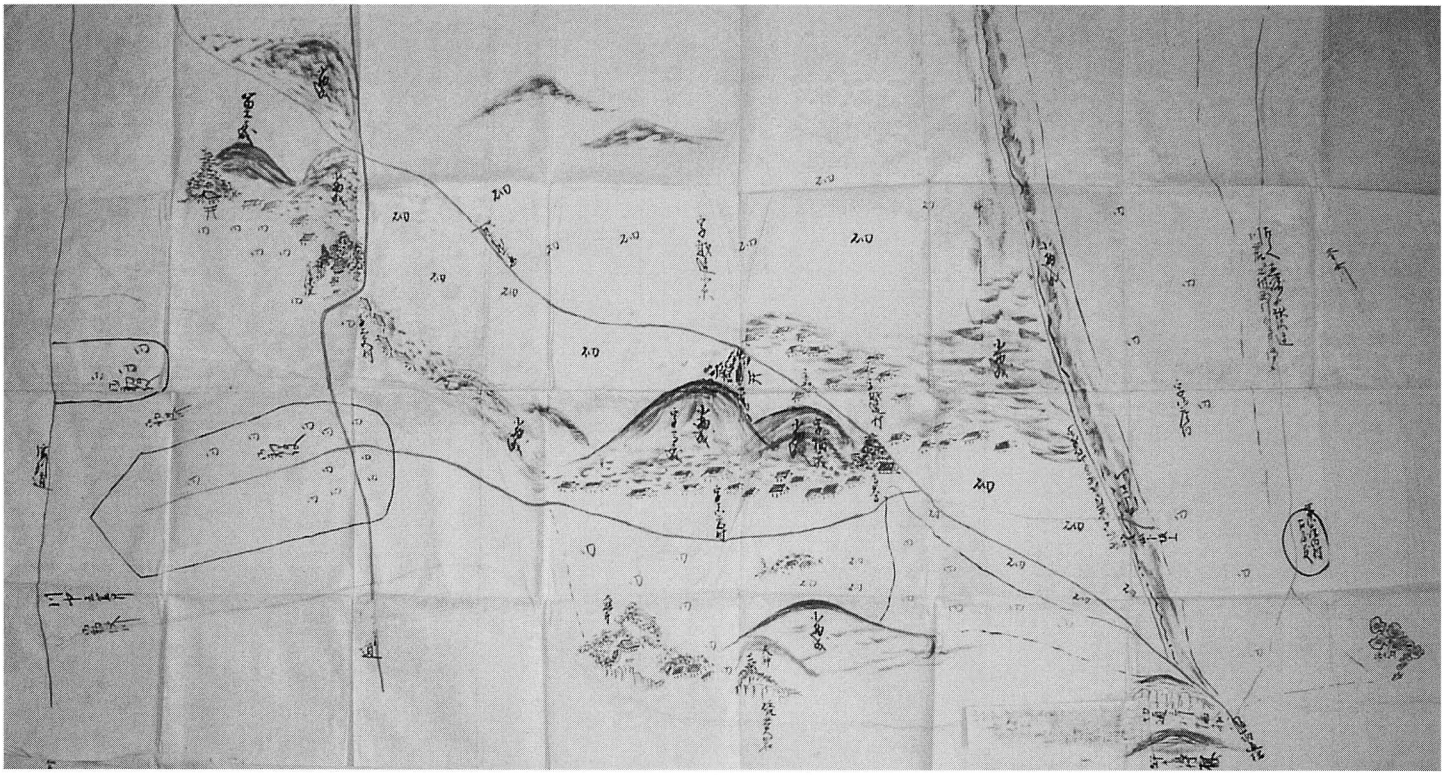
同（横から）

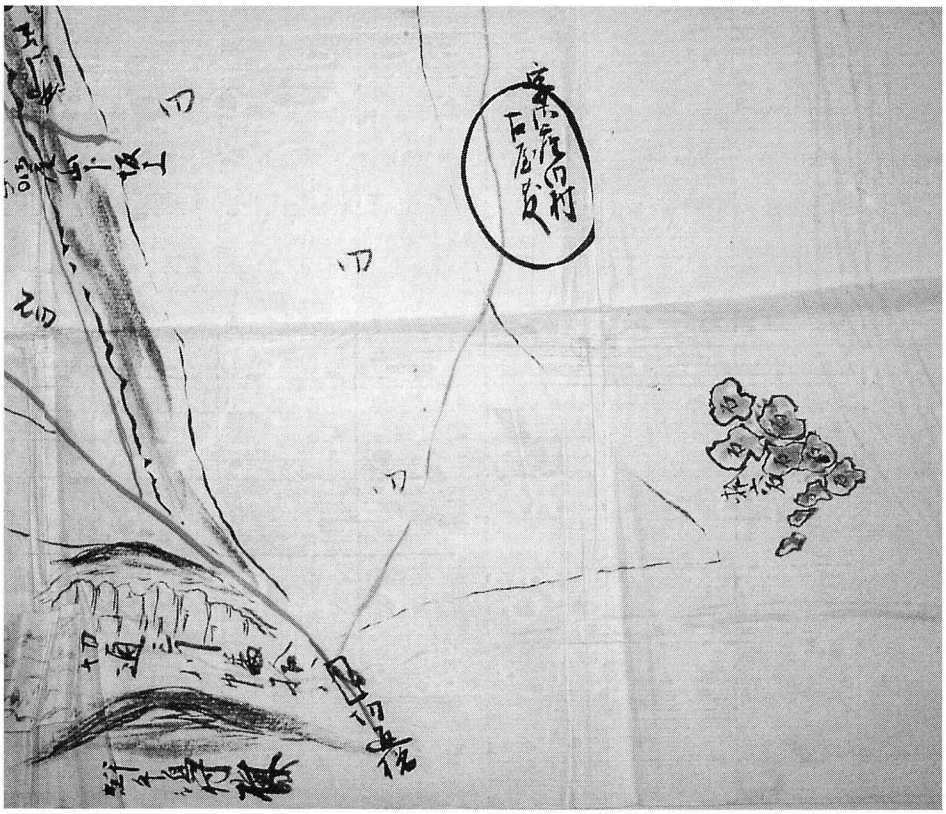












古絵図（1）

（史料４）「巨摩郡下条南割村差出絵図」
（文化３年、1806）
写真提供：韮崎市教育委員会

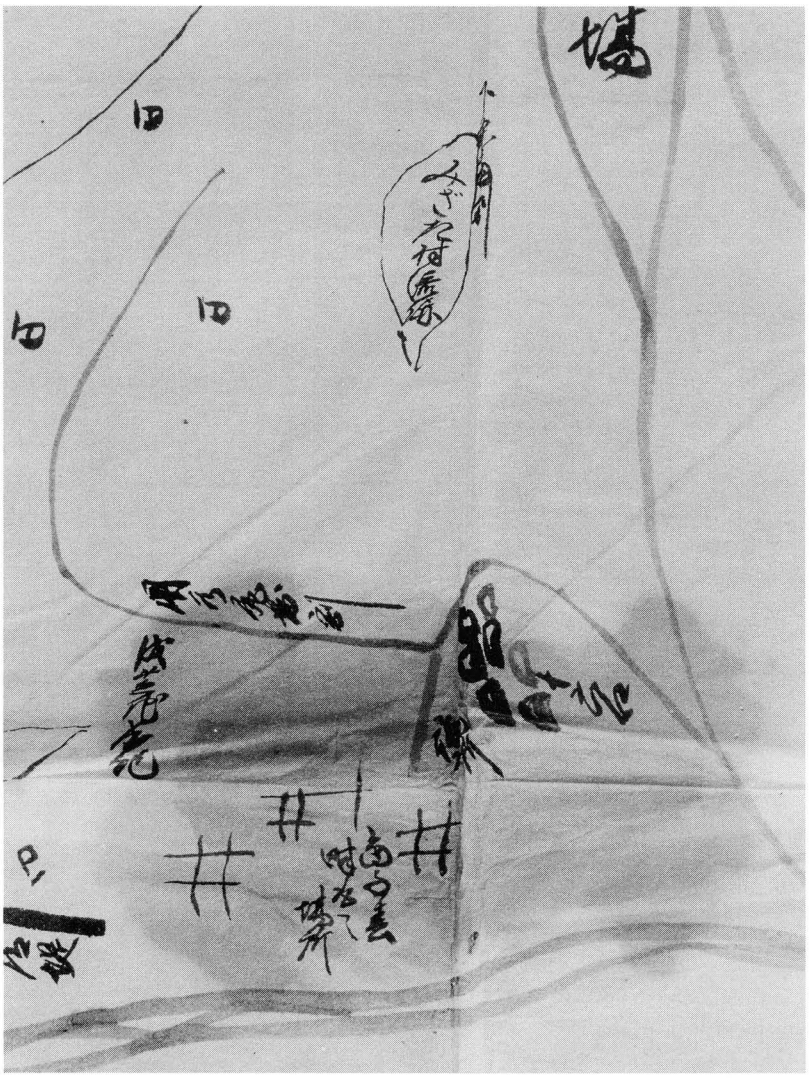
「拾六石」「切通し」「御座山」「字御座田村古屋敷」「字御座田」と記し、台地上に越道村、高岸寺、唐土神社、竜岡将棋頭などが確認できる。

古絵図（2）

（史料５）「巨摩郡野牛嶋村遠藤堰井路並水揚口争論場所御見分用絵図」（嘉永５年、1852）

写真提供：韮崎市教育委員会

「みざた村流跡」「十六石」と記す。



報告書抄録

ふりがな	みさだいせき
書名	御座田遺跡
副書名	多目的広場・総合福祉センター整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	櫛原功一、河西学、新山雅広、鈴木茂、植月学、西本豊弘、金井慎司
編集機関	(財)山梨文化財研究所
所在地	〒406-0032　山梨県笛吹市石和町四日市場1566　TEL 055－263－6441
発行年月日	西暦2007年3月14日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
みさだいせき 御座田遺跡	やまなしけんにらさきしたつおかちょうしもじょうみなみわりあざみさだ 山梨県韮崎市龍岡町下條南割字御座田1895ほか	19207	T11	35°40′30.54767″	138°28′42.45061″	2006年5月8日～8月12日	3214㎡	(仮称)総合福祉センター等整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	CDの有無
御座田遺跡	墓・田畑跡	中世～近世	溝、配石墓、畝状遺構、水田跡	土師質土器皿、内耳土器、常滑甕、凹石、青磁碗、硯、古銭	人骨を伴う土坑1、配石を伴う土坑3	無

要約	石積出、将棋頭などの治水施設で知られる御勅使川沿いにあり、御勅使川氾濫で18世紀末頃流失したと考えられる御座田村の墓域、耕作地跡の一部を調査した。近世以降の水田に伴うと思われる溝のほか、中世と思われる水田畦、溝、人骨を伴う土坑墓、配石墓、集石墓が見つかり、15～16世紀の土師質土器、内耳土器片を中心に、青磁、常滑甕などの中世陶磁器類、茶臼、硯も出土している。わずかではあるが13世紀に遡る資料もあり、御座田村の時期を示唆する。土坑墓は集中し、墓域を形成する。付近の治水施設である堀切の時期を考えるうえで参考になる。

御座田遺跡

—多目的広場・総合福祉センター建設に伴う発掘調査報告書—

平成19年（2007）3月14日　発行

編集　(財)山梨文化財研究所

〒406-0032　山梨県笛吹市石和町四日市場1566　TEL 055－263－6441

発行　峡北広域行政事務組合・韮崎市教育委員会・(財)山梨文化財研究所

印刷　(株)帝京サービス